
転生物語

G M S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生物語

【Nコード】

N4604W

【作者名】

GMS

【あらすじ】

初めて書いたものです。

なので期待はしないでください。

そして、これは多少お気に入り作品に影響されてます。

そして内容としてはマヤの予言の通り滅びた後作者だったらどうするか？

というのを考えて書いています。どうか温かい目で読んでください。ちなみに最低でも毎週土曜に更新予定です。

第1話 エンド・オブ・ザ・ワールド（前書き）

間違いなく下手ですが、楽しんでください。

第1話 エンド・オブ・ザ・ワールド

2011年10月28日 人類は滅亡した。

というわけでおれたちは神様に文句を言いに来ている。

ちなみに筆頭は俺、石崎遊輝。

友達は生きているとき少ないほうだったがこんな理不尽な死があるかという生きているときの知り合いというか学校のメンバー、小学校、中学校で一緒だった同級生を集めて抗議に来てた。どうしてこんなことになったのかというと……

10時間前

「緊急速報、緊急速報

急に隕石がコースを変え地球に向かってきています。

衝突予想時刻は3時間後の午後3時です。

アメリカ政府は核ミサイルで粉碎しようとしたが隕石が大きすぎて破壊に失敗。

もう手段が残されていません。

この隕石の予測落下地点は太平洋の中心部で落ちたら地球の陸地すべてを飲み込むような津波が起きると予測されています。

世界のビップたちはこの時のために作られた地下シェルターに避難しますが、もうどのシェルターも満杯になってしまっています。私たちは滅びゆくしかないのでしょうか。

……………」

そしてあちこちのシェルターを家族とともに回って入れてくれな
いかとまわっていたが
時間が来てしまいお陀仏となってしまうたというわけさ。
そして神様との面会

神「どうしたのだ、そんな血相を変えて」

こいつわかっていってるだろ。

「ふざけんな

どうして俺らが死なないいけないんだよ。

俺らは未来ある若者だったんだぞ。それに来てはいないが俺の母親だつてあと20年は生きてられたはずだ。

こいつらの両親だつてそうだ。

なんで俺たちを殺したんだ。」

神「殺したとは失礼じゃの。しょうがないじゃろ、たまたま死ぬ運命だったんじゃないから。」

こいつ本当に神か。ふざけてる。

「わかった死んだことはとやかく言わない。だがな、短い人生にされたんだ。

対価くらい払ってくれ。」

何か嫌な予感がするがしょうがないきいてやるかの。

神「わかったワシにできることなら何でもしよう。」

「その言葉本当ですね。」

神「ああ神の名に誓おう。」

「では私たちの願いをかなえてください。

そうですね、（私たちの平均寿命・死んだときの年齢）÷10の願

いをかなえてもらうつというのはどうでしょう。」

「むむ、多すぎる気がするがいいじゃろう（これ以上うるさく言われたくないしの）。」

「では私は死んだとき15歳だったので平均を70にしましょう。
(70 - 15) ÷ 10 は 5.5 ですので5個願いをかなえてください。」

余った0.5の願いは弟にかなえさせてやってください。
そうすれば6個弟に願いをかなえてもらえるので。」

神「わかった。」

「では5つの願いを言います。
1つ目 不老不死の命をください。年齢や姿は自分でなりたいた思
った風に変化されるようにしてください。」

神「不老不死か、してもいいがもしどの過ぎたことをしたら即刻地
獄に落とされるぞ。
それでもいいのかの。」

「かまいません、2つ目の願いは
時空間移動能力をください。時間と空間つまり異世界に行ったり過
去に戻ったりする力です。」

神「いいじゃろう」

「そして3つめその世界にあったアイテムを出せるポケットをくだ
さい。」

神「いいじやろつ、ただし具体的にどういふものか思い浮かべないととりだせぬぞ。」

「わかりました。」

そして4つめ遊戯王デュエルモンスターズのカードをアニメ・漫画・ゲームオリジナルも含めて絵柄・効果ごとに10枚ずつください。

5つめは遊戯王G?の世界に転生させてください。日付は十代たち主人公と同じ年に受験できるように生まれさせてください。」

神「わかった、それでいいのだな。いきなりだが行くぞ。」

その瞬間光に包まれ俺は気絶した。

第1話 エンド・オブ・ザ・ワールド（後書き）

感想やどうすればもっとよくなるなどの意見お待ちしています。

第1回主人公プロフィール（前書き）

初期設定です

第1回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長 十代と同じくらい

体重 50キロくらい

顔 ふつう

好きなデッキ ドラゴンデッキ 速攻展開デッキ 強奪デッキ

好きな人 性格がいいやつ デッキの実験に手伝ってくれるやつ

嫌いな人 めんどくさいやつ ナルシスト

特技 フラグメイク【無意識】 読書

プロフィール まず金の荒稼ぎのためにこの世界に

卒業したらどの世界に行くか検討中

性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。

そのうち神に新たなチート能力をもらおうと思って
いる。

前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖
になっている。

第2話 新たな始まり VS 名もなき試験官A（前書き）

第2話です

第2話 新たなる始まり VS 名もなき試験官A

第2話 新たなる始まり

Side 遊輝

痛ってえええー

いったいなんなんだよ。

ってあれいくらなんでも俺小さくないか。

まさか、ってマジで赤ちゃんかよ。なんで赤ちゃんの時から意識あるの。

ま、いいか便利だし。一気に飛ばして9歳、俺に届け物が届くようになった来た。

送り主は天神尾、あの神様か。

一緒に手紙、「おぬしの望みのものじゃ。」みじかいな。

意味は分かったけど、よしデッキを作りまくって試してみるか。

ということとで再び時は流れデュエルアカデミアの試験当日

筆記は9番か結構簡単だったんだけどどこで間違えてんだろ。

遅刻？そんなの会場の近くに止まってたんだ、するわけないだろ。

さて問題はどのデッキを使うか？

まあこれで行くか。シンクロ？エクシーズ？そんなの使うわけないだろ。

使っても闇のデュエルの時だけだな。

アニメではわからなかったが、1桁は順番が遅いらしい。

まあそんなことを考えているうちに俺の番か。

なんだ、クロノス教諭じゃなくて名もなき試験官Aが相手か。

だが本気で叩きのめさせてもらう。

「成績が優秀だったようだが実力はどうか、はからせてもらおう。」

「お願いします。」

「礼儀が正しいのはいいことだ。では始めるぞ。」

「^{デュエル}決闘」

「先攻は私が貰う、ドロー！」

先手必勝とか、ズル！

まあ後攻で万々歳だけど
初期ライフ4000だからすぐ終わるな。

「私はミノタウロスを攻撃表示で召喚！

さらにカードを2枚セットターンエンドだ」

そういえばソリッドビジョンで決闘^{デュエル}するのは初めてだったな
思ったより綺麗だな。

だが貴様に次のターンは来ない。終わらせてもらおう。

「（完全にソリティアだな）俺のターン、ドロー、よしまず強欲な
壺を発動。

2枚ドロー

そして手札から大嵐発動

フィールドの魔法・罫を全て破壊。」

「私の攻撃の無力化が

だが、もう1枚の伏せカードの効果発動

黄金の邪神像の効果により邪神トークンを特殊召喚だ。」

「では、次にライトニング・ボルテックスを発動手札の真紅眼の黒^{レッドアイズ・ブラックドラゴン}竜を墓地に送り試験官のモンスターを全て破壊。」

「なに、私のモンスターが全滅だと。」

「さらに死者蘇生発動、墓地の真紅眼の黒^{レッドアイズ・ブラックドラゴン}竜を特殊召喚。
さらに手札の真紅眼の闇竜を特殊召喚。^{レッドアイズ・ダークネスドラゴン}

そして速攻魔法発動、飛龍天舞。デッキからドラゴン族モンスターを4枚まで送り攻撃力をその枚数×300ポイントアップする！
俺はデッキからドラゴン族モンスターを4枚墓地に送り、攻撃力を1200ポイントアップさせる！

さらに手札の未来融合フューチャーフュージョンを発動。

F・G・Dを指定デッキからドラゴン族モンスターを5枚墓地に送る。

そしてレッドアイズ・ダークネスドラゴンは墓地のドラゴン族モンスター×300ポイント攻撃力が上がる。

墓地のドラゴン族モンスターは10枚よって3000ポイントアップ。

^{レッドアイズ・ダークネスドラゴン}真紅眼の闇竜の攻撃力は2400+1200+3000で6600
^{レッドアイズ・ダークネスドラゴン}いけ真紅眼の闇竜 ^{ダークネス・ギガ・フレイム}。」

「ぐはぁー、まさか1ターンキルをされるとは君は強いね。

お疲れ様、君の勝ちだ

結果は後日連絡される。」

「1ついいですか。」

「なにかね。」

「もし合格したらオシリスレッドに入れてください。」

「何、君だったらライエローに入れるぞ
それでもオシリスレッドに入るといのか。」

「はい、お願いします。」

そう言つて去つて行つた。もちろん俺が。

それにしても弱いねえー

1ターンキルの上、オーバーキルとか
本当に弱い。

手札が良すぎただけか。

でももうちょつといじめたかつた。

ところで会場の皆が恐れるような、尊敬するようなまなざしを向けてくるのは気のせいか。

ま、いいやこれからの人生頑張ろう。

とりあえず、主人公である十代のデュエルまで待とう。

遅刻して遅れてきた十代のデュエルを見た感想は

チートドローをこの目で見たな。

ありゃ運良すぎだろ。

そのあとはさつさと帰つた。

面白くなかつたし。

そして数日後、俺の元にデュエル・アカデミア合格の通知が来た

第2話 新たなる始まり VS 名もなき試験官A（後書き）

なんというか試験官A弱くしすぎた？

第3話 死者蘇生ではない切り札 VS 万丈目 十代編（前書き）

前後編で書いてみました。

第3話 死者蘇生ではない切り札 VS 万丈目 十代編

S i d e 遊輝

計画通り

オシリスレッドだ。

原作に介入しまくってやる。ふっふっふっふ

俺は今船でデュエルアカデミアに向かっている。

前世でも乗り物で酔ったことはなかったからこれぐらいは余裕なのだよ

なんてつたて某山のぐにやぐにや道で攻略本を手にゲームをできたくらいだからな

暇だったのでデッキを作っていた。

カードは時空間移動能力があるからいつでも取り出せる。

今作っているのはオジャ万丈目をぶちのめすためのデッキだ。

しかも時間をかけて傷ぶり、プライドを潰し

地獄の底に叩き落とせるようなデッキだ。

万丈目いわくドロップアウトボーイ、基十代が倒すだろうがな。

そんなことを考えているうちに到着した。

校長の話は無視。とにかく無視。

でもやってるうちにめんどくなったらから仮病で抜け出そうとしたら

何か寒気がしたのでやっぱりやめた

いったいなんだったんだ。あの寒気は

S i d e a u t o

S i d e 神

さぼりは駄目じゃ、さぼりは
だがミスったのう

あのような失敗をしてしまうとはのう
時が来たらきやつに頼むかのう

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

入学式が終わりレッド寮に俺は来た
ちようどよさそうじゃないか
これからの拠点に
接触を取っておくか主人公一味に

「おおーい君」

「なんだああ」

「俺新入生の石崎遊輝っていうんだ
友達になつてくれないか」

「いいぜ、それじゃあさ早速デュエルしようぜ」

本当にデュエルバカだな

「なんか失礼なと言われた気がする」

「きのせいじゃないか（こいつ心読めたっけ）」

「それよりデュエル」「ごめんそれは無理」ちえ、なんでだよ」

「いま新しいデッキ作っててさ、それができたらデュエルしてやるからさ」

「わかった、だけど絶対だぞ」

あれこいつこんなに引き下がりやすい性格だっけ
ま、いいや

「あ、そういえばそのカイザーの弟は」

「なんでそれ知ってるんすか、あなたとは今はじめてあったのに」

「それは単純さ、俺は近いうちにカイザーに挑む
それだけだ」

俺はそれだけ言っただけで部屋に向かった。確か二人部屋だけど一人だったけ

後ろでカイザーって何ソレオイシイノとか
あんな奴がお兄さんに勝てる訳ないっすとか聞こえた気がするけど
無視

あ、よく考えたら俺って万丈目に呼ばれない可能性高くないねえ

そう思ってた時期が僕にもありました

原作通り歓迎会、そして原作で十代に贈られたのとはほぼ同じ内容の手紙いやビデオメール

そして行こうとしたとき十代と会い一緒に来ました。

どうせ途中でデュエル終わるはずだし

だがそうは問屋が卸さない

俺は昼間のうちに校長に許可を得たからな

そしてデュエル開始前

「十代受け取れ」

俺は2枚のカードを投げる

「このカードは？」

「お前のピンチを救うはずだ、デッキに入れてデュエルしてみろ」

「わかった、何だか知らないけどサンキューな」

「ドロップアウトボーイ、俺様をいつまでまたすきだ」

「もう済んだぜ、行くぞ万丈目」

「万丈目さんだ」

「「デュエル」」

原作と同じようにデュエルが進んでいく

そして、原作で死者蘇生を引いたところまできた
本来ならここでストップだが

校長がデュエルをこっそり観戦するという条件で許してくれた

「このカードは、遊輝

お前のカード使わせてもらうぜ

俺は魔法カードミラクルフュージョンを発動」

ここで引いたかさすが主人公流チートドロー
周りの観戦者がきれいってうるさいけど無視
そういえば校長どこ見てるんだろう。

「俺は墓地のE・HEROフレイムウイングマンとE・HEROS
パークマンを除外し

新たなE・HEROを召喚する

来い、E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン」

「攻撃力2500だと」

「十代そいつには攻撃力が上がる効果があるが
今はそんなの関係ないとどめを刺せ」

「物騒な言い方だな

いわれなくてもこれでとどめだ

シャイニング・フレア・ウイングマンで万丈目にダイレクトアタック
シャイニング・フレア・シュートおおおお！」

「万丈目さんだああああ」

次は俺か

「で、万丈目

俺とやるか。まけたばっかだけだな」

「今のはまぐれだ

俺が屑のオシリスレッドに負けるわけがない」

「ふーん

そうか、そんなに死にたいんだな

じゃあ少し、いやかーなーり頭冷やそうか」

某魔法少女と某緑色の電車ライダーのせりふをがったいさせたような
セリフだな

「ふざけるな、死ぬのは貴様だ」

「「デュエル」」

第3話 死者蘇生ではない切り札 VS 万丈目 十代編（後書き）

次回をお楽しみに

次回 第4話 遊輝の新デッキ VS 万丈目 遊輝編

第4話 我流サイバー流 VS 万丈目 遊輝編

Side 遊輝

「デュエル」

「先攻は俺様からだ

俺はヘルソルジャーを攻撃表示で召喚
ターンエンドだ」

俺のターンか、だが

「俺のターンドロー とその前に校長そろそろ出てきていいですよ」

「校長だって、どうゆうことだ貴様」

「俺たちも聞いてないぜ」

みんな驚いてる、それにしてもバカかこいつら

「それに関しては私から説明します。

実は昼……」

回想 Side 校長

「夜、施設を借りたいと？」

「はい、不穏な噂を聞きまして」

「噂とゆうのは？」

「オシリスレッドの私たちが気に入らない一部のオベリスクブルーが私たちにデュエルを仕掛けようというものです。噂レベルですが気になるので本当にそうゆうことが起きた時貸してもらえるようにしてもらいたいのですが」

「引き下がってはもらえなそうですね
わかりました、ただし二つ条件があります。」

「ありがとうございます
それでその条件とはなんですか？」

「一つ目はそのような事態になったとき連絡を必ずください
二つ目はデュエルを観戦してください」

「へ？
連絡はともかく、観戦ですか？」

「はい、君の実力には目を見張るものがあると聞いています
気になっていたのでですよ。
観戦していいですな（わくわく）」

ああ、楽しみだ
もし本当にあったらどのような素晴らしいデュエルが見れるのだろうか

「わかりました
ただ私が呼ぶまで姿を現さないでください
ありがとうございます」

では」

「ちょー」

回想終了

Side 遊輝

「とゆう訳です」

「校長先生がここにいる訳は分かったけど、でも遊輝
どうして最初は隠してんだ」

「なんとなく

あえていうなら見ての通りです」

「見ての通りって、あ」

「なぜ、ここに校長が」

万丈目は放心状態か
ま、いいやるか

「じゃ今度こそ俺のターンドロー
サイバー・ラーヴァを攻撃表示で召喚
そのあと手札を4枚セットしターンエンド」

「サイバーモンスターだと」

「どうして、遊輝が兄さんと同じサ」

「翔君、兄さんと同じって」

「あのようなサイバーモンスターは見たことがない
しかも彼のようなサイバー流の生徒は見たことがない」

上記のような声がしたので一言俺は答えた

「我流ですから」

いろいろ驚く声も聞こえるが無視

「だがそんな雑魚壁にもならん
攻撃力400を攻撃表示だとなめるな
ヘルソルジャーで雑魚に攻撃
ヘルアタック」

「トラップ発動サイバー・サモン・ブラスターを2枚
さらにトラップ発動サイバー・シャドー・ガードナー、王宮のし
きたり」

「さらに機械族モンスターが特殊召喚されたので2枚のサイバー・
サモン・ブラスターの効果で600ダメージ」

「つく、だが攻撃は通る」

馬鹿め

「破壊されたラーヴァの効果でダメージは受けない
さらにデッキのラーヴァを特殊召喚

600ダメージもう一度食らいやがれ」

「つく、カードを1枚伏せターンエンドだ」

主人公補正でも入ったか

「命削りの宝札発動

効果で手札が5枚になるようにドロ

永続魔法前線基地を発動

効果で手札のYドラゴンヘッドを特殊召喚

サイバー・サモン・ブラスターの効果で600ダメージ

残りは2200か

次は？ヘッドキャノンを召喚

？ヘッドキャノンとYドラゴンヘッドを除外し？Yドラゴン・キ

ヤノンを

特殊召喚

もういっちょ600ダメージ

ターンエンド」

つくつくつく

悔しそうな顔だ

何より校長の前で負けそうで絶望し

危ない、危ない、危うく暗黒面に落ちそうだった

「お、おれのターンドロ

「その瞬間罨発動」

つく残り1000

だが俺の勝ちだ

大嵐発動」

俺の王宮のしきたりと前線基地が破壊された
問題ないけど

「さらに、カードを2枚伏せターンエンド」

「俺のターンドロ―

手札の強欲な壺発動

2枚ドロ―

さらに次元誘爆を発動

？Yをデッキに戻しYドラゴン・ヘッドと？・ヘッド・キャノン
を特殊召喚

600ダメージ

まあ、出す必要はねえがZメタル・キャタピラーを召喚

3体合体、XYZドラゴン・キャノンを特殊召喚

はい終わり

じゃまた、オ・ルボワール（ごきげんよう）」

そっいつて某怪盗のように去って行った

後日談だが、俺がレッドなんぞに2敗もといっていたらしい

また、O H A N A S H I してやるか

基、嫌がらせデッキでのデュエルだが

第4話 我流サイバー流 VS 万丈目 遊輝編（後書き）

今週は1話投稿です

第5話 主人公魔改造計画

Side 遊輝

「おい十代いるか」

万丈目とのデュエルから数日後
俺は十代たちの部屋を訪ねた

「なんだ遊輝か、デュエルするのか
するなら早くしようぜ」

「アニキー、アニキみたいなデュエルバカはそうそういないっすよお
で、遊輝君何しに来たんすか」

「おお、遊輝じゃないか、どうしたんだ今日は」

「今日はちよつと十代に話があつてな」

俺はあのデュエル以降、十代たちと仲良くなった
いろいろと話しているうちに翔や隼人とも仲良くなっていた

「俺に？」

「やっぱデュエルか するなら早くやろうぜ」

「いやいやそれもあるんだがほかにもあるんだよ
ちよつと部屋に来てくれないか」

「わかった、じゃその用事がおわったらデュエルしようぜ」

「わかった
じゃあ行こうぜ」

話が終わったので俺と十代は俺の部屋まで行く

「じゃあさっそくなんだが
お前のデッキのことだ」

「俺のデッキ？
それがどうしたんだ」

「いやちよつとな
お前最近強敵に勝ってはいるんだがかなりギリギリじゃないか
運よくいいタイミングでデッキが答えてカードが来てくれて
今は勝っているけどいつか絶対に勝たなくてはいけないデュエルを
するときも来るかもしれない
その時に備えてデッキの強化を一緒にしないかって話だよ
カードは俺のやるからさ」

「そうゆうことが
でも俺は今のままで十分だと思っただけだな」

「おいおい
いつまでそのチートドローが続くのかわからないんだぞ」

「チートドローってなんだよ」

「それは置いていて
じゃあよつと」

「なんだそのでっかいケース
もしかしてそのケースの中身全部カードか？」

「その通り

これを使って十代のデッキをまか…………ゲフンゲフン改造するぞ」

「なんか嫌なこと言いそうになってなかったか」

「気のせいだ
早速やるぞ」

危ない、危ない

「なんか言われた気がするんだけどなあ
まあ、遊輝がそこまで言うならやるか」

助かったあ

「じゃ、やるか
じゃあまずデッキを見せてくれ」

「わかった
これだけどうだ」

「うーん
スタンダードなE・HEROデッキだな
だけどドロー系のカードとかいろいろ足りないな
例えば天よりの宝札これを入れるのはどうだ」

「天よりの宝札、すげえいい効果じゃねえか
サンキュー」

ところでこのヒーローなんだ
エアーマン？見たことないけど効果はすごくつええな」

「デッキサーチ系もお前のデッキには足りないからなやるぜ
あとこれなんてどうだ

フォレストマン デッキと墓地から毎ターン融合をサーチできる力
ードだ

おまけに守備力も高い」

「すげえ

こんなE・HEROがいたのか」

とこんな感じでデッキ改造が進んでいった

「ありがとな遊輝

お前のおかげでいいデッキが作れそうだぜ」

「なあに礼なんていらさないさ
それより最後にこれ

最強クラスの融合で出せるE・HEROだ
出すのも簡単だしやるよ」

「え、いいのか

と言うかこいつら全部効果がえげつないうえに召喚が簡単じゃねえか
ほんとサンキューな」

「だから礼はいらないって
また今度デュエルしようぜ

お前のデッキ改造が終わったらな」

ボタン

ドアを閉めた

「さあてこれからどうなるかな」

第6話 クロノスの策略 VS 明日香 十代編（前書き）

魔改造十代 VS ただの明日香

第6話 クロノスの策略 VS 明日香 十代編

S i d e クロノス

シニョーラ明日香が質問にすらすら答えてるーの
それに比べてシニョール翔はダメダメですーの
やっぱリオシリスレッドはダメダメですーの
それにしてもドロップアウトボーイは生意気ですーの
よくもわたしに恥を書かせてくれましたゝのね
このままで済むとおもったら大間違いですーの
口紅塗ってキスマークつけてこれで出来上がりーの

「ぬほほほほ」

S i d e a u t o

S i d e 翔

「初めて会った時からあなたのことが好きでした
今夜女子寮の裏で待ってます、天上院明日香」

やったああむふふふふふふ

夜

「まあ明日香様からのラブレターですって」

「うん、えへへ、ねえ」

「ばっかね、オベリスクブルーの女王明日香さんが
あんたなんかにはラブレターなんて書くわけないでしょう」

「嘘じゃないよ、今夜女子寮の裏で待ってますって僕のロッカーに
ほら」

ガサガサと出して見せたら変な取り巻きにとられた

「私こんな汚い字書かないわ」

「オシリスレッドの殿方はそんなことすらわからないんですね」

「え、じゃいつたい誰が」

「あらこれ宛名が遊城十代になっているわ」

「え、え、嘘お
ほんとだああ」

ええ、アニキあてえ

「偽のラブレターにつられて」
「のこのこやってくるなんて」
「おまけに間違いだし」

「おちこみそお」

「自業自得よ」

「ねえ」

「このことは学校側に報告しましょう」

「お風呂を除くなんて破廉恥極まりないわ」

「だからのぞいてないって」

「みなさんおそろいで何の騒ぎ」

「ああ」

おもい

「いえ、なんでもありませんわ
おさがせして申し訳ありません」

「そう、ではみなさん早く部屋に戻っておやすみなさい」

「明日香さん」

「わたしにちょっと考えがあるの

誰かが遊城十代を痴漢に仕立てあげるために私の名をかたって呼び
出そうとしたのね

「

S i d e a u t o

S i d e 明日香

面白いじゃない

いづれあいつとは一戦交えなければと思っていたのよ
それに同じ遊輝という名を持つあいつとも

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

丸藤翔は預かっているか

「十代急ぐぞ」

「ああ」

十代と俺は女子寮に言った

話を聞く限りクロノスが原作同様やったらしい

で、俺と十代が明日香とデュエルして二人とも買ったら解放する
か、やるか

とりあえず十代がさきにデュエルだ

船で十代と明日香が湖の真ん中に行った

「いくわよ」

「おおし、来い」

「「デュエル」」

「わたしのターンドロ―
エトワールサイバー召喚」

痴女が現れた

「さらにリバースカードを伏せターンエンドよ」

「次は俺のターンだドロー」

俺はE・HEROプリズマーを召喚

E・HEROプリズマーの効果発動

デッキのバブルマンを墓地に送る

さらに融合を発動

プリズマーと手札のクレイマンを融合

現れよE・HERO アブソルートZero」

あいつの効果いかに生かす

「さらにR・ライトジャスティス発動

その伏せカードを破壊するぜ」

「ドゥーブルパッセが」

「更にミラクル・フュージョンを発動

墓地のバブルマンとクレイマンを融合

現れよE・HEROガイア」

もう明日香の負けか

原作よりはるかにあっさり

そしてあつとゆう間にけたがついたな

「ガイアにはこのカードが融合召喚に成功した時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して

発動する。

このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスター1体の攻撃力を半分にし、

このカードの攻撃力はその数値分アップする。とゆう効果がある十代、新しいカードのまわりはどうだ」

「すげえよく回るぜ
遊輝サンキューな」

「な、遊輝のカード
あの見たことがないカードばっかだと思ったらあなたのだったのね」

「そうだ、それよりお前の負けだ」

「おつとそうだったエトワール・サイバーの攻撃力を半分にするとその後600ポイント攻撃力をアップさせるぜ」

E・HERO アブソルートZero 2500
E・HERO ガイア 2200+600=2800

エトワールサイバー 1200÷2=600

600-2500-2800=-4700
4000-4700=-700

後半1ターンキルか

「やったな十代
次は俺が殺る」

「おいおかしな響きがしたぞ」

「きのせいだ」

「まってる、すぐその痴女から助けてみせる」

「誰が痴女よ」

「ふざけないで」

「あんな露出魔みたいなモンスター使っただけで何言ってるんだ」

「つく」

「アニキ助かったす」

「ゆうきもがんばってくれっす」

「もちろんだ」

「さあやるぞ、痴女」

「だから、誰が痴女よ」

「だからお前だ」

「もう一回言わせるさか」

「この鬼畜女、あんな露出魔みたいなモンスター使っただけで何言ってるんだ」

「あれがサイバーガールよ」

「ああゆう見た目なんだからしょうがないでしょ」

「言い訳はいいわけ」

「デュエルだ痴女」

「いい加減にしなさい
痴女言うな」

「まあいいや」

「このとりやりも飽きてきたし」

「「デュエル」」

第6話 クロノスの策略 VS 明日香 十代編（後書き）

次回 遊輝の攻め

使用デッキは戦士族中心かアンテイクフォートレスです
どっちがいいか感想に書いてくれたら多かったです

第7話 戦士対サイバー・ガール VS 明日香 遊輝編

「デュエル」

さて、この痴女どう滅ぼすか

ううん、よしリスペクトデュエル

あれで行こうかな

いや、めんどくさいし

速攻でつぶすか

「先攻は俺がもらう

俺のターンドロ（成程、この手札なら3ターンかな）

モンスターをセット

リバーズカードを2枚セット

ターンエンド」

「私のターン、ドロー

（ここは一气につぶす）

融合発動

手札のエトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合し
サイバー・ブレイダーを召喚する！」

赤と灰色の痴女

なんだよ、この痴女使い

もしかしくなくても、おもてではあんな風にふるまってるけど
露出狂とかやだなあなんでそんなやつとデュエルを」

「失礼な

私は露出狂じゃない」

「心を読まれた？」

「遊輝、途中から声に出てたぞ」

「あ、そうなんだ
どうでもいいけど」

「まあいいわ

サイバー・ブレイダーで伏せモンスターを攻撃」

馬鹿め、馬鹿め、馬鹿め
なんでそんな単純かね

「な、ビッグ・シールド・ガードナーですって
つく、500ダメージ」

そう、ビッグ・シールド・ガードナーの守備力は2600
サイバー・ブレイダーの攻撃力は2100
よって500の反射ダメージ

「つく、私はカードを2枚伏せターンエンド」

はい終わり

「俺のターンドロー
フォトン・ケルベロスを召喚
こいつの効果によってお前はここのターントラップを発動できない
俺もだけど」

「なんですって」

「そして、速攻召喚発動

ビッグ・シールド・ガードナーを生贄にユーフォロイドを召喚」

「ユーフォロイド、僕と同じロイド系のカード？」

「さらに、俺は超融合を発動

このカードの効果は手札を1枚捨てる。

自分または相手フィールド上から融合モンスターカードに

よって決められたモンスターを墓地へ送り、

その融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

だ」

「それってどうゆうこと」

「こうゆうことだ

俺は自分フィールドのユーフォロイドと痴女のフィールドのサイバ

ー・ブレイダーを融合

こい、ユーフォロイド・ファイター」

「な、私のサイバー・ブレイダーが

あと痴女っていうな」

「ユーフォロイド・ファイターの攻撃力と守備力は

素材にしたモンスターの合計だ

つまり2100+1200で3300」

「『3300だつて（ですつて）』」

「はい終わり

ユーフォロイド・ファイターとフォトン・ケルベロスでダイレクト
アタック」

3500 - 3300 - 1300〃 - 1100

「じゃあ、翔は返してもらうぜ

十代さきに帰るから、早く帰れよ」

「お、おう」

次はどんなデッキでデュエルしようかな

帰宅後、夢の中

「久しぶりじゃな」

「あ、神（笑）さんじゃないですか
何のようですか」

「（笑）はいら「早く要件言え」わかったから殺気を向けるのやめ
てくれんかの

では、いうが、その世界に紛れ込んだあるカードを手に入れてほし
いのじゃ

見つけた後はどうするかはそちの判断に任せる

自分で所持するのもいいし、わしにわたすのも構わん」

「分かりました

で、そのカードは？」

「光と闇の竜（ライト&amp;ダークネスドラゴン）じゃ精霊が宿っている

そのカードの回収の理由はその精霊の力じゃ力が強すぎてのお、マートの羽と言えば分るかの」

「そうゆうことですか

光と闇の竜（ライト&amp;ダークネスドラゴン）その回収理由は大体わかりました

では、そのカードは私があずかっていいんですね」

「わかった、ではな

そのカードは漫画で埋まっていたところにいる頼むぞ」

次の日

俺は家を5時に出て光と闇の竜（ライト&amp;ダークネスドラゴン）の回収に向かった

「たしかここ」と

掘ってみると、やっぱりあった

「ギャアアアアアオ」

光と闇の竜（ライト&amp;ダークネスドラゴン）の精霊が現れた、しかもなぜか暴れているしわ、急に人型に

え、ブラック・ジャック？

縫い目ないけどブラック・ジャック？

「デュエルウウウ」

え、デュエル？

え、もしかしてデュエルで勝たないといけないの？

まあ、勝てるだろうけどさ

「分かったデュエルだな

やるから落着け」

「デュエルウウウ」 「デュエル」

第7話 戦士対サイバー・ガール VS 明日香 遊輝編（後書き）

まさかのデュエル

光と闇の龍（ライト&ダークネスドラゴン）VS 遊輝

第8話 ドラゴン軍団との戦い VS 光と闇の竜（ライト&amp; ダークネス）

今日は漫画のみで出たカードがかなりです

第8話 ドラゴン軍団との戦い VS 光と闇の竜（ライト&ダークネス）

Side
遊輝

「デュエルウウウ」 「デュエル」

「俺のターンから行くぜ」

俺はE・HEROフォレストマンを守備表示で召喚カードを2枚伏せターンエンド」

「ワレ
タア
アア
アン」

マホウ ハツドオオオオ コウリュウノキラメキ

テフダ
ドラゴン
2マイ
ステル

デッキ
ヒカリ
ドラゴン
シヨウカ
アアアン」

な、あいつはライトエンド・ドラゴン

確か、あいつはシンクロだったはず

そうか、漫画では効果モンスターだった

とゆうことは漫画万丈目デツキか

「レッド・ワイアーム ショウカアアアン

ライトエンド・ドラゴン
コウカ
ハツドオオオオ

コウシュ 500サゲ アイテモンスター コウシュ 1500サ

ガル

「ライトニングギャラクティカアアア」

つく、フォレストマンが

「レッド・ワイアーム フォレストマン コウゲキ」

「ヒーローバリア発動
効果により戦闘を無効化」

「ライトエンド・ドラゴン コウゲキ
シャイニングブレスウウウ」

「ヒーロー・シグナル発動
フォレストマンは破壊されるが効果によりクレイマンを守備表示で
特殊召喚」

「カード 1マイ セットオオオオ
ターンエンドオオオ」

「俺のターンドロ
俺は強欲な壺を発動、2枚ドロ
俺は融合を発動

手札のスパークマンとフィールドのクレイマンを融合
来い、E・HEROサンダー・ジャイアント
手札を1枚捨てレッド・ワイアームを破壊」

「レッド・ワイアーム ハカイ プレイヤー 500ダメージ
イイ」

「つく、ライトエンド・ドラゴンにサンダージャイアントで攻撃」

「トラップ ハツドオオオオ
リュウノキリン ジブンフィールド ドラゴン テフダ モドス
ドウレベル ドラゴン テフダ ショウカアアアン
コイ ダークエンド・ドラゴン」

「つく、攻撃をやめ、カードを2枚ターンエンド」

「ワレ ターン ドロー

ダークエンド・ドラゴン コウカ ハツドオオオオ

コウシュ 500サゲ サンダージャイアント ハカイ
ダーククライシスウウウ」

サンダージャイアントが

「サラニ ゴウヨクナツボ ハツドウ 2マイ ドロー

マホウ ハツドオオオオ コウリユウノキラメキ

テフダ ドラゴン 2マイ ステル

デッキ ヒカリ ドラゴン ショウカアアアン」

まずい ライトとダークが出た

「ダークエンド・ドラゴン コウゲキ
ダークパプティズムウウウ」

「ぐわああああ」

つく

4000 - 2100で残り1900か
マズイ

「コレデ トドメダアアア

ライトエンド・ドラゴン コウゲキイイイ
シャイニングブレスウウウ」

「速攻魔法発動

ライトエンド・ドラゴンの元々の攻撃力をエンドフェイズ時まで半分になる。」

「ソレデモ コウゲキ トオル

ノコッタ ライフ ワズカ

オマエ ナニ デキル」

1900 - 2600 ÷ 2 = 600

「そんなことわからないぜ

俺のターンドロ―

俺は命削りの宝札発動

効果で自分の手札が5枚になるよう、自分のデッキからカードをドロ―する」

「コノ タイミング ドロ―？」

「ライトニングボルテックス発動

手札を1枚捨て、お前の場のモンスターをすべて破壊

E・HEROフェザーマン召喚

ミラクルフュージョンを発動、フィールドのフェザーマンと墓地のバーストレディを融合

来い、フレイム・ウイングマン

更に2枚目のミラクルヒュージョンを発動

フレイム・ウイングマンと墓地のスパークマンを融合

来い、シャイニング・フレア・ウイングマン

こいつは、攻撃力が、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき300ポイントアップする。

墓地には3体のE・HERO

よって攻撃力は3400

更に伏せていた装備魔法発動

団結の力をシャイニング・フレア・ウィングマンに装備

これでシャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は4200

いけシャイニング・フレア・ウィングマン

シャイニング・シュート」

「ギャアアアア」

4000 - 4200 = 200

つく、危なかった

それより、ブラックジャックが倒れた

と思ったらカードの中に入って行った

よし、持って帰るか

その日の放課後

光と闇の竜（ライト&ダークネストドラゴン）が起き俺はいきさつを話した

俺の正体

ここがお前の世界とは異世界だとゆうこと

お前の主は性格が全然違うこと

そして、この世界の遊城十代やハネクリボーのこと

そして

「お主が今日から私のマスターということでもいいのだな」

「ああ、これからよろしく」

「ああ、よろしく頼むぞ新しきマスター」

「この世界のマスターのしもべになるのは我には無理だ」

「分かっている」

「では、人間体になっておこう」

「ドラゴンのまま、小さくなることもできるがマスターはどちらがいい」

「ドラゴンのまま小さくなっていてくれ」

「分かった、マスター」

そうゆくと

光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）はそのままハネクリボーほどの大きさにしたようになった

「じゃあ、行くかライネス」

「ああ、マスター」

第8話 ドラゴン軍団との戦い VS 光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）の名前はライ

光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）の名前はライネスです。

これからのデッキでたまに出てきます。

感想待ってます。

それと出してほしい精霊・カードがあったら言ってください。
できる限り善処します。

これからも精霊はたまに増えます。

ここからはネタバレになるので少し間をあけます。

セブンスターズ編で最低3体精霊を増やします。

第9話 万丈目の逆襲 十代VS万丈目

S i d e 遊輝

「翔、十代は？」

「起きなかったからしょうがなくおいてきたっす」

「そうなんだなあ」

俺たちも遅れそうだったからおいてきたんだなあ」

「そうなのか」

今日は月一テストの日

原作通りだと今頃

S i d e a u t o

S i d e 十代

「おおおお

遅刻だ、遅刻だ、遅刻だ」

「ううん」

「遅刻だ、遅刻だ、遅刻だ」

あの人

「ああ、俺こつゆつのに弱いんだよなあ」

「手伝うぜおばさん」

「遅刻しちゃうよ、今日はテストなんだろ」

「遅刻がなんだよ、困っているおばさんを見過ごせないぜ」

あ、あぶねえ

「おおおお、坊や」

「先の事なら何とかなるぜ、俺に任せろな、はははは」

「すまないねえ」

そんなことねえぜ
とりあえず今はおばさんを手伝おう

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

と、こんな感じだな
じゃあテストやるか

.....

なんだこの問題
簡単すぎる

1 問目 この学校のクラス

オシリスレッド・ライエロー・オベリスクブルー

この元となったカードたちのことを何という？

答えは三幻神だろ

ついでに言うならオシリスの天空龍・ラーの翼神龍・オベリスクの
巨神兵だろ

2 問目 デュエルには特殊な勝利条件をもたらすカードがあります
それを一つ答えなさい

答えは封印されしエクゾディア・ウィジャ板・終焉のカウントダウン
ンとかだろ

封印されしエクゾディアはエクゾディアパーツがすべて手札にそろ
うことが条件

ウィジャ板は死のメッセージがすべてフィールドにそろうことが条件
終焉のカウントダウンは20ターン経過が条件
と有名だしなめてんのか

3 問目 次のうちドラゴン族モンスターを選びなさい

A マスクド・ドラゴン

B クリボー

C ワタボン

いやいやいや

ドラゴンってモはや名前に入ってるし

どう考えてもAだろ

4 問目 ブラックマジシャン・ガールは誰のデッキにしか入っていない？

一応俺も持っているけど

武藤遊戯だよなあ

もしかしてこの程度の問題なのかデュエルアカデミアの問題って

とこんな感じで問題を解いていったわけだ

そうすると

原作通り十代が入ってきて

原作通り万丈目と言い合いになって

原作通り空気と痴女にみられて

原作通りパックを買いに行つて

原作通りクロノスが新パックを買い占めて

原作通りトメさんに翔と十代がパックもらつて

違ったとことといえば遊輝、つまり俺も十代に聞かれて新しいのはいらないって答えたことくらいかな

そんでしばらく時間が飛んで

「えええ

なんで万丈目と俺がデュエルを」

「入学試験であれほどの成績を残した君と

オシリスレッドの生徒とはつりあいがとれないーノです

そこでシニョール万丈目こそが君の相手にふさわしいと判断いたしましたーノです

もちろん君が勝てばライイエローに昇格するってことになりまーすですがいかがですーノ遊城十代君

「この申し出受ける気になりますーの」

「で、本音は」

「それはシニョール万丈目にドロップアウトボ―
って何を言わせようとしているーノです
シニョール石崎」

「っち」

「いいぜ

俺、いろんな奴とデュエルをやってみたい
どんな奴からの挑戦でもうけたいんだ!!」

「ならば、シニョール万丈目とのデュエルを受けるーノですね」

「よしこのまえのはまぐれだと証明してやる」

「「デュエル!!」」

「行くぜ万丈目!!」

「万丈目さんだ」

「俺の先行ドロ―」

（クリクリー）

「ハネクリボーか

（最初から来てくれるとは心強いぜ

なら)

E・HEROクレイマンを守備表示で召喚
カードを2枚伏せるターンエンドだぜ」

「雑魚ぞろいの駄目ヒーローデッキめ
お前のもろさを見せてやる
俺のターンドロ―」

ああ、オジャ万丈目
調子に乗ってる

まいっか、どうせ一夜の夢ほどはかない幻想なんだから

「(いきなりクロノス教頭からもらったレアカード)
俺はマジックカード打ち出の小槌を発動」

「何」

「このカードと手札の中のいらないカードをデッキに戻しシャッフ
ルし新たにその枚数分ドロ―する
そして俺は」

「え、4枚もカードを取り換えるの？」

「自分の手札からいらないカードを捨て新たにカードを入れ替える
ことができれば
手札に好カードが入る確実が高くなる」

今のセリフは「え、4枚も……」が翔でその下が空気だ

「しかも打ち出の小槌は使い捨てのカードではない

何度もデッキに戻るにより何度も俺の手中に入る

再び打ち出の小槌を発動

打ち出の小槌ともう1枚のカードをデッキに戻し再び2枚をドロースする

いでよ^{ヴィ}V・タイガー・ジェット攻撃表示で召喚」

「更に手札から永続魔法前線基地を発動

ターンごとに一度手札からレベル4以下のモンスターを一体特殊召喚することができる

このターン^{ダブル}W・ウィング・カタパルトを攻撃表示で特殊召喚

いでよ^{ダブル}W・ウィング・カタパルトそして^{ヴィ}V・タイガー・ジェットと融合」

うわ、名にこの旧型ロボットアニメ的合体

ふるいわあ

^{ヴィダブル}

「VW・タイガー・カタ」その瞬間トラップ発動奈落の落とし穴、そのモンスター除外してもらっぜ」なんだと」

お、十代

こんなの仕掛けてたのかあいつもずいぶんガチデッキに近くなったもんだな

^{ヴィダブル}

「俺のVW・タイガー・カタパルトが

つく、カードを1枚伏せてターンエンド」

あちこちから万丈目真面目にやれとかヤジが飛んでる

「俺のターンドロー

万丈目、また勝たせてもらっぜ

「ガツチャ、楽しいデュエルだったぜ
あと、校長先生

俺はオシリスレッドが好きなんだ
ライエローにはならないぜ」

「そうですか

分かりました、では改めて勝者遊城十代」

「「「「「うおおおおおおお」」」」」

で、十代戦が終わったわけだ
ちなみに俺はモブキャラと戦って勝ったぜ
もちろん圧勝

って俺は誰に話しているんだ？

第10話 闇のデュエル（笑） 十代VSタイタン

Side 遊輝

これはある男の話だ

この男は学生だった

いつものように学校に行った
いつものように授業を受けた

しかし用事があって帰るのが遅れてしまった

その男はしょうがなくいつもと違う道を通ることにした

それは公園の中を突っ切る道だ

その公園に入ったとき何かが変わった

周りに何もなければずなのに何か重圧感が

周りで風が吹いてなく

季節は夏なのに背筋に寒気が

何よりも見えてる光景がおかしい

「いったいなんなんだ、これは
なんなんだよ」

男が見たものそれは

いくつもの死体の山と
それを上から見下している男

男は驚いた
そして男が顔を向けた時更に驚いた
だが驚いたのは一瞬
すぐに気絶をしてしまった

男が見た男の顔は

男自身だった

あとで分かった話だが
その公園は昔の死刑場の跡地の上に作られたらしい
そしてそこで死刑執行を男の先祖がしていたそうだ

だからかもしれない
あんな死体の山を見たのは

「で、どうしてそんなに震えている
この程度の話の一つや二つ、誰でも知っているだろう」

今俺らがしているのは
ちよつとしたゲームだ
カードの束からカードを引いて
そのカードのモンスターのレベルと同じだけ怖い話をするというもの
あれら、タイタン戦前のヤツだ
え、なんでそんなこと覚えているって
転生者歴が長いんだから記憶もあいまいになってるんじゃないかだ
って

まあ普通はな

実はライネスの時の話だ

ライネスっていうのはライト&ダークネスドラゴンの俺の相棒の精霊だ

この小説内での出番はまだろくにないがいつも仲良くしている

この世界の十代やハネクリボーとも仲良くなつたみたいだ

まあ、そのことは置いておいて

あの時ライネスがこの世界に来てしまった理由が原因だ

どうやらあの神（笑）がやらかしたらしい

それで俺はさらなる褒美の一つや二つあってもいいんじゃないかと思つたわけだ

そして髪（誤字に非ず）の近くにいた天使たちも俺の意見に納得してくれて

嫌がる紙（誤字に非ず）を調k、じゃなくて肉体G、じゃなくてごうm、じゃなくてO H A N A S H Iしたわけだ

具体的に言うアイアンメイデンとか電気椅子とかギザギザの板の上で正座させて石を乗つけていくやつとか火あぶりとか拷問車輪とか運命の輪とか人間サンドバックとかetc

ま、天使さんの方が思い切りやってたけど

ラジエルさんとか最後に行くときはもうどこぞの悪役見たく

わああああは、は、は、はとかそんな感じで馬鹿笑いしていたわけ
ほんとストレスたまっていたんだなラジエルさん

ご愁傷様ですって思ったりして

少し脱線したけど

それで新たな能力をもらったわけだ

それは転生前のものを含むすべての記憶の絶対記憶
今後一瞬でも見たものを完全に覚える瞬間記憶能力

いくら覚えても要領に余りができる圧倒的な脳の容量

そして覚えたものの中から必要な記憶を引き出す星の本棚の縮小版
みたいな能力

これらの能力をもらった
今まで話さなかったのは使う機会がなかった
それだけだ
ちなみにこんなにもらえたのは天使さんのおかげ
具体的には言わない
バイ　ハ　ー　もめじゃない位グロかった
言えるのはそれだけだ

「そんなことないっすよ
その話マジで怖いっす
むやみに人に話さない方がいいっすよ遊輝君
呪われるっす」

「そうなんだなあ
その話はやばいんだなあ」

「ああ、さすがの俺もビビったぜ」

「そうか、今考えたんだが」

「「「は!?!」」」

とそんな話をしていると

「おやおや、なんだか楽しそうなことをしてるようですよー?」

出た、大徳寺基アムナエル
今思えばテレビでなんでこんな都合がいい時に出てきたのか不思議
に思う

「どれどれー？　っと……これはどどういうルールなんですかにゃー？」

「えっと、山の中から一枚引いて、そのモンスターカードのレベルに応じた怪談をするんです。」

と、いつの間にか翔が説明をしていた

「じゃあ私も　にゃ？」

「……おおっ！？」

レベル12、《F・G・D》ファイブ・ゴッド・ドラゴンを引き

原作通り廃寮の話を先生がし

原作通り俺がいることを除けば廃寮に行くことになった

時は流れ

次の日の夜

「うおおおお、すっげえ……」

「ひい……アニキい、やめとこつよ探検なんて……」

もし呪われちゃったりしたらどうするのさ！」

「そ、そうなんだな十代。や、やめておいたほうが、い、いいと思うんだな」

すると痴女が来た

「あ、痴女だ」

「誰が痴女よ

あなたたちは何をしているの
この廃寮は立ち入り禁止よ？」

「あ、アニキ、立ち入り禁止だって。じゃあ本当にやめといたほうがいいよ……」

「俺はどっちでもいいと思うけどな」

「何言ってるんすか
立ち入り禁止っすよ」

「そうなんだなあ
怖いのは嫌なんだなあ

それに立ち入り禁止だしやっぱり行くべきじゃないと思うんだなあ」

「別にいいじゃないか

犯罪はばれなきゃ成立しないって言葉もあるし」

「それは犯罪者の理屈っす（理屈なんだなあ）」

と、俺らが話していると

「じゃあ明日香は、そんな立ち入り禁止の寮の前で何してたんだよ」

「私は……」

「兄が、ここで行方不明になったの
いつか帰ってくるんじゃないかって……だから、こうして花を飾

ってるの」

「行方不明だつて……！？」

「それなら、こうしよう。俺たちは、その手がかりを探すために、あの廃寮へ行く。

遊びじゃなく、搜索なら立ち入り禁止の場所に入ったって、そうそう文句も出てこないと思うけど……？」

「ダメよ。クロノス先生がこのことを知ったら、目の仇にされてる十代は、

きつと何らかの処分を喰らうことになるわ」

「……………よく言うじゃないか。『バレなきゃ犯罪は成立しない』
つて」

「アニキも！？」

と話していると

原作通り明日香があきらめた

原作通り廃寮に入る

原作通り10 JOINと書かれた天上院吹雪の写真を見つける

原作通りエトワール・サイバーのカードを見つける

原作通りタイタンとデュエルする場所に行った

原作通り十代とタイタンがデュエルすることになったんだが

今の十代ならタイタンなんて瞬殺だろう

「『デュエル』」

「先手を取らせてもらおう、ドロ―

私はインフェルノクインデーモンを攻撃表示で召喚」

「デーモンデッキか」

「このカードがフィールドに存在するとき

デーモンと名のついたモンスター一体の攻撃力を1000ポイントアップする」

「え」

「ってことは」

デーモンがうなりをあげ攻撃力を上げる

「確かにデーモンデッキは強力なデッキ

だが場のモンスターを維持するためにスタンバイフェイズごとにならイフを払い続けるというでっかい代償がつくぜ」

十代、それはフラグだ

まあ、今の十代には関係ないか

「ふっふっふ、代償だと？」

そんなものは必要ないのだよ、このカードの前ではな
フィールド魔法発動」

まぶしいな

演出はもうちょっと考えてくれ

「なんだ？」

いい趣味してるな

このフィールド魔法

翔たちはうるたえてるな

「さしずめ地獄の一丁目とでも言っておこうか

私はフィールド魔法 パンデイモニウム 万魔殿 - 悪魔の巣窟 - を発動した」

「パンデイモニウム？」

「そうこのカードにより

デーモンデッキを維持するコストは発生せず

デーモンと名のついたモンスターは戦闘以外で破壊されたとき

転生する能力を得るのだよ

さあ、お前のターンだ

おっとこの娘が気になるようならお前の目に入らぬようにしてやる」

赤い骨のようなものが出てきて

痴女の入った棺桶を沈めた

「明日香!!」

「汚いぞ」

「卑怯者」

「なんともいえ、これが闇のゲームだ
なんならお前たちも消してやろうか!!」

「いやこれでいい」

「「え」」

「十代が本気になった

昔の十代だったらきつかったかもしれないが今の十代ならどうだ？」

「成程、今のアニキなら」

「俺はだんだん相手がかawaiiそうになってきたんだなあ」

「俺が勝てばいいんだ、ドロ―

俺は大嵐を発動」

「なに！

バンディモニウム
私の《万魔殿 - 悪魔の巣窟 - 》があ」

「さらに苦渋の選択を発動

俺が選ぶのはこの5枚だ」

万丈目戦と同じE・HERO スパークマン2枚とE・HERO
フェザーマン2枚

それにE・HERO バーストレディ1枚

「E・HERO バーストレディを手札に加えろお」

「2枚目の苦渋の選択を発動

今度はこの5枚だ」

エレメンタルヒーロー
E・HERO ワイルドマン2枚
エレメンタルヒーロー
E・HERO フォレストマン2枚

エレメンタルヒーロー
E・HERO クレイマン1枚

エレメンタルヒーロー
「E・HERO クレイマンを手札に加えるお」

「3枚目の苦渋の選択を発動
最後はこの5枚だ」

エレメンタルヒーロー
E・HERO バブルマン3枚
エレメンタルヒーロー
E・HERO ネクロダークマン2枚

これはまさか俺が考えた十代が使用している中で最も凶悪なあのコ
ンボか？

エレメンタルヒーロー
「しつこいぞおE・HERO ネクロダークマンを手札に加えるお」

「俺は融合を発動
手札のE・HERO バーストレディとE・HERO クレイマン
エレメンタルヒーロー
そしてE・HERO ネクロダークマンを融合
ヴィジョンヒーロー
来いV・HERO トリニティー」

あ、決まった

「このカードが融合召喚に成功したターン、
このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になるぜ
代わりにダイレクトアタックはできないけどな
だけど、さらに命削りの宝札発動

5枚ドロー

更に強欲な壺を発動する

2枚ドロー

今度は天使の施し発動3枚ドローし2枚墓地に送る
手札抹殺を発動

7枚の手札を捨て7枚ドロ

エレメンタルヒーロー

エレメンタルヒーロー

手札のE・HERO エッジマンをE・HERO ネクロダークマ

ンの効果で生贄なしで召喚

デュアルサモン

更に二重召喚を発動

エレメンタルヒーロー

エレメンタルヒーロー

2体目のE・HERO エッジマンを2枚目のE・HERO ネク

ロダークマンの効果で生贄なしで召喚

ミラクルフュージョンを発動墓地のE・HERO バーストレディ

エレメンタルヒーロー

とE・HERO フェザーマンを除外しE・HERO フレイム・

ウイングマンを召喚

エレメンタルヒーロー

更に2枚目のミラクルフュージョンを発動E・HERO フレイム・

ウイングマンとE・HERO スパークマンを融合

エレメンタルヒーロー

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンを召喚

効果により俺の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカー

ド1枚につき攻撃力を300ポイントアップ

墓地には22枚のE・HERO

攻撃力6600ポイントアップだ

そして2枚目の命削りの宝札発動を発動

手札が5枚になるようにドロ

いちぞく けっそく

3枚の一族の結束を発動

このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が

1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在する

その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするだ

よって俺の場のすべてのモンスターの攻撃力2400ポイントアップ

エレメンタルヒーロー

更に団結の力2枚をE・HERO シャイニング・フレア・ウイン

グマンに装備

攻撃力6400ポイントアップ

場を整理すると

エレメンタルヒーロー

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン

2500+6600+2400+6400=17900

E・HERO
エッジマン×2

$$\begin{array}{r} 2600 + 2400 = 5000 \end{array}$$

V・HERO トリニティー

$$\begin{array}{r} 2500 \\ \times 2400 \\ \hline 7400 \end{array}$$

「な、な」

ああ、タイタンビビってる

「くさくさ」

俺のヒーローたち

全員で攻撃だ」

$$\begin{pmatrix} 4 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} 1 \\ 9 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} 7 \\ 4 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \parallel \begin{pmatrix} 1 \\ 4 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$
$$\begin{array}{r} -1400 \\ -5000 \\ \times 2 \\ \hline -11400 \end{array}$$

- 1 1 4 0 0 - 1 7 9 0 0 0 || - 2 9 3 0 0

わ、
す
ご
い

原作とは離れすぎ

十代のデッキなんて1枚も残ってないぜ

[illegible]

すごい悲鳴

「ご愁傷様っす」

「ご愁傷様なんだなあ」

「明日香は返してもらっぜ」

あ、逃げた

「待て」

な、これは

今はデュエル中じゃないぞ

なんで足元のウィジャの目が光っているんだ

第10話 闇のデュエル（笑） 十代VSタイタン（後書き）

今回十代が使ったデッキのコンセプトは
墓地にカードを送りまくってE・HERO^{エレメンタルヒーロー} シャイニング・フレア・
ウィングマンの攻撃力を上げるというものです。
はっきり言って十代だからここまでまわる。

第11話 闇のデュエル VS 闇より深き深淵よりいでし者（前書き）

注意 アスラクラインではありません。

第11話 闇のデュエル VS 闇より深き深淵よりいでし者

Side 遊輝

何故ウイジャの目が光っているんだ
最初に俺が思ったことはそれだった
その後気づいた時には行動を俺は起こしていた

「翔！！隼人！！十代！！」

早く逃げる！！

こいつはタイタンの偽モンの闇じゃない
本物だ、取り込まれるぞ！！」

「……どういうことですか（なんだなあ）（だ）」「」

そんなこといつてるうちに俺と十代
そしてタイタンが闇に取り込まれてしまった

「な、なんだ一体？」

「こ、これは……何が起こったのだあ？」

「闇だ

おそろくさっきのデュエルが原因だろ」

「なんだとお」

「ところで遊輝はなんでそんなことを知っているんだ？」

「本物の闇のデュエルをしたことがあるからだ!!」

「なんだと

闇のデュエルは実在したのか。」

「ああ、おそらくそのうち闇が俺らを
あ、危ない」

謎のバケモンがタイタンに襲い掛かってきたのを俺が助けた

「気をつける

こいつら俺らを食う気だぞ、一か所に集まるんだ」

「分かった」

近寄ってくる闇をハネクリボーが追い払っていく
しかし力がやはり足りない

「ライネス、頼む」

「分かったマスター」

そういうとライト&amp;ダークネスドラゴンのライネスが現れる

「ドラゴン!?!」

「俺の相棒の精霊だ

十代は真の姿を見るのは初めてだったな」

「ああ、こんなにでかかったのか」

そんなこんなで闇から逃げていると
たくさんの闇が一か所に集まっていた

「なんなんだ

一か所に集まっていけど」

「なんだあ

黒いのが固まっていけど」

黒いのが固まっていき
人のか

な、あれは

そんな馬鹿な

「デュエル」

「デュエルをしるというのか
ならおれがやる」

「遊輝」「小僧」「マスター」

「心配するな

絶対に負けない

それに勝たないと帰れそうもないし」

「分かった、気をつけろよ」

「もちろんだ

デュエル」

相手が闇なら遠慮することはない
まがい物とはいえ力がこもっているこのカードを使うぞ
相手の姿がドーマなのも気になるしな

「私のターンドロー

私はフィールド魔法オレイカルコスの結果を発動」

オレイカルコスの結果だと

そんな馬鹿な

なのであのカードが、いや一つ心当たりがあるな

あのバカ神があああああああああああああああああああああ

ああああああああああああ

なんてミスしてくれたんだ

ヤバイ

これは本格的にいかなくては

「オレイカルコス・ミラーを発動

手札のレベル4オレイカルコス・ギガースを2枚墓地に送り

ミラーナイト・コーリングをデッキより特殊召喚

ミラーナイト・コーリングの効果により

ミラーナイトトークンを4体特殊召喚

さらにミラーナイトトークンに銀の盾力ウンターを乗せる

ターンエンド」

ミラーナイト・コーリング 攻撃力0 + 500 ≡ 500

ミラーナイトトークン×4 攻撃力0 + 500 ≡ 500

「なんて高速展開だ

遊輝がんばれ」

「頼むぞ小僧」

「遊輝と呼んでくれタイタン」

「わかった、頼むぞお遊輝」

「もちろんだ

俺のターンドロ―

エルフの剣士^{けんし}を召喚

そしてライフを1000ポイント払いレジェンド・オブ・ハートを
発動」

「レジェンド・オブ・ハートだと
きさま名もなき龍に選ばれたものか」

「知らない！

レジェンド・オブ・ハートの効果によりデッキから「ティマイオス
の眼」「クリティウスの牙」

「ヘルモスの爪」をそれぞれ1枚ずつゲームから除外しデッキの「
ティマイオス」「クリティウス」

「ヘルモス」をそれぞれ1体ずつ特殊召喚」

「なんだこのモンスターあーたちは
見たことがないぞ」

「精霊は感じないが強い力を感じる」

「マスターこのカードは」

「細かいことは気にするな
速攻召喚発動

手札の幻獣王ガゼルを召喚

更に命削りの宝札を発動手札が5枚になるようにドロ―

2枚目の速攻召喚を発動

2体目の幻獣王ガゼルを召喚

3枚目の速攻召喚を発動

2体の幻獣王ガゼルを生贄にブラック・マジシャンを召喚」

現れる黒衣の魔術師

十代とタイタンはブラック・マジシャンの登場に驚いている

「「ブラック・マジシャン！！」」

「更に強欲な壺発動2枚ドロ―

師弟（してい）の 絆（きずな）を発動

デッキからブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚」

今度現れたのは黒衣の魔術師ブラック・マジシャンの弟子

ブラック・マジシャン・ガール

「「ブラック・マジシャン・ガール！！」」

「ブラック・マジシャン・ガールは遊戯さんのデッキにしか入っていないはず

遊輝はなんで持ってるんだ」

「デッキに入れてるのは遊戯さんしかいないだけだろ
世界に1枚じゃブルーアイズや神並みのレア度だぞ」

「それもそう……なのか？」

「まあいい、さらに2枚目の命削りの宝札を発動
ティマイオスの 眼（まなこ）を発動

効果によりブラック・マジシャン・ガールを墓地に送り
来い、 竜騎士（りゆうきし） ブラック・マジシャン・ガール」

ブラック・マジシャン・ガールは進化し
ティマイオスに乗った鎧を着たブラック・マジシャン・ガール
竜騎士（りゆうきし） ブラック・マジシャン・ガールが現れる

「なんなんだあ

あのカードたちはあんなカード見たことないぞお」

「なぜ、お前なんか名もなき三龍を従えているのだ
しかも世界に1枚しかないはずなのに」

「いつとくがコピーじゃないぜ」

一度整理してみよう

自分の場

竜騎士（りゆうきし） ブラック・マジシャン・ガール 攻26

00 守1700

ブラック・マジシャン 攻2500 守2100

ティマイオス 攻2800 守1800

クリティウス 攻2800 守1800

ヘルモス 攻2800 守1800

「ライトニングボルテックスを発動
手札を1枚捨てミラーナイトトークン4体とミラーナイト・コーリ
ングを破壊」

「だが、ミラーナイトトークン4体は鏡の盾カウンターを1個取り
除くことで
破壊を免れる」

「なら、2枚目のライトニングボルテックスを発動
今度こそミラーナイトトークンを破壊」

「なんだと」

十代たちも啞然としている

「これが遊輝の本気？
うおー！ー！上げたたかいてえぜ
ここでたら遊輝デュエルだぞ」

「分かったよ
だがこのデッキを含むいくつかのデッキは闇のデュエル専用だからな
俺のメインデッキとだ」

「おまえらあ
少しは場所を考えろお
いい加減私もおこるぞおお」

「わあつたよ、ヘルモスの効果でデッキのモンスターを3枚除外
このターン3回攻撃ができるようになる
行くぞ止めだ

その際タイタンが明日香に土下座をしているのがシールドだった
そのあとはタイタンと話し合い

タイタンが似非闇のデュエリストをやめること

次にその技術を生かし別の仕事に就くことで見逃すことが決定した
のだが

「何故私はここにいるのだあ

石崎遊輝」

そう今、タイタンは俺の部屋にいる

「頼みがあつてな

実は前からカードをオークションに出そうと思っていたのだが
出し方を知らなくてな

教えてもらおうと思って

あ、そうそう

お前の住居をよーいしてやったぞ

校長を脅したらレッド寮の近くにぼったて小屋を作ってくれた
好きに使っていいぞ」

「ありがたい

礼を言わせてもらおう

だがいいのか私なんかをかくまうような真似をして」

「何を勘違いしているのか知らないが

俺はお前を利用してゐるんだぞ

代わりに情報屋となってくれないか

周りの情報を得るためのパイプがほしいんだ
もちろん金を払うぞ」

「分かった

そういうことにしておこう」

「では頼むぞ」

これで最初にここに来た目的

いや、この世界に来た目的が達成できる
金儲けというな

第11話 闇のデュエル VS 闇より深き深淵よりいでし者（後書き）

《オレイカルコスの結果（けっかい）》効果
フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、
自分フィールド上のモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

また、自分フィールド上の魔法・罨カードゾーンはモンスターカードゾーンとしても扱い、
自分は魔法・罨カードゾーンにモンスターカードを召喚、特殊召喚する事ができる。

自分フィールド上のモンスターカードゾーンと魔法・罨カードゾーンにモンスターカードが存在する場合、
相手はモンスターカードゾーンのモンスターを攻撃対象に選ばなければならない。

このカードは魔法・罨・効果モンスターの効果を受けない。

《オレイカルコス・ミラー》効果

儀式魔法

「ミラーナイト・コーリング」の降臨に必要。

手札かフィールドから、レベルが6以上になるようカードをリリースしなければならない。

このカードはデッキから「ミラーナイト・コーリング」を自分フィールド上に

儀式召喚扱いとして特殊召喚する事ができる。

《オレイカルコス・ギガス》効果

効果モンスター

レベル4/地属性/岩石族/攻撃力400/守備力400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

このカードのコントローラーはドローフェイズをスキップする。

このカードが破壊され墓地へ送られた場合、このカードを特殊召喚する。

その後、攻撃力を500ポイントをアップする。

《ミラーナイト・コーリング》効果

儀式・効果モンスター

レベル6 / 光属性 / 機械族 / 攻撃力0 / 守備力0

「オレイカルコス・ミラー」により降臨

このカードが特殊召喚に成功した時、「ミラーナイトトークン」

（機械族・光・星1・攻/守0）4体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「ミラーナイトトークン」が特殊召喚に成功した時、鏡の盾力ウンターを1個乗せる。

「ミラーナイトトークン」の攻撃力は、ダメージ計算時このカードと戦闘を行う相手モンスターと同じ攻撃力になる。

「ミラーナイトトークン」がフィールドを離れる場合、代わりに鏡の盾力ウンターを1個取り除く。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上に存在する「ミラーナイトトークン」に乗っている鏡の盾力ウンターが取り除かれた時、

そのトークンに鏡の盾力ウンターを1個乗せる。

《レジェンド・オブ・ハート》効果

通常魔法

1000ライフポイントを支払い、自分フィールド上の

戦士族モンスター1体をリリースして発動する。

デッキ・手札・墓地から「ティマイオスの眼」「クリティウスの牙」

「ヘルモスの爪」をそれぞれ1枚ずつゲームから除外する。

その後、デッキまたは手札から「ティマイオス」「クリティウス」

「ヘルモス」をそれぞれ1体ずつ特殊召喚する。

これらのモンスターが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在する

「オレイカルコス」と名のつくフィールド魔法カードを全て破壊する。

この効果は「魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない」の効果を持つ

「オレイカルコス」と名のつくフィールド魔法カードを与える。

《ティマイオス》効果

効果モンスター

レベル8 / 光属性 / 戦士族 / 攻撃力2800 / 守備力1800

このカードは通常召喚できない。

「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。

このカードは表側表示で存在する限り、自分のメインフェイズ時に墓地に存在する

効果モンスターを1体選択してゲームから除外する。

このカードの効果はエンドフェイズ時までゲームから除外した効果モンスターの効果を得る。

《クリティウス》効果

効果モンスター

レベル8 / 光属性 / 戦士族 / 攻撃力2800 / 守備力1800

このカードは通常召喚できない。

「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。

このカードが表側表示で存在する限り、墓地に存在する通常罠またはカウンター罠のカードを1枚選択してゲームから除外する。

する。

このカードの効果は効果処理終了までゲームから除外した通常罠またはカウンター罠のカードの効果を得る

《ヘルモス》効果

効果モンスター

レベル8 / 光属性 / 戦士族 / 攻撃力2800 / 守備力1800

このカードは通常召喚できない。

「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。

このカードが表側表示で存在する限り、自分のデッキからモンスターカードを3枚ゲームから除外する事で、

このターンのバトルフェイズ中に3回の攻撃を行う事ができる。

《師弟（しいてい）の 絆（きずな）》効果

通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が

表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

自分のデッキ・手札から「ブラック・マジシャン・ガール」1体を表側守備表示で特殊召喚する。

《ティマイオスの 眼（まなこ）》効果

通常魔法

自分フィールド上から融合モンスターカードに決められた

融合素材モンスター1体を墓地に送り、

その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

また、自分フィールド上に「オレイカルコスの結界」が存在する場合、

このカードは発動する事ができない。

《竜騎士（りゅうきし） ブラック・マジシャン・ガール》効果
融合・効果モンスター

レベル7/闇属性/ドラゴン族/攻撃力2600/守備力1700

このカードは「ティマイオスの眼」の効果で

「ブラック・マジシャン・ガール」1体を墓地へ送った場合のみ、

エクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

手札を1枚捨てる事で、相手フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。

第2回主人公プロフィール（前書き）

フラグメイカーのはずなのに
まだフラグを立てていない理由判明

第2回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長 十代と同じくらい

体重 50キロくらい

顔 ふつう

好きなデッキ ドラゴンデッキ 速攻展開デッキ 強奪デッキ サイバーデッキ

好きな人 性格がいいやつ デッキの実験に手伝ってくれるやつ
十代

嫌いな人 めんどくさいやつ ナルシスト 馬鹿神

特技 フラグメイク【無意識】 読書

プロフィール まず金の荒稼ぎのためにこの世界に卒業したらどの世界に行くか検討中
性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。
前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖になっている。

最近十代との友情に芽生え前よりもデュエルが好き
になってきている

いつも面倒をかける馬鹿神が嫌い
だが、そのたびに天使とともに折檻して新しい能力

をもらっている

拷問だが

能力値（新規）

フラグメイカーレベル 1 4

チートドローレベル 1 2 5 ただしキレると測定不能に

デッキ構築レベル 1 2 0

マッドサイエンティストレベル 1 5

魔力 1 5

気 1 5

レベル1は非表示

能力（新規）

第1話参照

不老不死 特殊な不老不死で肉体年齢を任意で変化できる

神様曰くやりすぎると地獄に即刻落とされる

時空間移動能力 時間と空間を超える能力

時間を超える能力は過去・未来に行ける

空間を超える能力はドラえもんのどこでもドア強

化版

二つを合わせることで異世界に行ける

4次元ポケット改 ドラえものの4次元ポケットみたくなんでも出せるポケット

神様がいろいろ入れてる

ただしその世界にあったものしか取り出せない

第10話参照

絶対記憶能力 転生前の記憶を含むあらゆる記憶を絶対に忘れる能力
くなる能力

ただし覚えすぎるとオーバーヒートする

瞬間記憶能力 一瞬でも見たものを完全に覚える能力

光の速さでも見れば覚える

圧倒的な脳の容量 この世のすべてを覚えても潰えない脳の容量
起こらない これのおかげで絶対記憶能力のオーバーヒート

地球の本棚（弱^{ほし}） 地球の本棚の縮小版

自分がおぼえているものの中から必要な知識を引き出す能力

地球の本棚と違い問題などの答えなどを問

題を考えるだけで

知識を呼び出せる

描写をしないが第11話の件で神を天使とともに折檻して手に入れた能力

魂容量10倍

自分の本来の魂の容量を10倍ほどに増やす
これによりより強い力を入手可能に

限界点突破

鍛え続けることで限界なく際限なく強くなる能力

魔力+気

ネギまの一般魔法先生並みの魔力と気を使えるよ

うになった

普通はあまり上がらないが限界点突破により魔力

を使えば使うほど

気を使えば使うほど最大値が上がる

ダイオラマ魔法球生成

自分の望むダイオラマ魔法球を作る能力

例としては

中では年を取らない1時間が1日になる別荘

トリコの食材が出てくる別荘

いろいろな武道を手ほどきしてくれる口ボ

が
いる別荘など

第2回主人公プロフィール（後書き）

主人公がチートになっていく気がする今日このころ
もちろんあのバカ神がこれで止まりはしません
何をするかはネタバレなので言いはしませんが

ちなみに十代のチートドローレベルも上がっています
原作ではレベル現時点で17くらいだとすればすでに35くらいです
ちなみにレベルは俺の主観です

第12話 制裁デュエル 十代&遊輝VS迷宮兄弟

Side 遊輝

「ここを開ける！ここを開けるんだ！」

来たか

だがトラップ発動

盗聴器+テープレコーダー

こいつらによりこの頭のいかれたアカデミア倫理委員会の犯罪まがいの言動を証拠として残せるのだ

ちなみにこれはダイオラ魔法球生成（第2回主人公プロフィール参照）で作った

「諜報活動にピッタリな魔法球」の中に入ったらなぜかあった
便利だなあ

これで「あらゆる呪いの解除が可能な魔法球」とか作ったら何が入っているんだか

「断る！！」

俺は不審者を家に入れる趣味はない」

もちろんすでにテープレコーダーはオンだ

このいかれた野郎どもはおそらく次の発言で自滅する

「私たちはアカデミア倫理委員会だ！！」

速やかに開けないとこのドアをダイナマイトで爆破する！！」

はいまず1つ犯罪発言もらいました

ありがとうございます

「分かりました！出ますよ、出ます」

でたら校長室に呼ばれ言いたい放題言われた

「で、制裁デュエルですか

それはいいですけどここからは俺のターンだ
まずはこれを聞け」

『私はこのクロノスという教員に雇われたあ
遊城十代という小僧を潰してくれとなあ』

校長たちの顔が青くなっている

「次はこれだ」

『私たちはアカデミア倫理委員会だ！！

速やかに開けないとこのドアをダイナマイトで爆破する！！』

また青くなった

いや青を通り越して白色になっている

「アカデミアの大人は法律を知らないのか

どう聞いてもクロノス教員は今はいい人だが少し前は悪い奴だった
タイタンに十代を潰せと言ってるようにしか聞こえなかったが」

「捏造だ！！」「捏造なのーね」

「じゃあ本人に来てもらうか
今この学園にいるぞ

校長は分かっているようだがな

次にアカデミア倫理委員会の発言だ

アカデミア倫理委員会は爆発物取締法というのを知らんのか

それにこれは脅迫だろう

よって制裁デュエルに一つくらい提案をしてもいいだろう

それで+・0だ

条件はこちらで選んだ代表2名とそちらが選んだデュエリストでデュエル

もし、奇跡的に、百億分の一にもこちらが負けたら俺、十代、翔は退学

勝ったら、クロノス教員の給料の90%を3か月間俺、十代、翔に渡す

以上だ

反論は認めない

もし約束を破るようだったら海馬コーポレーションにさっきの音声を送り

世界中のマスコミにも送る

では俺は帰る

ちなみに代表者は俺と十代だ

強い奴をよこさないと5ターン目に終わるぞ
さらばだ」

後ろで騒いでた全員を置いて

寮に帰った

その後

「おい十代

デッキ調整のためにデュエルだ」と言っでデュエルしたり

翔のトラウマの話を聞いて十代とカイザー（笑）がデュエルをしたり
原作イベントが起きて制裁デュエルの日になった

「相手は、あのデュエルキング、武藤遊戯と戦ったことのある伝説のデュエリストナノーネ。」

あ、そうかい

あのハゲ二人か

「我ら流浪の番人」

「迷宮兄弟」

「お主達に恨みはないが……」

「故あり、対戦する」

「我らを倒さねば……」

「道は開けん！」

「いざ、勝負！」

雑魚め

「では、両者
位置について」

二人でデッキを合わせている
二人ともE・HERO デッキだ
しかも俺のデッキにはE・HERO と対をなす奴らもデッキに入
れている

そう悪魔のHERO、イービルヒーロー E・HERO だ
くつくつく

あがいてくれよ

闇（やみ）の 守護神（しゅごしん） - ダーク・ガーディアン
を出せたらとっておきを見せてやるからな

「タッグパートナーへの助言は禁止なのーね、パートナーのフィールドと墓地も自分のフィールドと墓地として扱えるーの、両チームライフポイントは8000なのーね、では！！」

「「「デュエル！！！！」」」

「俺のターンドロー

ダーク・フュージョンを発動

手札のE・HERO フェザーマンとE・HERO バーストレ
イを

暗黒融合

イービルヒーロー

来いE・HERO インフェルノ・ウイング

更にミラクルフュージョンを発動

墓地のE・HERO フェザーマンとE・HERO バーストレ
イを

融合

エレメンタルヒーロー

来いE・HERO フェニックスガイ

リバースカードを1枚セットターンエンドだ」

なんだあのHEROは

すげえ禍々しいぞ

それに暗黒融合って

などなどとうるさいが十代は気にしていない

実は俺の正体を告知からこの日までに話したからだ

その時いくつかのカードを見せた
だから十代とは本気でデュエルができるし
真の俺のデッキのいくつかをつかえる

「私のターン、ドロー！」

迷って頭に書いている方

「私は地雷蜘蛛を召喚

私はこれでターンエンドだ」

それだけか

「行くぜ、俺のターン！ドロー！」

始まる魔改造十代による悪夢のレクイエム

悪夢のパーティー

悪夢のダンス

もうだれにも止められない

「強欲な壺を発動

2枚ドロー

更に融合発動

手札のE・HERO フェザーマンとE・HERO バーストレ
イを

融合

来いE・HERO フレイム・ウィングマン
エレメンタルヒーロー

更に2枚目の融合を発動するぜ

E・HERO フレイム・ウィングマンとE・HERO スパーク
マンを融合

来いE・HERO エレメンタルヒーロー シャイニング・フレア・ウィングマン

更にミラクルフュージョンを発動

遊輝のE・HERO フェニックスガイと墓地のE・HERO ス

パークマンを融合

エレメンタルヒーロー

来いE・HERO シャイニング・フェニックスガイ

すげえ、あんな強そうな融合モンスターが3体も

迷宮兄弟びびってねえか

あの二人強すぎる

なんだ、あの引きの良さ

俺にも分けてほしいぜ

とか聞こえる

それにしてもなんで観客がいるんだ？

「命削りの宝札を発動

手札が5枚になるようにドロー

更にカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

宮って書いている方

「私のターン、ドロー！」

「私はカイザー・シーホースを召喚」

「更に魔法カード、生け贄人形を発動

自分の場のモンスター1体を生贄にすることで手札からレベル7の
モンスターを特殊召喚する

私は兄者の場の地雷蜘蛛を生贄に手札から風魔神・ヒューガを特殊
召喚」

「すまぬ、兄者」

「いや、お前のためならば犠牲にともなう」

「だが、それでは私の気がすまない」

私は兄者を対象に魔法カード、闇の使命者を発動」

「カード名を1枚選択、そのカードが相手のデッキに入っていれば、相手はそのカードを手札に加える
私が選択するのは雷魔神・サンガ」

「ふふふ、ありがたい」

勿論、我がデッキに雷魔神・サンガは私のデッキに入っている」

せこいよな、これって

絶対に入ってるに決まってるじゃん

「私はこれでターンエンド。」

「俺のターンドロ」

俺は命削りの宝札を発動
5枚ドロ」

「やるのか遊輝」

「ああ、十代

あいつらのカードを利用しつつくして潰す」

「ははははは」

十代に苦笑いされるとは
なんかやな感じ

「俺はE・HERO エレメンタルヒーロー バブルマンを召喚
更に速攻召喚発動

2体目のE・HERO エレメンタルヒーロー バブルマンを召喚
そして前のターンに伏せておいた超融合を発動

超融合の効果は
手札を1枚捨てる。

自分または相手フィールド上から融合モンスターカードに
よって決められたモンスターを墓地へ送り、
その融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発
動する事はできない。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)だ
俺は俺のE・HERO エレメンタルヒーロー バブルマンと貴様のカイザー・シーホースを
超融合

来いE・HERO エレメンタルヒーロー ザ
The シャイニング

更に2枚目の超融合を発動
俺は俺のE・HERO エレメンタルヒーロー バブルマンと貴様の風魔神・ヒューガを
超融合

来いE・HERO エレメンタルヒーロー グレイト
Great TORNADO
E・HERO エレメンタルヒーロー シャイニング・フレア・ウィングマンと
E・HERO エレメンタルヒーロー シャイニング・フェニックスガイは

自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついた
カード1枚につき攻撃力を300ポイントアップという効果を共に
持っている

墓地のE・HEROは6枚
攻撃力1800ポイントアップ
E・HERO エレメンタルヒーロー ザ
The シャイニングは

自分の「E・HERO」と名のついたモンスターの数×300ポイントアップするという効果を持っている

除外されているE・HEROは4枚

攻撃力1200ポイントアップ」

E・HERO The シャイニング

攻撃力 2600 + 1200 = 3800
E - HERO インフェルノ・ウィング
イービルヒーロー

E・HERO Great TORNADO
エレメンタルヒーロー グレイト トルネード

攻撃力 2800
エレメンタルヒーロー
E・HERO シャイニング・フェニックスガイ

攻撃力 2500 + 1800 = 4300
E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン
エレメンタルヒーロー

「いけ
フルバースト
全弾発射」

[illegible]

4	8
2	0
0	0
0	0
-	-
2	3
1	8
0	0
0	0
2	4
1	2
0	0
0	0

2 1 0 0 - 2 8 0 0 " - 7 0 0
- 7 0 0 - 4 3 0 0 " - 5 0 0 0
- 5 0 0 0 - 4 3 0 0 " - 9 3 0 0

「では校長

さらばです

もう二度とあのようなことをしないように言っといてください
そして、課題の追加とかはしないでくれよ」

それだけ言つと俺は帰つた

十代からそのあとのことを聞くと

課題がなかった以外原作と変わらなかった

第12話 制裁デュエル 十代& a m p・遊輝VS 迷宮兄弟（後書き）

ということだ

十代と遊輝の二人による蹂躞の話でした

もうこのペアに勝てるペアはほとんどいないんじゃないか？

これが魔改造とチートの力だ

わあっはっはっはっ

なんてね

第13話 冬休み前の決闘 VS 十代 第1戦 罪と光炎

Side 遊輝

制裁デュエル後のことを簡潔に話そう

三沢と万丈目のデュエルは原作通りだった

SALのイベントはすでに研究所を海馬さんに匿名でちくって消しておいたからなし

以上だ

短いって

だってこれから

原作とは違う激戦をしまくるんだから

今、俺と十代はダイオラ魔法球の中にいる

ちなみにこの魔法球はダイオラ魔法球生成で「デュエルにピッタリな魔法球」を作ってきたものだ

「十代デュエルしないか」

「いいぜ、やろう

それにしても珍しいな、お前からデュエルしようだななんてどうかしたか」

実は十代に話してから十代が

老化しないし時間の流れが違うなんて便利な場所夢みたいじゃねえかデュエルしまくれるし

とか言つてよく来て俺とデュエルするようになっていた

「実はな冬休みに出かけようと思うんだよ異世界に

ほら、俺不老不死だから何年も出てもばれないだろ、時間操作もで

きるし

だからしばらく出て行って修行しようと思っただ
つてことで出ていく前に何戦もしてから修行に行こうかと」

「そういうことが

分かったぜ、とりあえず何戦するんだ？」

「10戦でどうだ」

「じゃあさっそくやろうぜ」

「デュエル」

「俺のターンからだ、ドロー！」

俺はフィールド魔法 シン Sin ワールド World「OCG版」を発動
更に手札の シン Sin サイバー・エンド・ドラゴン「映画版」の効果
を発動

エクストラデッキのサイバー・エンド・ドラゴンを墓地に送り特殊
召喚

更に手札の死者蘇生を発動

墓地のサイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚

レベル10サイバー・エンド・ドラゴンと

レベル10 シン Sin サイバー・エンド・ドラゴン「映画版」をオー
バーレイ

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築

エクシーズ召喚 超弩級砲塔列車グスタフ・マックス」

ゼアルで勘違いで遊馬を襲った神月アナが使ったチート級エクシ
ーズ

効果がヤバイ

「げ、そいつかよ」

「超弩級砲塔列車グスタフ・マックスの効果を発動
オーバーレイユニットを1つ取り除き2000ダメージを与える」

4000 - 2000 = 2000

「つく」

「リバースカードを3枚伏せターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

俺は天使の施しを発動

3枚ドローし手札を2枚捨てる

さらに融合を発動

手札のE・HERO フェザーマンとE・HERO バーストレデ

イを融合

エレメンタルヒーロー

来いE・HERO フレイム・ウィングマン

更に2枚目の融合を発動するぜ

エレメンタルヒーロー

E・HERO フレイム・ウィングマンと手札のE・HERO ス

パークマンを融合

エレメンタルヒーロー

来いE・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン」

普通ならヤバイが

「甘い!!」

速攻魔法Sin (シン) Cross (クロス)を発動

効果により墓地のSin サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚

更にトラップ発動 Sin Claw Stream

このカードは自分フィールド上に「Sin」と名のついたモンスターが

表側表示で存在する場合に発動する事ができる

効果によりE・HERO^{エレメンタルヒーロー} シャイニング・フレア・ウィングマンを破壊

だけど今の十代なら

「なら強欲な壺を発動
2枚ドロ

更にミラクルフュージョンを発動

墓地のE・HERO^{エレメンタルヒーロー} フレイム・ウィングマンとE・HERO ス
パークマンを融合

再び現れる

E・HERO^{エレメンタルヒーロー} シャイニング・フレア・ウィングマン

やっぱり

「E・HERO^{エレメンタルヒーロー} シャイニング・フレア・ウィングマンは墓地の
E・HEROと名のついたカード1枚につき攻撃力を300ポイントアップする

俺の墓地には2体のE・HEROがいる

よって攻撃力3100

いけE・HERO^{エレメンタルヒーロー} シャイニング・フレア・ウィングマンで攻撃
シャイニング・シュート

だが防ぐ

「トラップ発動

くず鉄の力カシを発動

攻撃を防ぐ」

「そいつかあ
ならカードを1枚伏せターンエンド」

「Sin サイバー・エンド・ドラゴンはSin (シン) Cr
oss (クロス) の効果で除外される
俺のターンドロー

超弩級砲塔列車グスタフ・マックスの効果を発動
オーバーレイユニットを1つ取り除き2000ダメージを与える」

「そうはさせないぜ
地獄の扉越し銃を発動

ダメージはお前に受けてもらうぜ」

4000 - 2000 = 2000

「やっぱりそれが
強欲な力ケラを発動
ターンエンド」

「俺のターンドロー
俺も強欲な力ケラを発動してターンエンドだ」

「俺のターンドロー
強欲な力ケラに強欲カウンターを1つ乗せる
カードを伏せターンエンドだ」

「俺のターンドロー
強欲な力ケラに強欲カウンターを1つ乗せるぜ

更に壺の中の魔導書を発動
3枚ドロ―

「俺も3枚ドロ―」

「エレメンタルヒーロー E・HERO バブルマンを召喚
超融合を発動

手札を1枚捨て
エレメンタルヒーロー
俺のE・HERO バブルマンと遊輝の超弩級砲塔列車グスタフ・
マックスを

超融合
エレメンタルヒーロー
来いE・HERO ガイア

「つち」

「2体のモンスターで攻撃だ」

「手札の速攻のカカシを墓地に捨て効果を発動
戦闘を無効化」

「ならターンエンドだ」

「俺のターンドロ―
超欲強欲なカケラに強欲カウンターを1つ乗せる
超欲強欲なカケラを墓地に送り2枚ドロ―
更に手札のSin レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜「OCG版」の効果を発動
デッキの真紅眼の黒竜を除外し

特殊召喚
更に可変機獣 かへんきじゅうガンナードラゴンを妥協召喚
レベル7可変機獣 かへんきじゅうガンナードラゴンとレベル7Sin シン真紅眼の

レッドアイズ・ブラックドラゴン

黒竜「OCG版」をオーバーレイ

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築

エクシーズ召喚

来い No.11ビッグ・アイ

更にトラップ、闇次元の開放を発動

効果により除外されている真紅眼の黒竜を特殊召喚

レッドアイズ・ブラックドラゴン

二重召喚を発動

かへんきじゅう

2体目の可変機獣 かへんきじゅう ガンナードラゴンを妥協召喚

レッドアイズ・ブラックドラゴンがへんきじゅう

レベル7真紅眼の黒竜とレベル7可変機獣 ガンナードラゴンをオーバーレイ

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築

エクシーズ召喚

来い No.11ビッグ・アイ

2体のビッグ・アイの効果をそれぞれ発動

エクシーズ素材をそれぞれ1つ取り除き

相手のモンスターのコントロールを得る

エレメンタルヒーロー

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマンと

エレメンタルヒーロー

E・HERO ガイアのコントロールを得る

いけ2体でダイレクトアタック

2000 - 2500 = 500

- 500 - 2200 = - 2700

「くっそお、負けたあ」

「そういうなって

俺もかなり危なかったぜ

じゃあ少し休憩してから次のデュエルをしようぜ」

「次は俺が勝つぜ」

「いや、今度も俺が勝たせてもらっ」

これ以降はいい合いなのでカットします（作者）

第13話 冬休み前の決闘 VS 十代 第1戦 罪と光炎（後書き）

《Sin（シン） Cross（クロス）》効果

速攻魔法

自分の墓地に存在する「Sin」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを召喚条件を無視して自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される。

チートドローどうしが戦うと大変なことに

ちなみに十代には未来どんなことがあるかは話していません

なので未来に出てくる1点物のレアカードだとそうゆうカードを使うとき言っています

最後にこの世界ではといって

第1回アンケート

今回はアンケートを取りたいと思います

アンケートの項目は

遊輝のパーティーに入る精霊の募集です
項目は

- 1つ目 ナンバー1 スターダスト・ドラゴン
- 2つ目 ナンバー2 N O . 3 9 希望皇ホープ
- 3つ目 ナンバー3 可変機獣ガンナードラゴン
- 4つ目 ナンバー4 E - H E R O イービルヒーロー インフェルノ・ウィング
- 5つ目 ナンバー5 その他

最も多かった意見を採用します

締め切りは12月1日です

その他に意見が入ったときは項目を追加します
途中経過は後書きにて報告します

第14話 冬休み前の決闘 VS 十代 第2戦 究極 第3戦 暗黒と神鳴（前

魔を切り裂く神鳴流
なんてね

第14話 冬休み前の決闘 VS 十代 第2戦 究極 第3戦 暗黒と神鳴

Side 遊輝

「十代そろそろ2戦目やろっ」

俺の映画OCG混合Sinデッキと十代のシャイニング・フレア・ウイングマン主体のE・HEROデッキの激戦から数分後

「よし今度は勝つぞ
遊輝、デュエルだ」

「「デュエル」」

「今度は俺のターンからだ
融合を発動するぜ」

手札のE・HERO スパークマンとE・HERO クレイマンを
融合

エレメンタルヒーロー
来いE・HERO サンダー・ジャイアント「OCG版」
さらに2枚目の融合を発動するぜ

手札のE・HERO スパークマンとE・HERO エレメンタルヒーロー ネクロダーク
マンを融合

エレメンタルヒーロー
来いE・HERO ダーク・ブライトマン
俺はカードを1枚伏せターンエンドだ」

「俺のターンドロー」

え、これ何？

「俺は苦渋の選択を発動
俺が選ぶのはこいつらだ」

封印されしエクゾディア^{ふういん}

封印されし者の右足

封印されし者の左足

封印されし者の右腕

封印されし者の左腕

「え、まじかよ
そのデッキって」

「分かってる
言いたいことは分かる

でも適当に選んだらこのデッキだったんだ
すまん

本当にすまん」

「分かったよ遊輝
とりあえず封印されし者の左腕を選ばせ…………orz」

「死者転生を発動手札を1枚捨て
封印されしエクゾディア^{ふういん}を手札に
カードを2枚伏せターンエンド」

「おれ「トラップ発動補充要員
封印されし者の右足と封印されし者の左足と封印されし者の右腕を
墓地から手札に
俺の勝ち」やっぱり

そのデッキはお願いだからもう使わないでくれ

頼むから使わないでくれ

もうそのデッキとはやりたくない
エクゾディア怖い」

ああ、十代が壊れるううううう

「分かったから十代

頼むキャラ崩壊しないでくれ」

それから約1時間後

「デュエルやろうぜ」

あれから頑張つて説得したら

何とか復活しました

「今度は俺のターンから行くぜ

俺のターンドロ―

俺は手札抹殺を発動

手札を5枚捨て5枚ドロ―」

「俺も手札を5枚捨て5枚ドロ―するぜ」

「更に墓地に送られた

2枚の暗黒界の狩人 ブラウと暗黒界の軍神 シルバの効果を発動

2枚の暗黒界の狩人 ブラウで2枚ドロ―

更に暗黒界の軍神 シルバの効果でこのカードをフィールドに特殊
召喚

暗黒界の門を発動する

更に効果を発動

墓地の暗黒界の狩人 ブラウを除外し手札の暗黒界の武神 ゴルドを墓地に送る

1枚ドロー

墓地に送られた暗黒界の武神 ゴルドの効果を発動

このカードをフィールドに特殊召喚

レベル5暗黒界の軍神 シルバとレベル5暗黒界の武神 ゴルドをオーバーレイ

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築

エクシーズ召喚 燃え上がれ No.61 ヴォルカザウルス

更に2枚目の手札抹殺を発動

5枚捨て5枚ドロー

捨てられた2枚目の暗黒界の軍神 シルバと暗黒界の武神 ゴルドを特殊召喚

更に強欲な壺を発動

2枚ドローする

カードを4枚伏せターンエンド」

「俺のターンドロー

大嵐を発動するぜ

魔法・トラップをすべて破壊」

「そうはさせない

マジック・ジャマーを発動

手札を1枚捨て効果を無効化」

「なら2枚目の大嵐を発動するぜ
今度こそ破壊だ」

「ならば、こちらもだ
2枚目のマジック・ジャマーを発動」

「3度目の正直だ
3枚目の大嵐を発動するぜ」

「十代がそんな言葉を知ってるとは驚いたな
うち、その大嵐は無効化できないな」

「失礼だな

俺だつてこれくらい知ってるつうの
俺は苦渋の選択を発動するぜ
選択するのはこの5枚だ」

エレメンタルヒーロー
E・HERO スパークマン3枚
E・HERO クレイマン1枚
E・HERO エッジマン1枚

どれ選んでも同じだろ

エレメンタルヒーロー
「E・HERO スパークマンを選ぶ」

「命削りの宝札を発動するぜ
手札が5枚になるようにドロ―
融合を発動

エレメンタルヒーロー
手札のE・HERO スパークマンとE・HERO フェザーマン
エレメンタルヒーロー
それにE・HERO バブルマンを融合
エレメンタルヒーロー
来いE・HERO テンペスター

更に2枚目の命削りの宝札を発動するぜ
手札が5枚になるようにドロ―
更にミラクルフュージョンを発動

墓地のE・HERO スパークマンとE・HERO エッジマンを

融合

来いE・HERO エレメンタルヒーロー プラズマヴァイスマン

更に2枚目のミラクルフュージョンを発動するぜ

墓地のE・HERO スパークマンとE・HERO クレイマンを

融合

来いE・HERO エレメンタルヒーロー サンダー・ジャイアント「アニメ版」

E・HERO エレメンタルヒーロー サンダー・ジャイアント「アニメ版」の効果を発動

暗黒界の軍神 シルバを破壊

いけヴェイパー・スパーク

「シルバが」

「最後のミラクルフュージョンを発動

墓地のE・HERO エレメンタルヒーロー スパークマンとE・HERO エレメンタルヒーロー ネクロダーク

マンを融合

来いE・HERO エレメンタルヒーロー ダーク・ブライトマン

更にE・HERO エレメンタルヒーロー プラズマヴァイスマンの効果を発動

手札を2枚捨て暗黒界の武神 ゴルドとNo.61 ヴォルカザウ

ルスを破壊

とどめだ

E・HERO エレメンタルヒーロー テンペスター カオス・テンペスト

E・HERO エレメンタルヒーロー プラズマヴァイスマン ヴァイススパーク

E・HERO エレメンタルヒーロー サンダー・ジャイアント「アニメ版」 ボルティツ

ク・サンダー

E・HERO エレメンタルヒーロー ダーク・ブライトマン ダークフラッシュ

4000 - 2800 = 1200

1200 - 2600 = 1400

- 1400 - 2400 = 3800

- 3800 - 2000 = 5800

「つよ

プラズマヴァイスマンつよ

負けたああああああああああ

「よつしやーーーー

今度は勝ったぜ

ガツチャいいデュエルだったぜ」

「次は俺が勝つ」

「いや今度も俺が勝つ」

以後言い合いなのでカットします（作者）

第14話 冬休み前の決闘 VS 十代 第2戦 究極 第3戦 暗黒と神鳴（後

アンケート募集中

龍とE

S i d e
遊輝

「デュエル」

「さっきのはマジでキレた
十代、手加減できん
いくぞ!!!!

俺のタァアアア――ン!!!!

ドロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオ!!!」

「やば、マジで怒らせちゃった」

こりや心のじゅ「何言ってる、黙れ

王立魔法図書館を召喚

二重召喚發動發動

王立魔法図書館にカウンターが乗る

鉄の騎士ギア・フリード召喚

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

エルマをギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

エルマをギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマをギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマの効果で蝶の短剣 エルマを手札に

王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロ

1回

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロ

Ⅰ（2回目）

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロ

Ⅰ（3回目）

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に
蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロ

ー（4回目）

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロ

ー（5回目）……………」

その後27回目でエクゾディアがそろい俺は勝った
そしたら十代にこんな提案をされた

「あのさ、さすがに10戦疲れるし次で最後にしないか？」

まさかデュエルバカの十代がこんなこと言うとは思っていなかったが宇宙意思（作者）が10個もE・HEROデッキが思いつくかあああああと言った気がしたので了解した

なんか最近コメディになつてゐる気がする
とまあメタ発言はここまでにして
5戦目が最終戦になりました
お互いのメインデッキでデュエルです

「デュエル」

「俺のターンドロー

光竜の煌きを発動手札のドラゴンを2枚墓地に送り
デッキから光属性のドラゴン1体を特殊召喚する
来いライトエンド・ドラゴン

更に墓地の

光属性 ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン
銀河眼の光子竜と

闇属性 レッドアイズ・ブラックドラゴン
真紅眼の黒竜を除外し

手札からライトパルサー・ドラゴンを特殊召喚
命削りの宝札を発動
リバーズカードを1枚伏せターンエンド」

「俺のターン
ドロー

融合を発動

E・HERO エレメンタルヒーロー スパークマンとE・HERO エッジマンを融合
来いE・HERO プラズマヴァイスマン

エレメンタルヒーロー

E・HERO プラズマヴァイスマンの効果を発動
手札を2枚捨てライトエンド・ドラゴンとライトパルサー・ドラゴ
ンを破壊」

「ならそのとき

トラップ発動

竜の輝鱗

自分フィールド上のドラゴン1体を手札に戻す

俺はライトエンド・ドラゴンを手札に戻す

そして手札から別の同レベルのドラゴンを特殊召喚する！

光と闇は表裏一体だ！現れる闇の龍！！

ダークエンド・ドラゴン」

分かる人にはわかる

パクリ

（さあ誰のパクリでしょう

第8話を見ればわかるとおもうよ）作者

何か電波が

まあいい続きだ

「ならおれは最後の手札を捨て

ダークエンド・ドラゴンを破壊

エレメンタルヒーロー

E・HERO プラズマヴァイスマンで攻撃
ヴァイススパーク」

4000 - 2600 = 1400

「十代

手札事故でも起こしたか？」

（いや、遊輝よ

それでも十分いい手札だと思うぞ）作者

また電波が

なんだ今日は

妙に電波が多い

「そうなんだよ

ドローカードが来なくてさ

ポツリ（なんで融合2枚とバブルシャッフルなんだよ）」

（それでも1ターン目から融合できてる時点で十分です）作者

「うん？

今変な電波が？」

「お前もか

今日は変な日だ」

「まあいいや

ターンエンド」

「俺のターンドロー

墓地のライトパルサー・ドラゴンの効果を発動手札のドラゴン族の
光属性モンスターと闇属性モンスターを1枚ずつ墓地に捨て

墓地より特殊召喚する

戻ってこいライトパルサー・ドラゴン

更に手札のダークフレア・ドラゴンの効果発動

墓地の光属性 青眼の白龍と
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン

闇属性 ダークエンド・ドラゴンを除外

闇の炎よ舞い上がれ 来いダークフレア・ドラゴン

さらに死者蘇生を発動

光と闇を象徴せし竜よ

真理の力を持ちここに現れる

来い光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）

初めてだなお前の力を使うのはライネス」

「そうだなマスター

何気に私の登場回数も少ないし

使用も初めてだ」

「メタ発言をするな

行くぞ十代

光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）
エレメンタルヒーロー

E・HERO プラズマヴァイスマンに攻撃

シャイニングブレス

ライトパルサー・ドラゴンとダークフレア・ドラゴンは十代にダイ

レクトアタック

パルスストリーム フレア・オブ・ダークネス」

4000 - (2800 - 2600) = 3800

3800 - 2500 = 1300

1300 - 2400 = -1100

「はあ負けたあああ

でもガッチャいい勝負だったぜ」

「そうだな

「じゃあ外に出るか」

数日後

「じゃ、十代俺は行くぜ」

「じゃあな」

帰ってきたらデュエルだ」

「ああ、もちろんだ」

そういうと俺は前の空間を歪め
中に入って行った

第15話 冬休み前の決闘 VS 十代 第4戦 究極再び 第5戦 龍とE（後

しまった

何故か強烈なギャグ回になってしまった

どうしてこうなった

すいません

10連戦は無理でした

第16話 帰ってきた男 VS 人造人間（じんぞうにんげん）・サイコ・ショッ

Side 十代

冬休みに入って

生徒のほとんどが家に帰っちまった

おかげで島はガラガラ

でもさ、俺たち居残り組には最高の環境だぜ

いつでもどこでもデュエルがやり放題

これで遊輝がいればなあ

もっと楽しかったんだけど

あいつとはダイオラマ魔法球ってやつで毎日あつてるけど

やっぱり4人で話したいよな

「うつん」

「俺はクレイマンを攻撃表示で召喚」

翔の場にはサイクロイドとジャイロイド

周りにいるのはデュエル中の翔と餅を焼いては食ってる隼人と大徳寺先生

パン

「フニャアアアア」

「クレイマンで攻撃」

Side auto

な、なんだ

「何いいい」

俺らはデュエルを中止した

「なんだ、いったいどうしたんだ」

俺は倒れている男に近づいて話しかけた

「サ、サイコ・ショッカーが」

「サイコ・ショッカーがどうした？」

サイコ・ショッカー？

「僕をおいかけて」

「え、なにわけのわからないことを言ってるんだ？」

まさか

「君は確かオベリスク・ブルーの高寺君だにや」

「大徳寺先生

先生なら、デュエルの精霊を研究している大徳寺先生なら
きっとわかってくださいますね」

やっぱり

「デュエルの精霊」

「わあ、落ち着くのだにや高寺君
最初から話してみるのだにや」

「は、はい」

あれはまだ冬休みに入る前の事でした
僕たち高寺オカルトブラザーズは」

「高寺オカルトブラザーズ？」

「同じオベリスク・ブルーの向田と井坂で組んだ
デュエルのオカルト面を研究するグループなんです
特に僕らはデュエルの起源ともいえる
精霊を研究していました
そしてあの日

僕らは今までの研究の成果を試そうと
精霊を呼び出すことにしたのです
ウィジャ板を使って」

「3体の生贄をささげる
さすれば我は蘇える
そう文字は語りました」

「いけませんね
デュエルの精霊と心靈学と一緒にしてはダメなんだにやあ」

「で、高寺君たちはなんて答えたの」

「分かりましたって」

おいおい

「えええ」

「カードの生贄だと思ったんだよ
それなのに」

「え、まさ…か」

「次の日

メンバーの一人向田の姿が見えなくなってしまったんだ
そして次の日には井坂が

二人とも生贄にされてしまったんだ」

ヤバくないか

「ええ（ぶるぶる）」

念のために

「冬休みだから実家に帰ったんだろ」

「二人の家にも電話したよ
でも、まだかえってないって」

「うーん」

「僕は恐ろしくなって

今日のフェリーで帰ろうとしたんです
そうしたら

船の上に

あれは確かにサイコ・ショッカー」

サイコ・ショッカーの精霊

カチャン

なんだ電気が消えた

翔たちも悲鳴を上げてる

「翔、隼人しがみつくな
おめええええ」

「落ち着くのだにや」

「お、お前は」

あの黒い男

高寺を抱えてる

「サイコ・ショッカー！！」

「あ、まて」

「待ってアニキ」

「十だあい」

「十代君！！」

その後俺らは奴を追いかけて
送電施設についたんだ

「気を付けるにや

ここは島全体に電気を送る送電施設にや
高圧電流が」

「あ、高寺！」

走りかけていくと急に電撃が走った

「わあ」

チーーン

ビリビリという電気の音とともに
サイコ・シヨッカーが出てきた

翔たちもそれぞれ驚いてる

「先生

精霊はいるって教えてたじゃないですか」

「み、み、みたのは初めてなんだにや」

「おい、サイコ・シヨッカー

高寺たちを返せ！！」

「そんなに蘇えりたけりや
俺を生贄にしろ」

「十代！」

「アニキ！」

「成程、君から発生するパワーはほかの者の並ではないな」

「しゃべったあ」

「3体目の生贄には君の方がふさわしいかもしれん」

「だが条件があるぜ

俺とデュエルしろ！！

お前が勝ったら俺は生贄になる

だが、俺が勝ったら高寺と後の二人を返せ」

「いいでしょう！！

おもしろい、君を生贄として召喚して見せましょう」

ビリビリ

「わが生贄よ

君はもう逃げられん」

「生贄じゃねえ

俺はオシリス・レッドの十代だ！」

「「デュエ」神鳴流奥義 斬空閃」
「ドカアアアアア」なんだ」

「

急に大きな音がしたと思ったら土埃がたっていた
その土埃が晴れてくると

「そのデュエル、俺が受けよう」

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

サイコ・ショッカーのイベントがあったこと忘れてた
完全記憶能力？

覚えてても思い出そうとしないと無駄なの
ヤバい始まる

「しんめいりゅう(おつぎ)神鳴流奥義 ざんくうせん斬空閃」

土ぼこりがたつちまった

「そのデュエル、俺が受けよう」

「「「「遊輝(君)?!」「」「」

「なんだこのパワーは
私が10回復活してもおつりがくるぞ」

「十代、このデュエル俺がもらう
おいサイコ・ショッカー
条件変更だ

俺が負けたら十代と俺の魂をくれてやる
だが、俺が勝ったらその3人を返し俺の手下になれ」

「遊輝、このデュエルはお「いいな、十代」あ、ああ（ヤバい、遊輝はマジだ）」

「そういうことだサイコ・ショッカー
後ろで騒いでるやつは無視してデュエルだ」

「いいでしょう
君も生贄にして見せましょう」

「契約完了だ
この契約は破られることはない」

俺はネギま世界で手に入れたマジックアイテムを使用した

「ついでだ
デス・デストロイ・デス・クライシス大気よ水よ白霧となれ
彼の者らに一時の安息を
眠りの霧」

俺、十代、サイコ・ショッカー以外が眠った

「遊輝、何をしたんだ」

「心配するな眠らせたただけだ
魔法でな」

「魔法か

君は面白いものを使うようだ」

「行くぞ」

「「デュエル」」

「先攻は私
ドロー」

半透明のカードがサイコ・ショッカーの前に出てくる
一体どういう仕組み？

「私は怨念のキラードールを攻撃表示で召喚」

怨念のキラードールの攻撃力は1600か

「手札から永続魔法エクトプラズマーを発動
互いのプレイヤーは自分のターンのエンドフェイズ
自分のモンスターを生贄に捧げることで
その攻撃力の半分のダメージを相手に与えることができる」

怨念のキラードールから白い魂みたいなものが出てきて俺にあたった
少し痛いな

でも、あのときの京都での修行に比べりゃあ

4000 - 800 = 3200

「遊輝!!」

「ターンエンドだ」

融合を発動

伏せカードくらい伏せろや
ちよつまでうけんし

ちよつまどうけんし
超魔導剣士・ブラック・パレディンで攻撃

ちよつまどうむえいざん
超魔導無影斬

更に速攻魔法融合解除発動

来いブラック・マジシャン
バスター・ブレイダー

2
体で攻撃

ブラック・マジシャン
バスター・ブレイダー
ブラックマジック
神鳴流奥義 斬魔剣
弐の太刀

-	1	4
1	1	0
4	0	0
0	0	0
0	-	-
-	2	2
2	5	9
6	0	0
0	0	0
0	"	"
"	-	1
-	1	1
4	4	0
0	0	0
0	0	
0		

伏せカードくらい伏せろやああああああああああ

「ぎや ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ」

アニメの時と爆発しようとする

「そうはさせるか
罰ゲーム発動」

罰ゲームでサイコ・シヨツカーの魂をカードに封印し爆発を止める

「遊輝、サイコ・シヨツカー
弱かったな」

「ああ、十代
とりあえず少しあそこで寝てる3人を記憶操作するから寝てろ【眠
りの霧】」

「な、なんだ、急にねむ……………」

パタン

眠った十代とさっきの3人の記憶をアニメのデュエルと同じように
いじり

じんぞうにんげん

人造人間・サイコ・シヨツカーの描かれた罰ゲームのカードをダイ
オラマ魔法球の中に持っていった

じんぞうにんげん

その後中で解放した消えかけた人造人間・サイコ・シヨツカーを
俺の魔力と気で形を整え復活させた

まあ、普段は精霊化してないときついくらいにだけど
その後

じんぞうにんげん

何故か人造人間・サイコ・シヨツカーは俺をマスターというように
俺には従順？になったのは別の話

その次のフェリーの日

翔たちに帰ったことにするため帰り

十代たちは

十代たちは原作通りのことがあったと話していた

第16話 帰ってきた男 VS 人造人間（じんぞうにんげん）・サイコ・シヨッ

遊輝が作るダイオラマ魔法球はすべて転送装置でつながってます

なんとあの人造人間・サイコ・シヨッカーを仲間にしました

本編でその後が語られなかった人造人間・サイコ・シヨッカー

精霊界に還ったのか、消滅したのかわからなかった

あの人造人間・サイコ・シヨッカー

タイタン助けてる人は多少はいたけどこっちは書かれることさえ珍しかったから

書いてみました

めちやくちゃフラグがたってますがこのフラグの回収は遙か先です

よく考えると

人造人間・サイコ・シヨッカー

めちやくちゃ弱くね

だって伏せカードの1枚も伏せないとか

第1回遊輝パーティー紹介

遊輝のパーティーもしくは準パーティーの紹介です

名前：ライネス

種族：デュエルモンスターの精霊

性別：

姿：人間形態ではブラックジャック

普段は小龍形態

小龍形態とは本来の姿のままハネクリボーほどの大きさに変化した姿

本来の姿は光と闇の竜（ライト&ダークネストラゴン）

使用デッキ：漫画版万丈目デッキをもとに強化した光と闇のデッキがメイン

サブは遊輝と同じように大量に作っているがおもにドラゴンデッキ

好きなもの：遊輝・漫画版万丈目・十代・同族（デュエルモンスターの精霊）・遊輝の仲間

嫌いなもの：アニメ版万丈目・遊輝に敵対するもの・遊輝の嫌いなもの

特徴：神のミスのせいでこの世界に来た

今は遊輝のことを心から信用している

能力：飛翔能力 ドラゴンなので飛べる

ネギま世界にて魔法を勉強しそれと兼用することで燃費が上がった

ネギま魔法 ネギまの魔法

存在そのものが精霊なのが理由か相性がよく魔法の効率がいい

ラテン語のものも使えるが
遊輝が現存する魔法を
改良して日本語にしたものを使っている

得意属性は光・雷・闇・影
始動キーはライト・オブ・ダーク・ライトネス

神鳴流 遊輝とともに習った

レベルは斬魔剣 二の太刀を打て本家より強い

ブレス ドラゴンのブレス

ネギま世界やゼロ魔世界のドラゴンのものを参考に
エレメントブレスを打
てるように

能力値：チートドローレベル 1 62 参考 ユベル戦のアモン
が100レベル

デッキ構築レベル 1 56 参考 リアルな俺らのデ
ッキ構築レベルが50くら

い

魔力 1 72 参考 ネギまの一般魔法

先生レベル5

気

1 68 参考 ネギまの一般魔法

先生レベル5

剣術

1 85 参考 ネギまの桜咲刹那

(修学旅行時) レベル20くらい

プレス

1 100

仮契約者：遊輝

血による契約

この契約により遊輝の持つ全能力使用可能(神様を脅しました)

仮契約カード

称号：光と闇を司るもの

アーティファクト：破滅の光と優しさの闇

(破滅の光は巨大な砲撃 形状はバ

ズーカ 優しさの闇

完全回復・

呪いの解除 形状は指輪 念じると切り替え可能)

徳性：信頼

方位：北

色調：白と黒

星辰性：月

服：ブラックジャックの来ていたやつ

名前：サイコ

種族：デュエルモンスターの精霊

性別：

姿：アニメで出てきた黒いコートに包帯で顔を隠している姿

普段はそのまんまサイコ・ショッカー

使用デッキ：サイコショッカー中心のロックバーンがメイン

サブは遊輝と同じように大量に持っているがロックバーンがほとんど

好きなもの：遊輝・同族（デュエルモンスターの精霊）・遊輝の仲間・電気

嫌いなもの：遊輝に敵対するもの・遊輝の嫌いなもの・ライネス

特徴：アニメ通り十代とデュエルしそうなところを割り込んできた遊輝に負けた

その後遊輝によって復活をさせられた

能力：飛翔能力 精霊なので使える

ライネスにおさわわったネギま魔法で燃費も上がった

ネギま魔法 ラテン語のものも使えるが遊輝が現存する魔法を

改良して日本語にしたものを使っている

得意属性は闇・氷・雷・影

始動キーはサイコ・サイバ

ー・サイコ・サバイヴ

サイバー・エナジー・ショット サイコ・ショッカーの技

能力値：チートドローレベル 1 3 7

デッキ構築レベル 1 6 3

マッドサイエンティストレベル 1 3 6

魔力 1 5 1

気 1 4 2

仮契約者：遊輝

血による契約

この契約により遊輝の持つ全能力使用可能（神様を脅しました）

仮契約カード

称号：最悪の頭脳

アーティファクト：電腦増幅器（魔力・気を上げる、頭脳の強化
形状は電腦増幅器）

徳性：信仰

方位：南

色調：紫

星辰性：冥王星

服：アニメで来ていた黒いコート

第1回遊輝パーティー紹介（後書き）

かなりチートです。

仮契約とはいえってもこの世界じゃ当分役に立ちません。

第17話 精霊対決 ライネスVSサイコ

Side 遊輝

影分身から報告が届いた

何故に影分身？という疑問があるかもしれないので説明しよう

冬休みに修行に行っていたが実際の時間になると100年を超す

その際まず修行チートである影分身を覚えるためにナルトの世界に行ったのだ

そこにいた神デモ隊（神様にマヤのことでデモをする軍隊）第12番隊第2副隊長の金坂春真というナルトの世界に転生した同志に教わった

ちなみに神デモ隊は俺を元帥とし30の部隊それに一人ずつ隊長がいてさらにその下に10人ずつ副隊長がいる

その副隊長の下に10人ずつの部下がいるという軍隊風のチームだただ隊長や元帥といってもえらいわけではなくまとめるための形だけのリーダーだ

つまり横のつながりだ

神デモ隊のネーミングセンスは気にしないでくれ

まあそんなわけで影分身をできる訳だ

どうしてそんなことを覚えたかはやはり元帥として形だけだったとしてもまとめていたから力をつけ同志たちのように強くなり仲間を助けられる存在になりたいから

もう一つ、遊戯王の世界でもリアリストはいる

それに精霊の世界に行ったとき対策だ

あのデュエルゾンビとかデスリングとかに対処できるように

では、説明はここまでにして報告を見てみるか

報告

ナルト世界より

風遁 螺旋丸

風遁 螺旋手裏剣

風遁 大突破

水遁 水龍弾

口寄せの術

を使用可能になった

報告終了

報告を読んで俺が分身を解除すれば新たな術を使えるようになるそう
うだ

ということでは早速分身を入れ替えた

実は俺と同じ転生者を見つけたら分身を置いて神鳴流以外はほとんど
いないでさっさと次のところ行ったからな

とはいえ時々戻してダイオラ魔法球の中で特訓しまくったから1
00年くらいたってしまったんだが

まあ報告はここまでにして特訓だ

今、ライネスとサイコが向かい合っている

サイコというのは例の人造人間・サイコ・ショックの愛称だ
ライネスと俺とサイコで決めたんだが

最初にライネスが

「マスター、ショッカーというのはどうだろう」
という発言でサイコが

「私は悪の秘密結社のメンバーではない

君は少し失礼じゃないか」

という風に答えて仲が悪くなったのだ

とはいえライネスは面白がっているだけのようだが

そこで訓練という形で
ライネスとサイコが戦うことになった

「ではデュエル開始」

俺がデュエル開始のコールをする

ちなみにここは当然だがダイオラマ魔法球の中だ

「デュエル」

「私のターンドロー

私は人造人間サイコ・リターナーを攻撃表示で召喚」
じんぞうにんげん

出てきたのは小さい黄色いサイコ・ショッカーだ
攻撃力は600

「更に私は手札から二重召喚を発動

このターン私は2度の通常召喚ができる

私はサイコ・リターナーを生贄に私自身を召喚する」

出てきたサイコ・ショッカー

といってもホログラムで自分自身出てないけど

やっぱり痛いんだろうな、攻撃当たると

「更に速攻召喚を発動

サニー・ピクシーを召喚」

似合わねえ

すっげええええ似合わねえ

マジで似合わねえ

サイコ・シヨツカーが
あのサイコ・シヨツカーが
サニー・ピクシー？
あの妖精？

「手札から命削りの宝札を発動
手札が5枚になるようにドローする
更に魔法使い族の里を発動
このカードは自分フィールドに魔法使い族がいるとき相手プレイヤ
ーは魔法カードを使えなくする
これで君の魔法・トラップは封じた
君はどうするターンエンドだ」

これ圧倒的不利な状態かな

「我のターン、ドロー」

我は手札のサイバー・ドラゴンを特殊召喚する

更に我は手札のTHE^ザトリッキーを手札を1枚捨て特殊召喚する
サイバー・ドラゴンとTHE^ザトリッキーを生贄に
来い 闇を司る我が半身

ダークエンド・ドラゴン

ダークエンド・ドラゴンの効果を発動する

2回攻守を500ポイント下げ

サイコ・シヨツカーとサニー・ピクシーを破壊する

我が半身よ、いけ

ダーククライシス

更に強欲な壺を我は発動する

2枚ドロー

天使の施しを発動する

3枚ドローし2枚捨てる

我は流転の宝札を発動する

2枚ドロ―

更に光竜の煌きを発動する

手札のドラゴン²を2枚墓地に送りデッキから光属性のドラゴンを特殊召喚する

来い 光を司る我が半身

ライトエンド・ドラゴン

更に墓地の光属性 サイバー・ドラゴンと

闇属性 レッドアイズ・ブラックドラゴン 真紅眼の黒竜を除外し

来い 鋭き光の竜ライトパルサー・ドラゴン

更に我は命削りの宝札を発動する

手札が5枚になるようにドロ―する

墓地の光属性 ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン 銀河眼の光子竜と

闇属性 レベル・ステイラーを除外し

来い 熱き闇の竜ダークフレア・ドラゴン

絶景だな

ドラゴン4体が降臨している

それに比べサイコは調子に乗って伏せカードを伏せないんじゃないかなかなか
った的な顔をしている

「速攻召喚を発動

2体の我が半身を生贄に

我自身を召喚」

サイコの時も言ったが

ホログラムで自分自身出てないけど

やっぱり痛いんだろっな、攻撃当たると

「我を含む3体の竜でアタック

ライトパルサー・ドラゴン パルスストリーム

ダークフレア・ドラゴン フレア・オブ・ダークネス

そして我自身の攻撃

「ウイス・テンベスターズ・オブスクランス
闇の吹雪」

4 0 0 0 - 2 5 0 0 || 1 5 0 0

1 5 0 0 - 2 4 0 0 || - 9 0 0

- 9 0 0 - 2 8 0 0 || - 3 7 0 0

ピーーーーー

俺は笛を鳴らした

「勝負あり

勝者ライネス

それとサイコ、お前は伏せカードを伏せろ」

「これからは気を付けますよマスター」

「またデュエルしてやるぞサイコ」

「いいでしょう

調子に乗っていると次は負けますよ

ライネス先輩」

「お前らやめろ

とりあえずデュエルの訓練終わり

俺は学校行くからこれからネギま魔法の訓練をサイコにつけておい
てくれライネス」

「分かったマスター
安心して言ってきたくれ」

この時俺は知らなかった
今日があのをざい、十代曰くさわやか部長との初の邂逅の日だった
ことを

第17話 精霊対決 ライネスVSサイコ（後書き）

はい、最後ので分かるように次回はさわやか部長が来ます

第18話 さわやか部長との邂逅 VS 綾小路ミツル 十代編(前書き)

今まで最長になってしまった。
ナルシスト
あの熱血馬鹿のセリフ長すぎる。

翔なんてへっぴり腰で返してるぜ

「鮎川先生も

本当はバレーボールがやりたかったそうですわ」

ボールが打ち返されてきた

いや、バレーボールも関係ないだろ

「どっちも同じだよ」

そういつて俺はジャンプして打ち返したって

「やべ、よける明日香」

当たりそうになったところを謎の人影が出てきて打ち返した
って誰だあいつ

しかもクロノス先生の方につて

あつぶつかった

「明日香さーん！

お怪我はありませんでしたか」

さっきの男が明日香の方向いた

「大丈夫？

怪我しなかったかい？」

なんかさわやかっで感じた

というか後ろの二人、目がハートになってるけどいったいどうしたんだ？

「いえ、大丈夫です

助けていただいてありがとうございます」

「（オベリスク・ブルーの天上院明日香君かあ）」

「あのまだ何か？」

「え、いやあははははは、失敬失敬

知らなかったよ、我がオベリスク・ブルーに君みたいな美しい人がいたなんて」

「あの」

「え、うわ、あはははは
ちよっとキザだったかな、忘れてください
はは、はははははははは
いやあ青春青春」

なんか変なの

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

なんだよあのジャンピングスマッシュ
十代って本当に人間なのか？

俺が言えるこっちゃないけどさ

魔法使えるし、気使えるし、忍術使えるし
いや、でもおかしい

なんだあの十代の身体能力は
しかも本当に今日が熱血馬鹿と書いてナルシストと読む綾小路ミツ
ルとの邂逅の日だったとは
ああむかつく

殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい
あの熱血馬鹿ナルシストを狩りたい
そんなこと考えてると俺の方にボールが飛んできた

「隙あり！！」

相手が調子に乗っている

「隙無しだ！

いくぞ、秘剣ツバメ返し」

本来この技は

一瞬で三つの斬撃を飛ばし敵に攻撃する技だが
テニスで現在俺が使ってるのは

3つの衝撃波でテニスボールの軌道が無茶苦茶にしながら相手に打
ち込むという技だ

その技が決まったと思ったその時

テニスコートの外にいたモブ女子Aに向かっていった

「キャアア」

するとあの熱血馬鹿ナルシストがやってきて打ち返したのが
あ、またクロノスに

あいつ絶対狙っているだろ

それからしばらくして授業が終わった後
保健室にクロノスに謝りに行ったのだが

「「どうもすいませんでした
ごめんなさい」」

「ごめんで済むならポリスはいらないーのね」

謝ったらこんなこと言ってきた
まあ、俺は棒読みだったけど

「でや、シニョーラ鮎川、もっと優しくお願いしますのーね」

「十代君も遊輝君もわざと出なかったのですし
その辺で許してあげてはどうですか？
クロノス先生」

ありがとう鮎川先生
あなたはいい人だ

「ノンノンノン
それではまるーで出しっぱなしーのビールではありませんーか」

「うっ？？」

鮎川先生も意味がわからないようだ
隣の十代の頭の上にも？が浮いている

「なまぬるいーの」

ダジャレかよ

鮎川先生もひいてるぞ

「ああ」

「ダジャレかよ（―――）」

十代も言ってるよ

「ぐぱ

何か言いましたか、ドロップアウトボーイズ」

「つつか、直接ボールあてたの俺じゃないし」

確かに

「俺も直接当ててないし」

「だまるのーね

この期に及んで他人のせいにするなんーて
よろしい、罰として我が名門テニス部ーの一日体験入部するのーで
す」

「なんだそれ、無茶苦茶だろ」

「まったくだ、なんのつながりがあって」

「出ないと単位は上げませんーのよ」

職権乱用！！

S i d e a u t o

S i d e 三 人 称

その頃明日香たち

「明日香さーん」

「分かりましたわ、あの殿方の正体が」

「大声出さないでよ、恥ずかしい
まるでわたしが調べろって言ったみたいじゃない」

周りの生徒は明日香たち3人に目を向ける
といつても二人ほどしかいないのだが

「でもお」

「興味わきますわよ」

明日香の取り巻き

ジュンコとももえが言うには名前は綾小路ミツル
綾小路モーターズの御曹司だし

ただのナルシストだが

デュエルの腕もあのカイザー（笑）に負けるとも劣らないらしい

「だから興味ないってば」

明日香は一切興味を持たなかったが

S i d e a u t o

Side 遊輝

「てや、えい」

今十代に熱血馬鹿^{ナルシスト}が打ち込んでいる

「はあはあ、テニス部部长ってこいつの事だったのか
しっかしこりゃあきついぜ」

女子からボールを渡されている熱血馬鹿^{ナルシスト}

「まったくクロノスのヤツ覚えてるよ
うわあ」

十代の頭にボールが当たった

「大丈夫か、十代」

「立て！立つんだ遊城十代君！
これくらいでくじけちゃいけない
今頑張らないでどうするんだ！
今日という日は今日しかないんだぞ！」

何を当たり前のことを

というか十代の事も知りもしないで

「あたりまえじゃないか、なんなんだこの暑苦しい奴は」

「そし「先輩、十代は疲れてきてる、俺が交代する」む、わかった
君がそこまでやりたいというのならやらせてやろう」

あと50球やつてもらおうとおもっていたが
さっきの続きだがね明日という字は明るい日と書くのだ
……………」

俺は無視しいつの間にか来ていた翔たちの話を聞く

「あの部長さわやか笑顔で言うこと芝居がかっているよね」

「ていうか意味不明なんだけど」

「いいんですわ、顔がよければ」

おいももえ、お前はそれでいいのか

「48・49、もうめんどくせえ
くらえ秘剣ツバメ返し」

なんてやっていると

「え、あら、明日香様」

「へ、明日香君！（キラーン）」

うえ

気持ちわる

何こいつ

「やあ、明日香君、うれしいなあ
僕に会いに……………」

ざまあみろ

無視されてやんの

「ねえちよつと話があるんだけど」

「「え？」」

俺と十代はそう答えた

「さつき大徳寺先生から聞いたんだけど
万丈目君を見つけたって人がいたらしいの」

「万丈目？どこにいたんだ」

「それは本当か？痴女」

「痴女じゃないわよ

それが……」

俺らが話しているところをにらんでくるナルシスト熱血馬鹿
しかも言ってる内容逆切れだろ

「離れたまえ明日香君！！」

「うん？」

「え？」

「は？」

上から十代、明日香、俺の反応だ

「あまりこういうことは言いたくないが……………」

「オベリスク・ブルーの妖精って
うえ、いやかも」

翔、お前が考えていることは多分違う

「それに君は明日香君のことを痴女だなんてバカにして……………」

というか目が赤い

何処の戦闘民族だよ

すげえナルシスト発言してるし

「ちょっとまで、あんたなんか勘違いしてないか？

俺とこいつは別に「いまさら言い訳とは見苦しいぞ十代君！！」

いや、あんたの方が見苦しいから

「いや、だから「明日香君をこいつ呼ばわりか……………」

十代君僕とデュエルだ」

「人の話を聞け」

まっただ

「君もデュエリストならここは潔くデュエルで決着をつけようじゃないか」

「だから決着ってなんのだよ」

「ズバリ勝った方が明日香君のフィアンセになるのだ」

おいおい、勝手に決めて

「ちょっと待って何よそれ」

ももえはともかくジュンコと翔は呆れてるし

「その関係ないって顔をしている君もだ」

「え、俺？」

「君も明日香君を痴女だなんてバカにして
僕が制裁をしてやろう」

つて感じでまず十代と熱血馬鹿ナルシストのデュエルだけじゃなく俺と熱血馬ナルシ
鹿ストのデュエルもすることになった

「勝負だ、十代君！」

「おお、望むところだ！」

「デュエル！！」

始まった

「明日香様を巡って二人の殿方がデュエルだなんて、素敵すぎます
！！」

「馬鹿馬鹿しい、付き合いきれないわ」……

女子三人組がしゃべっているが

明日香は熱血馬鹿ナルシストのデュエルの腕以外には本気で興味なさそうだ

「そんなことねえよ、ただのバーンだ」

「え、そうなの？」

「そうだ痴女」

ただバーンで勝ってるだけ

普通の強い奴とあまり変わらん」

「痴女っていうな

でもそうなの、完全に興味なくなっただわ
でもどうしてそんなこと知っているの」

「禁則事項だ」

「あ、そう」

「僕のターンドロー

先手必勝、マジックカードサービスエースだ」

「いきなりマジックカードかよ」

お前が言うか

「このカードはね

僕が選んだカードの種類が何かを君があてるギャンブルカードさマジックか？トランプか？はたまたモンスターか？

見事あてることができればOK
だがもし間違えたら十代君、君は1500ポイントのダメージを食らうことになる」

いや、なぜそのカードが禁止カードにならん
効果が強力すぎるだろ

「面白いじゃんか（よおし）」

ガイヤがガヤガヤ言ってる

「おいおい、まさかカードを透視しようなんて言っんじゃないんだろうね」

「そうだけど」

「おいおい十代君そんなことできるわけないだろ」

「それもそうだな
じゃあ魔法だ」

「ファイナルアンサー？」

「いややっぱりやめる
モンスターだ、モンスターカード」

「本当にモンスターでいいのかい？」

「ああモンスターだ」

「運がいいね、僕が選んだカードはモンスターカードの神聖なる球体だ

僕は神聖なる球体を墓地に送る

僕はモンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンドだよ」

「俺のターンドロー

シールドクラッシュを発動するぜ

その伏せモンスターを破壊

更に苦渋の選択を発動

俺が選ぶのはこの5枚だ」

E・HERO スパークマン2枚とE・HERO フェザーマン2枚
それにE・HERO バーストレディ1枚

「E・HERO バーストレディを手札に加えたまえ」

「2枚目の苦渋の選択を発動
今度はこの5枚だ」

エレメンタルヒーロー
E・HERO ワイルドマン2枚
エレメンタルヒーロー
E・HERO フォレストマン2枚
エレメンタルヒーロー
E・HERO クレイマン1枚

エレメンタルヒーロー
「E・HERO クレイマンを手札に加えたまえ」

「3枚目の苦渋の選択を発動
最後はこの5枚だ」

エレメンタルヒーロー
E・HERO バブルマン3枚
エレメンタルヒーロー
E・HERO ネクロダークマン2枚

エレメンタルヒーロー
「E・HERO ネクロダークマンを手札に加えたまえ」

「俺は融合を発動

手札のE・HERO エレメンタルヒーロー バーストレディとE・HERO エレメンタルヒーロー クレイマン
そしてE・HERO ヴィジョンヒーロー ネクロダークマンを融合
来いV・HERO トリニティー」

あ、決まった
ってこれタイタンの時と同じじゃね

「このカードが融合召喚に成功したターン、
このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になるぜ
代わりにダイレクトアタックはできないけどな
だけど、さらに命削りの宝札発動

5枚ドロ

ミラクルフュージョンを発動墓地のE・HERO バーストレディ
とE・HERO フェザーマンを除外

来い、E・HERO エレメンタルヒーロー フレイム・ウィングマン

更に2枚目のミラクルフュージョンを発動E・HERO エレメンタルヒーロー フレイム・
ウィングマンとE・HERO スパークマンを融合

来い、E・HERO エレメンタルヒーロー シャイニング・フレア・ウィングマン
3枚の一族の結束を発動 いちでく けっそく

このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が
1種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在する
その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするだ
よって俺の場のすべてのモンスターの攻撃力2400ポイントアップ

エレメンタルヒーロー

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマンは俺の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき攻撃力を300ポイントアップ

墓地には12枚のE・HERO

攻撃力3600ポイントアップだ」

場を整理すると

エレメンタルヒーロー

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン

2500+2400+3600=8500

ヴァイジョンヒーロー

V・HERO トリニティー

2500×2+2400=7400

ヴァイジョンヒーロー

「V・HERO トリニティーはダイレクトアタックができないけど

エレメンタルヒーロー

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマンはできる

エレメンタルヒーロー

いけE・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン

シャイニング・シュート」

4000-8500=-4500

「な、いっただろ」

「ええ」

「僕が負けるなんて」

目が涙目になってるし

「いやでもまだだ

遊輝君、君への制裁が僕には残っている

遊輝君デュエルだ」

持ち直したよ

折れてくれればいいのに
まあいい

「ならば貴様の魂狩^{ライフ}らせてもらおうか」

「デュエル」

第18話 さわやか部長との邂逅 VS 綾小路ミツル 十代編（後書き）

《サービスエース》効果

通常魔法

自分の手札からこのカード以外のカードを1枚選択し、相手にそのカードの種類を当てさせる。

当たった場合はそのカードを破壊する。

ハズレの場合はそのカードをゲームから除外し、相手に1500ポイントのダメージを与える。

第19話 熱血馬鹿（ナルシスト）狩り VS 綾小路ミッル 遊輝編

Side 遊輝

「いやでもまだだ

遊輝君、君への制裁が僕には残っている

遊輝君デュエルだ」

「ならば貴様の魂狩^{ソイル}らせてもらおうか」

「デュエル」

という感じで始まりました

社長の言葉を借りるなら

強靱！無敵！最強！ 粉碎！玉砕！大喝采！！

まさにそのようなデュエルにしようではないか

否！

^{ナルシスト}この熱血馬鹿を合法的に殺れるのだ

社長の名言じゃあ生温い

惨殺！抹殺！大虐殺！！

くらいの気で行かせてもらおう

「俺のターンドロー

融合を発動

手札の2体の銀河眼の光子竜^{ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン}「OCG版」を融合

来い ツイン・フォトン・リザード

ツイン・フォトン・リザードは2体のフォトンと名のついたモンスターで融合召喚ができる

そしてこのカードをリリー・・・生贄にすることでこのカードの融

合召喚に使用した

融合素材モンスターを一組墓地から特殊召喚できる

俺はツイン・フォトン・リザードを生贄に

来い 銀河眼の光子竜ギョラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン「OCG版」

俺のフィールドに二つの十字架のようなものが現れる

それを俺が投げると

十字架のようなものの姿が変わり

銀河眼の光子竜ギョラクシーアイズ・フォトン・ドラゴンになつていった

「攻撃力3000が2体だと」

「さらに俺は手札を1枚伏せターンエンドだ

さあ、貴様のターンだ

屑は屑らしく踊って見せろや」

「なんか遊輝君の様子おかしくないっすか」

「確かにおかしいわね」

「いや、あれは遊輝が切れてるからだぜ

あの状態になつたらあいつはもう自重しねえ」

「アニキ、詳しいっすね

なんでそんなに詳しいんすか」

「何度もあの状態見たからな」

「ええ、僕ずっとアニキと一緒にいるけど今日初めてみたっすよ
あんな状態の遊輝君」

「それはなんていうんだっけ？」

あ、そうそうあいつみたいに言っていると禁則事項ってやつだ」

「ハルヒ？」

翔たちがなんか言ってるが気にしねえ

こいつを殺して潰して晒して消して潰すくらいの勢いでこいつの傲慢^{イデオ}を潰してやる

「ぼ、僕のターンドロー

僕はマジックカード サービスエースを発動するよ」

そいつか

貴様は自滅の道を歩きな

「効果はさっき説明したけどもう一度言っよ

このカードはね

僕が選んだカードの種類が何かを君があてるギャンブルカードさ
マジックか？トラップか？はたまたモンスターか？

見事あてることができればOK

だがもし間違えたら遊輝君、君は1500ポイントのダメージを食らうことになる」

それは一部の場合を除いてな

「では俺はトラップを選ぶ」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「残念外れだよ」

このカードはモンスターカードの神聖なる球体だ」

またかよ

「君に1500「地獄じごくの扉越とびぬし銃じゅうを発動

そのダメージ貴様に受けてもらおう」なんだと、ぐわあああああ

4000 - 1500 = 2500

ざまあみろ

「僕はモンスターをセットしてカードを1枚伏せターンエンドだ」

このターンで終わらせよう

「俺のターンドロー

天よりの宝札「アニメ版」を発動

お互い手札が6枚になるようにドローだ」

「ここで究極のドローカード!!」

「（ニヤリ）融合を発動

ギョラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン

俺は手札の銀河眼の光子竜とフォトン・レオを融合

来い ツイン・フォトン・リザード

更にツイン・フォトン・リザードの効果を発動

このカードを生贄に

ギョラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン

戻ってこい 銀河眼の光子竜 フォトン・レオ」

さっきと同じように十字架を投げる
そして、また姿を銀河眼の光子竜キャラクター・アイズ・フォトン・ドラゴンに変えていく

「フォトン・レオの効果を発動
ハウリング・ブロー」

吠える機械的な獅子
その効果は凶悪だぜ

「このカードの効果はこのカードの召喚に成功したとき
相手の手札をすべてデッキに戻しその枚数分俺がドロースする
貴様の手札はさっきの天よりの宝札「アニメ版」の効果で6枚」

デッキにカードを戻す熱血馬鹿ナルシスト
涙目でいい顔だ
だがまだ止まらない

「6枚ドロース
俺はシールドクラッシュを発動する
その伏せモンスターを破壊」

手札は8枚

「遊輝の手札おかしくないかしら
あんなにいろいろやってるのに8枚とか」

「そうっすね
おかしいっす」

「翔、あきらめろ

遊輝がいうにはあれが遊輝クオリティーだってさ」

「なんかアニキが頭がよくなってる気がするっす」

なんか漫才？やってるけど無視だ

目の前の熱血馬鹿^{ナルシスト}を潰すんだ

「さらに融合を発動する

フィールドのフォトン・レオと手札のフォトン・ケルベロス^{みたひ}を融合
三度現れるツイン・フォトン・リザード」

手札は6枚

「俺はアンデットワールドを発動

効果によりフィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをア
ンデット族として扱う

ツイン・フォトン・リザードの効果を発動

戻ってこいフォトン・レオ フォトン・ケルベロス

フォトン・ケルベロスの効果

このカードが召喚されたターン

お互いにトラップを発動できない」

「なんだとー!!」

手札は5枚

「3枚の一族の結束^{いちぞく}を発動^{けっそく}

このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が
1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在する

その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするだ
俺の墓地のモンスターもフィールドのモンスターもアンデットワ
ルドの効果によりアンデット族

よって俺の場のすべてのモンスターの攻撃力2400ポイントアップ
更に団結の力2枚を1体の銀河眼の光子竜に装備」
ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン

手札0枚

ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン
銀河眼の光子竜団結の力装備

3000+2400+4000+4000=13400

ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン
銀河眼の光子竜×2

3000+2400=5400

フォトン・レオ

2100+2400=4500

フォトン・ケルベロス

1300+2400=3700

「あ、ああ」

怯えてる

いいざまだ

「全員でダイレクトアタック

フォトン・ケルベロス フォトン・ファング

フォトン・レオ シルバー・ファング

そして3体の銀河眼の光子竜ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴンといけ
はめっ

破滅のトリプルフォトン・ストリーム」

2500-3700=-1200

-1200-4500=-5700

アディオース!!」

俺は寮の自分の部屋に帰って行った

第20話 番外 冬休みの修行その1 神鳴流

Side 遊輝

ふう、逃げ帰ったな

これ以上の面倒はもう御免だ

あの熱血馬鹿ナルシストと原作通りならもうかかわらないだろう
でもやっぱまずかったか

まあいいか

教える側がいなくなつたしテニス部1日入部も終了だろ
まさか明日仕切り直しはないだろ

「それにしてもこれを見ていると冬休みを思い出すな」

そういつて見ているのはリアルに真剣の

黒刀・黒曜舞こくようのまいと白刀・破邪銀龍はじやのぎんりゅう

長さはそれぞれネギまの桜崎刹那の夕凧と同じくらいの長さ

素材は黒刀・黒曜舞が黒曜石を中心に玉鋼たまはがねやアダマントイトを使っ
て作られた

白刀・破邪銀龍は破邪の銀を中心に白銀などを使つて作られた

作る際に魔力を素材に込めて渡したので強力で特殊な剣になっている

黒刀・黒曜舞は妖刀に

白刀・破邪銀龍は破邪の銀ミスリルを使ったせい
か聖剣に

それにしても本当に思い出す

あの修行の日々

Side auto

S i d e 過去の遊輝

おおつとネギまの世界についたか
じゃあ神鳴流を習いますか

よし京都、京都つと

そう思つて俺は何もない空間に手を出して開くと
空間が割れ

そこに入つて行つた

「よしついた京都つて

アルエエエエ、どうしてこんなに建物が古いんだ
いくら京都でもおかしくないか」

そう周りにあつたのは明らかに平成には似合わない建物ばっかだった

「あなた様はもしかして」

そう考えてると

後ろから何か声が聞こえて振り返つた

「やっぱり元帥!!」

元帥つて

こいつ転生者か

神デモ隊なら顔は全部覚えたんだがこんな奴いたか

「誰だっけ?」

「僕ですよ

神デモ隊第26番隊第9部隊第7番 近衛孝樹ですよ」

「あの孝樹か！変わったな
それにしても今は何年だ」

「1820年ですよ元帥」

「元帥はやめろ
遊輝でいいって孝樹」

実はこいつとは生前からの知り合いなのだ
だけど元帥ってずっと言ってくる変な奴

「そうか、道理で
それにしても偶然お前に会うとはとんだご都合主義だな
そういえば、お前近衛って名字だし近衛家に生まれたのか？
だったら神鳴流に俺を入れてもらいたいのだが」

「いいですけど遊輝は遊戯王GXの世界に行ったのでは？
何故ここにいますか？」

「敬語もやめろ
それはだな、ちょうど冬休みに入ったからいろんな世界に行って修
行しようと思ってな
だから修行チートの影分身はもう習ったぞ
第12番隊第2副隊長の金坂春真にな」

「そうなのか遊輝
だが、遊戯王GXの世界ならデュエル以外で戦闘はないと思うが」

「それはなりアリスト対策と
精霊の世界に行った時の対策だ
デュエルゾンビとかデスリングとかに対処できるようにな
それに何よりも遊戯王GXの世界が終わったら別の世界を旅する気
だし

ところでお前、ほんとに口調変わるな早いな」

「口調の事は気にするな

じゃあ、とりあえず本山に行こうか
歩きだけど大丈夫？」

「問題ないし歩く必要もない」

「え？」

そういうと俺は何もない空間に手を伸ばした
すると空間が割れる

「じゃあ行くとするか
本山の風景を思い浮かべてくれ」

「え、わかった」

じつはこの能力
時空間移動能力だが強く場所のイメージをすることでその場所につ
なげるのだ

「よし行くぞ」

俺らは空間の割れ目に飛び込んだ

「そついえば、お前不老不死？」

「勿論

もう80くらいは生きてると思います」

「どうしてそんなことに？」

「不老不死頼んだら

何故か赤ちゃんの時に大妖怪 九尾の狐を封印する人柱ついでにいにされてナルトみたくなっただんです

だけど、なぜか封印解けるまで死なないという変な呪いみたいのがかかったっていう設定に

あの馬鹿神がして」

「成程、なんて言ってるうちについたみたいだ」

よつと

俺たちは本山にある建物前に突然あらわれたのだが

「お前たち何者だ」

「名を応えろ」

「さもなければ殺す」

ってこれはないだろ
と思っっていると

「俺の友達だよ、早く通してくれないかな（黒笑）」

怖い、なにいつの間にそんなスキルを

「あ、あなたは孝樹様

分かりました、どうぞお通りください」

そうして俺らは中に入って長と面会することになったんだ

「近衛丸、こいつに神鳴流を教えてやってくれないか
頼む」

「孝樹様の頼みならもちろん教えますがこのk「大丈夫だ、裏を知
っている」なら問題ありませんね

それに孝樹様直々に教えるなどというからには早々鍛えたがえが・

・ふふふ」

なんか嫌な予感がしてきたが大丈夫か？

2年後

一気に飛びすぎだって

いやだ、あの修行の日々を思い出させるな

最初のうちはよかったんだ

ダイオラ魔法球も影分身も知らなかったから

夜にはダイオラ魔法球に入ってゆっくり寝て修行を影分身で行っ

てて行うのを繰り返せたから

それがばれてからは余計きつくなった

10体影分身出して

走るときはほかの人がビリだったら本山回り5周追加なのに

俺だけ俺と1位の間の人数×10周追加とか

長から一本取るまで永遠に打ち込みとか

そこで刀を作ってあげようと思うんだがどうする」

「はい、お願いします」

ちなみにここは神鳴流の道場ではなくダイオラマ魔法球の中だ
俺だけにここで特別メニューを組んでたし

ほかの神鳴流の人はもう俺が免許皆伝したと思っている

理由は簡単

道場で一番強い人を倒した

それだけ

「あと素材はこれですお願いしますか」

「いいが、なんだこの魔力は
ものすごい量だぞ」

「俺の能力の一つに限界点突破というのがありまして
それのおかげで魔力や気も使えば使うほど増えるんです
それのおかげで増えた魔力を大量にこめたんです」

「成程、孝樹様と同じというわけか
確かにその通りだな」

この会話で分かるように長は孝樹と俺の秘密を知っている
ちなみに孝樹は今いなく

前にあったエヴァンジェリンと一緒にだ

なんか桃色オーラ出していたが

「お願いします」

「分かった」

それから数か月後

俺のところに刀が届いた

「黒い方が黒刀・黒曜舞こくようのまいで白い方が白刀・破邪銀龍はじやのぎんりゅうだ」

「分かりました

これから頼むぞ黒曜舞こくようのまい 破邪銀龍はじやのぎんりゅう」

「で、これからどこに行くんだ」

「旅を続けようと思います

またここには来ます」

「そうか、怪我の無いようにな」

「ありがとうございます、長」

そういつて俺は次の世界にいった

S i d e a u t o

第21話 闇夜の巨人 十代VS大原&小原

S i d e 遊輝

本当に懐かしいな

もうすぐ危険なイベントも増えてくるし常備しておくか？

そうだな、ついでにあれらも常備しておくか

そうして取り出したのは

デクナツツの仮面・ゴロンの仮面・ゾーラの仮面・鬼神の仮面・金剛の剣

そしてムジユラの仮面

デクナツツの仮面・ゴロンの仮面・ゾーラの仮面・鬼神の仮面・金剛の剣はリンクさんの修行終了時に免許皆伝祝いにもらった

ムジユラの仮面は修行の時現れた悪い転生者を倒し神様のところに連れて行ったら

お礼としてもらった

詳しいことはまた別の話ってな

まあ、メタな発言はここまでにしておいて

旅の途中で手に入れたISの量子変換を利用して中に突っ込んでおいて

じゃあ寝るか

S i d e a u t o

S i d e 三人称

遊輝たちが綾小路ミツルと戦ってから数日後の夜

アカデミアのある場所でモブオベリスク・ブルー生徒がデュエルをしていた

「うわあ ああああああああ」

オベリスク・ブルーの生徒はデュエルに負け後ろに吹き飛ばされる
その時にカードが周りに散らばっていく

ひい
い
い
い
い
い

そのオベリスク・ブルーの生徒に近づいていく巨大な影
その巨大な影は散らばったカードの中からウルトラレアカード
パーフェクト機械王きかいおうだけを取る

「レアカードはもらっておく」

「はあああああ」

震えるオベリスク・ブルーの生徒
そして巨大な影は続けて言葉を放つ

「これに懲りたらでかい態度はあらためるんだな」

そういつて巨人は去っていく

それに安心するオベリスク・ブルーの生徒

その方向にはニヤリと笑う二人のラー・イエローの生徒がいた

Sideauto

Side 遊輝

いま、俺らはアカデミアの廊下を歩いている

するとオベリスク・ブルーの生徒が話しているのを見かけた

「昨夜^{ゆうべ}」

「レアカードを」

「また」

それを見て十代がつぶやく

「なんだ」

そうするとオベリスク・ブルーの生徒が逃げるように離れていった

「なんか気に入らないな、こそこそしやがって」

「確かに」

俺も相づちを打つ

「オベリスク・ブルーの奴ら、また何か企んでるのかも」

「いや、多分あの噂のせいだろう」

「噂？」

十代が訝しんでるな

なんかこの状況、テレビで見たけどなんだっけ

「オベリスク・ブルーの奴らにデュエルを吹っ掛けるデュエリスト

がいるらしいんだな

それも禁止されているアンティールールのデュエルを」

「ああ、その噂僕も聞いたことある」

「詳しくは分からないけど、そのデュエリストは雲をつくような大男だしいんだな」

雲をつくようになつて

誇張しすぎだろ

「うん、うん」

つて何うなづいてんだ翔は

「そいつは夜しか現れないんだな

だから闇夜の巨人デュエリストと呼ばれているんだな」

ちよつと待て

それは夜に外に出るオベリスク・ブルーが悪いんじゃないか

そもそもアンティールールを受けるのもおかしい

そんなことを考えていると

独り言を言いながらクロノスが来た

何度見ても気持ち悪いな

3次元だから余計に

あ、こつち来た

「そのドロップアウトボーイズ」

「なんですクロノスか白面先生」

「わ、クロノス教諭」

「なんかシニヨール石崎の言い方に違和感を覚えたのーね
まあそれはいいのーね
あなたたちーに特別課題を与えるのーね」

「「特別課題？」」

俺と十代の声がシンクロしたが
確かこれは、うん間違いない
地球の本棚（弱^{ほじ}）でもそう出た

「これをつまく解決できたーら、デュエル理論のレポートを免除するのーね」

「ほんとか」「マジで」

俺と十代はまたしても心がシンクロした

「ええ、ヤバイよアニキ」

「ほんとなのーね、この目を見るのーね（ニコリンチョ）」

「おっしやるぜ！」「俺もだ！」

「「ええ」」

「十だあい」

「で、なんだその課題って」

さすが十代、行動が速い

「今、この学園でアンティールルでデュエルを挑む輩がいるのーね
そいつをつか「成程、そいつを追いつけんなりなんなりしてこれから
の被害をなくせばいいんですね」

くう、そのとおりなのーね（ほんとには正体を暴かせようと思っていたのーに）」

「闇夜の巨人デュエリストを？」

なんか焦ってる

「とにかくしっかりやるのーね、カンゾーネ」

カンゾーネって何？

去っていく白面クロノス

「よし謎のデュエリストを探すぞお」

「勿論だあ！！」

「でもアニキに遊輝君、こんなの引き受けてまづかったんじゃ」

大丈夫、俺犯人知ってるし

まあ、今回は名探偵十代に任せるけど

「ええ？」

「クロノス教諭なんだぞお」

「何言ってるんだ」

レポート免除されて強い奴とデュエルできるんだぜ」

「デュエルはともかくレポ免は嬉しい」

「まあ、アニキと遊輝君ったらあ」

「仕方ないよ十代と遊輝だから」

ため息つかれたがレポ免は嬉しい

「で、どうするのアニキ」

「？」

「謎のデュエリスト探しだよ」

「それなら問題ない」

「え、遊輝君何か考えあるの？」

「ああ、俺が裏ルートで手に入れたオベリスク・ブルーの制服を着て夜にうろろろすればいい」

「もっている理由が気になるっす」

「禁則事項だ」

「そうつすか」

S i d e a u r o

S i d e 十代

今俺らはデュエルリンクに来たんだけど

「あ、ラー・イエローの方が勝ってる」

「いい勝負だな」

「確かに」

「どうした、お前のターンだぞ」

「ええつと、はあ」

あのオベリスク・ブルーの生徒マナー悪いな
相手が考えてるのにちよつとひどくないか

「うう？、十代手札みてみる」

遊輝が手札みてみるって言うてきた
何かあったのか？

「おお、アースクエイクなんて洒落たカード持ってるじゃん
これであいつの勝ちは決まりだな」

「さっさとしろよ!!」

「こっちが手加減してやってるんだぜ!!」

あいつ本当にマナー悪いな

「はあ」

「ラー・イエローが何やっても無駄だよ」

「どうせ勝てる訳ないんだ、早くしろよ」

「ええつとお」

「攻撃するのかないのか、さっさとしろ!!」

「へえ、はい!!」

猛進する剣角獣で攻撃します、あ」

「はあ？」

「何やってんだ？」

「え？」

遊輝のいうとおりあいつ何やってんだ

そこはアースクエイクを使うところだろ

「リバーズカードオープン!!援軍

このカードの効果でモンスター1体の攻撃力が500ポイントアップ!

いけえ切り込み隊長」

「うっ、ああ」

「勝てたデュエルなのに」

「確かに」

「小原ももう少し気が強ければな」

「三沢君」「みさわ空気」

「なんか変な響きが
まあいい、実力はあるんだがデュエル本番になると気の弱さが出て
負けてしまう」

そうなのか

デュエルは楽しくやるもんだと思うんだけどなあ

「お前みたいなやつはいつまでたってもオベリスク・ブルーに上
れるもんか」

「ああ、く」

「「「はっはっはっは」」」

「さっさと辞めてしまえばいいんだ」

あ、あいつ今の殺気は

「十代！」

遊気も気づいたみたいだな

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

「十代！」

あんな分かりやすい殺気、もしあの二人がダイオラマで修業中じゃなかったら警戒態勢に入ってるぞ

「何っすか」

「いや、なんでもない」

「ところでお前たちは見学か？」

「ちょっと犯人を捜しに」

「犯人？」

「闇夜の巨人デュエリストを探してるんだ」

「ああ、噂は聞いているが」

あれが大原か

「おお、大きい奴だなあ」

お前が言うか

「ほんと、アニキもしかしてあいつが」

「彼を疑ってるのか？違う違う」

「でも、あんな大きい奴そうはいない」

「はは、大原君っていうんだ

彼はデュエリストでなくゲームデザイナーを目指している」

「そっかあ、でも」

あいつからは殺気がないな

それから俺と十代が走っていく

「アニキ」

「遊輝」

走って行ってあの二人のところに行った

「おおい、ちょっと待てよ」

「お前が謎のデュエリストだな」

それは直球すぎるな

で、話していると

大原と小原は言いがかりはやめろって言って去って行った
翔と隼人は原作通り、否定してるな

その日の夜

じゃあ着てって

「うわぁぁぁぁ」

「アニキ」

着る前にこれかよ
って俺も追いかけてつと
そして森の中

「僕のレアカードが」

「奴はどこへ行った？」

そして指でさした方に向かう

「そっちか」

「確かに向こうから殺気が」

翔たちも叫びながら追いかけてくる

S i d e a u t o

S i d e 十代

「まてえええええ」

見つけた

「お前が闇夜の巨人デュエリストだな！」

「確かにでかいな」

「うわあ、本当にでかい」

翔と隼人ビビってるし

「やっと会えたな、俺とデュエルしようぜ
お前とやるにはアンティールだったな」

『クリクリー』

「おい、マジか」

「そうか俺を信じて一緒に戦ってくれるんだな」

あ、遊輝にも通じた

「俺が負けたらこれをやる」

「アニキ！それは」

「デュエルキング武藤遊戯にもらったレアカードだ」

翔と隼人が心配してる

「いいだろう後悔するなよ」

「へへ、行くぞ」

「「デュエル」」

「俺のターン、ドロー」

俺はジャイアント・オークを攻撃表示で召喚」

「いきなり攻撃力2200のモンスターを召喚するなんて…」

「さすがにオベリスク・ブルーを倒してきただけのことはあるなあ」

「だが、一度攻撃したら守備表示になっちゃうモンスターだ
そして守備力は0、そんなに怖い相手じゃないぜ」

「俺のターンは終了だ」

「結構普通だな、俺と十代だったら（ボソ）」

「遊輝君、何か言っただすか」

「なんでもない」

俺には聞こえてぞ、遊輝

「俺のターン、ドロー」

『クリクリー』

「お前を渡さないためにも頼むぜ！
俺はハネクリボーを守備表示で召喚
カードを3枚伏せターンエンドだ」

なんだ、この違和感

「ああ！」

「俺のターン、ドロ―
ジャイアント・オークでハネクリボーを攻撃」

「ありがとうハネクリボー―
トラップカード発動ヒーロー・シグナル
このカードの効果によりデッキからE・HERO バーストレディ
を特殊召喚」

「よし、これでジャイアント・オークを倒せる」

「甘いな」

「確かに」

「う？遊輝まで？」

「俺はさらにセコンド・ゴブリンを攻撃表示で召喚」

「ええ？モンスターカードなのに魔法スロットへ？」

「このカードは1（ワン）ターンに一度だけ装備カードとしてジャ
イアント・オークに装備し

攻撃表示に戻すことができる」

「ええ、そんなあ」

「よく考えられたコンボだ」

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

俺は手札からマジックカード融合を発動

フィールドのE・HERO バーストレディと手札のE・HERO
クレイマンを融合

来い E・HERO エレメンタルヒーロー ランパートガンナー 守備表示

ランパートガンナーの効果発動

このカードは守備表示のまま相手プレイヤーに攻撃力の半分のダメージを与える」

4000 - 1000 = 3000

「あ、青いの吹き飛んだ」

翔たちは驚いてるけど遊輝はやっぱり気づいてたな

「ど、どうしよう」

「いい加減出てきたらどうだ？ちゃんと向かい合ってデュエルしようぜ」

「「え？」」

「その通りだ、出てこないなら」

「ちょっと待て遊輝、お前は何しようとしてるんだ」

「なにつて、岩を斬る」

「無茶苦茶だぞ、それにその刀何処から」

「禁則事項だ」

「そうかよ」

また翔たちは驚いてる

「どうしてわかった」

「いや、大原から殺気でてないし、人形みたいだったぞ」

「遊輝、そこは俺のセリフだろ」

「そうだ、こいつは俺の指示通りにデュエルをしていたただけだ」

「昼間のデュエルの時もお前殺気出してたし」

「無視かよ、そしてまたかよ」

「まあいいや、お前本当はかなり強いんだろ」

「だったらなんだってこんなことを？普通にデュエルすれば？」

「それができれば苦労しない！！」

俺だって好きで緊張してるわけじゃないんだ

デュエル場に立って、相手にプレッシャーをかけられ、なにがなんだかわからなくなっただけで負けてしまう

大原だってそうだ

からだがおつきいてだけで怖がられたり、邪魔者扱いされたりオベリスク・ブルーの奴ら、馬鹿にしゃがんで！」

「そんなことして意味があるのか」

「なにに」

「デュエルで負けて悔しいなら正々堂々デュエルで勝てるようにすればいい

その方がきつとデュエルも楽しいぜ」

デュエルは楽しむものだし

「うるさい、うるさい

どんなことしたって俺たちが勝つ！
行くぞ大原」

「うっ」

「俺のターン、ドロー

俺はキング・ゴブリンを攻撃表示で召喚」

「攻撃力0？」

「更に手札に手札にある戦士族モンスターを墓地に捨てることでゴブ・ゴブリンを特殊召喚する

守備表示だ！

キング・ゴブリンの特殊能力発動！

このカードの攻撃力・守備力は他のフィールド上にいる悪魔族の数
×1000ポイントとなる！」

小原と大原、動きがシンクロしてるな
じゃなくてやばい、ってことは

「攻撃力3000！」

「そんなあ」

「十代！つく引きがよくないのか」

「いけ、キング・ゴブリン、ランパートガンナー を攻撃
ジャイアント・オークでダイレクトアタック」

「うわあああ」

4000 - 2200 = 1800

「ジャイアント・オークはセコンド・ゴブリンの装備カード効果で
攻撃表示に戻る

俺のターンは終了だ、どうだ！俺はホントは強いんだ！」

「いいや、お前は他人の手を借りて強くなった気だけで
それじゃ、本当のデュエリストにはなれない」

「うっ」

「俺のターン、ドロー」

手札からマジックカード強欲な壺を発動
デッキからカードを2枚ドロー

俺は融合を発動

手札のE・HERO スパークマンとE・HERO エッジマンを
融合

来い エレメンタルヒーロー E・HERO プラズマヴァイスマン

更にフィールドに伏せていた天よりの宝札「アニメ版」を使用
手札が6枚になるようにドロー

エレメンタルヒーロー E・HERO プラズマヴァイスマンの効果で手札を4枚捨て
お前のフィールドのモンスターをすべて破壊」

「なに！」

「エレメンタルヒーロー E・HERO プラズマヴァイスマンでダイレクトアタック
ヴァイススパーク」

3000 - 2600 = 400

「う、く

だがまだライフポイントは残る」

「いんや、このターンで終わりだ
マジックカード融合解除

これで最後だE・HERO スパークマンとE・HERO エッジ
マンでダイレクトアタック」

400 - 1600 - 2600 = -3800

「す、すごいよ、アニキ」

「怒涛の攻撃だったな」

「少しヒヤッとしたぞ」

「俺たちの負けだ、好きにしろ」

「小原君、たの「分かった」

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

「分かった」

「おい遊輝」

「じゃあちよつと手伝ってくれないか」

「え？」

翌日

「というわけで闇夜の巨人デュエリストには逃げられました
が
勇気ある小原君と大原君がデュエルで勝ったおかげでレアカードを
取り戻しました

奴も当分懲りて出てこれないでしょう
これが取り返したレアカードです」

「そうなのーね？」

分かったのーね（これで一つめんどくさいのが片付いたのーね）「

「では約束通りレポ免で」

そういて俺は消えた

「でも、よかったのかなこんだますような真似して」

「いいんだよ、これできつとお前らも見下されないよ」

「ありがとう遊輝君」

「ありがとう・・・」

そうこの二人がデュエルで勝って闇夜の巨人デュエリストを倒したことにしたのです

これでこの二人に、いやラー・イエローに対する対応も変わるだろうレポ免だしハッピーエンドだ

こうして闇夜の巨人デュエリスト事件は幕を閉じた

あれ、俺は誰に説明してるんだ

第21話 闇夜の巨人 十代VS大原&小原（後書き）

おまけ

「そついえば十代

お前、ダイオラマ魔法球の中と外とでしゃべり方違くないか？」

「ああ、なんでかわわっちまうんだよなあ
どうしてだろう」

「世界の修正力ってやつとかだったりして」

「もしかしたらそうかもな」

第3回主人公プロフィール（前書き）

主人公のプロフィールの更新がおかしいくらい早い気がする作者です
自分のせいなんですけど

それと今回のプロフィールから系統を少し変えます
あと、ネタバレ注意

第3回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長 十代と同じくらい

体重 50キロくらい

顔 ふつう

好きなデッキ ドラゴンデッキ 速攻展開デッキ 強奪デッキ サイバーデッキ

好きな人 性格がいいやつ デッキの実験に手伝ってくれるやつ
十代 仲間

嫌いな人 めんどくさいやつ ナルシスト 馬鹿神 綾小路ミツル

特技 フラグメイク【無意識】 読書

プロフィール まず金の荒稼ぎのためにこの世界に卒業したらどの世界に行くか検討中
性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。
前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖になっている。

最近十代との友情に芽生え前よりもデュエルが好き
になってきている

いつも面倒をかける馬鹿神が嫌い
だが、そのたびに天使とともに折檻して新しい能力

をもらっている

拷問だが

冬休みの修行で能力がとんでもないことに

能力値（新規）

フラグメイカーレベル 4 3 2

チートドローレベル 2 5 9 6 ただしキレると測定不能に

デッキ構築レベル 2 0 1 3 2

マッドサイエンティストレベル 5 7 6

魔力 5 3 7 2 現在リミッターで50レベルに

気 5 4 5 7 現在リミッターで50レベルに

戦闘術 1 7 2 6 参考 ネギまのナギが400

くらいかな？

チャクラ 1 5 6 0

レベル1と未使用は非表示

能力（新規）

第1話参照

不老不死

特殊な不老不死で肉体年齢を任意で変化できる
神様曰くやりすぎると地獄に即刻落とされる

時空間移動能力

時間と空間を超える能力

時間を超える能力は過去・未来に行ける

空間を超える能力はドラえもののどこでもドア強化版

二つを合わせることで異世界に行ける

4次元ポケット改

ドラえものの4次元ポケットみたくなんでも出せるポケット
神様がいろいろ入れている

ただしその世界にあったものしか取り出せない

第10話参照

絶対記憶能力

転生前の記憶を含むあらゆる記憶を絶対に忘れなくなる能力
ただし覚えすぎるとオーバーヒートする

瞬間記憶能力

一瞬でも見たものを完全に覚える能力

光の速さでも見れば覚える

圧倒的な脳の容量

この世のすべてを覚えても潰えない脳の容量

これのおかげで絶対記憶能力のオーバーヒートが起こらない

地球の本棚（弱^{ほし}）

地球の本棚の縮小版

自分がおぼえているものの中から必要な知識を引き出す能力
地球の本棚と違い問題などの答えなどを問題を考えるだけで
知識を呼び出せる

描写をしないが第11話の件で神を天使とともに折檻して手に入れた能力

魂容量10倍

自分の本来の魂の容量を10倍ほどに増やす
これによりより強い力を入手可能に

限界点突破

鍛え続けることで限界なく際限なく強くなる能力

魔力+気

ネギまの一般魔法先生並みの魔力と気を使えるようになった
普通はあまり上がらないが限界点突破により魔力を使えば使うほど
気を使えば使うほど最大値が上がる

ダイオラマ魔法球生成

自分の望むダイオラマ魔法球を作る能力
例としては

中では年を取らない1時間が1日になる別荘

トリコの食材が出てくる別荘

いろいろな武道を手ほどきしてくれるロボがいる別荘など

冬休みの修行（ただし未使用も大量にあるのでほんの一部）

神鳴流

ネギま世界の剣術

式の太刀もちろん打てる

ネギま魔法

かなりの魔法が使える

基本的に既存の魔法を自分が改造した日本語バージョンを使うが
ラテン語のものも使える

適正は光・闇・影

始動キーはデス・デストロイ・デス・クライシス

秘剣ツバメ返し

Fate世界のとある英霊を消滅寸前まで追い込み無理やり教えて
もらった

ナルト忍術

その辺の忍者は軽く倒せる程度の腕
ただ今影分身修行中

緑勇流

ゼルダの伝説のリンクのあらゆる戦闘術

パチンコから弓矢、爆弾にトワイライトの主人公が金狼に教わった
剣技も教わった

アイテム
道具（新規）

黒刀・黒曜舞
こくようのまい

黒曜石を中心に玉鋼たまはがねやアダマントイトを使って作られた

ネギま世界で神鳴流免許皆伝の時に作ってい

ただいた

魔力を込めて作ったので妖刀になっている

白刀・破邪銀龍 はじやのぎんりゅう

ミスリル

ブラチナ

破邪の銀を中心に白銀などを使って作られた

ネギま世界で神鳴流免許皆伝の時に作っていた

ミスリル

破邪の銀を使ったせいか聖剣になっている

こてい

金剛の剣

リンクの修行免許皆伝時にもらった剣

刃こぼれせず高い攻撃力と長いリーチを持つ

デクナツツの仮面

リンクの修行免許皆伝時にもらった仮面

装備するとデクナツツの姿になる

デクナツツとしての力として魔力を消費してシャボン玉を発射することができる

更にネギま魔法の適性が

水・風・闇・影に変化する

闇があるのは呪いの力を封じ込めた仮面だから

ゴロンの仮面

リンクの修行免許皆伝時にもらった仮面

装備するとゴロンの姿になる

ゴロンの力によりゴロンの巨体を生かしたパンチやプレスは強力
炎に強く、溶岩の上を歩いてもダメージを受けない

転がりダッシュはある程度のスピードがつくと、爆発的なスピード
を出す

この際、魔力を消費して全身からトゲが生え攻撃力が発生する

更にネギま魔法の適性が

火・光・影になる

光がある理由はゴロン族の英雄、ダルマーニ3世の魂をいやすこと
で手に入れた仮面だから

ゾーラの仮面

リンクの修行免許皆伝時にもらった仮面
装備するとゾーラの姿になる

ゾーラの力により水中を自在に泳いだり、水底を歩くことができる
水中、地上を問わず魔力を消費して電流のバリアを張れる
歩行時は両腕のヒレを飛ばすブーメラン攻撃も可能

更にネギま魔法の適性が

水・風・氷・雷になる

雷がある理由はゾーラ族の人気バンド「ダル・ブルー」のギタリスト、ミカウの魂をいやすことで手に入れた仮面だから

鬼神の仮面

リンクの修行免許皆伝時にもらった仮面

装備すると白い服を着たような姿で、「8」の字を描いたような奇妙な刀身の両手剣を常に構える姿になる

更に鬼神としての力として剣を振ると魔力を消費して光線を撃てる
そして強大な魔力と気、魔の力を得る

魔力と魔の力は違うもので魔の力は魔物などという意味の魔である
更にネギまの魔法適性が

光・闇・影・雷そして特殊属性の重力に変化する

ムジユラの仮面

リンクとの修行中にれた悪い転生者を倒し神様のところに連れて行
ったら

お礼として神様に（無理やり）もらった

本来のムジユラの仮面は長い間呪いの儀式に使われてきたせいで邪
気がたまり

意思を持った魔物となって月を落とすことによって

タルミナを滅ぼそうとしたところをリンクに倒され邪気と意思

そしてかなりの魔力を失った

しかしこの仮面は月をも動かすだけの魔力をそのまま持っており
強力な魔の力が込められている

それによってリンクが言うにはリンクの修行免許皆伝時では40%
くらいしか使いこなせていないらしい

これを装備するとネギま魔法の適性が

氷・闇・影そして特殊属性の重力に変化する

収納ブレスレット

ISの世界の量子変換をもとに作った収納器
形は腕輪

仮契約者 ライネス・サイコ

なぜか主人にしか慣れない

第22話 究極のドロー対決 十代VS大山

Side 遊輝

「待つてよアニキ」

「十代、落ち着けよ」

「今日こそは、今日こそは」

なんで十代がこんなにあせっているかというと

ドローパンのせいだ

翔の説明によると

ドローパン

コロツケ、焼きそば、ピザなどのパンが

外からは見えない袋に隠されている購買部の名物パン

何が出るかわからないパンに我々がこれほどロマンを掻き立てられるにはわけがある

デュエルアカデミアで飼われている黄金の鶏

こいつが1日に1度しか生まない黄金の卵を具に使った卵パン
このレアなパンをゲットするために

我々は日々このパンをドローするのだ

そして連続20回卵パンゲットの記録を持つアニキこそ
キング・オブ・卵パンの称号に相応しい
でも

9回連続はずれているらしい

ちなみに俺は30回連続で確かカードパンだっけ
あれを当ててる

しかも中に入ってるのが

ファイブユニット ドラゴン

F・G・Dとか

真紅眼の黒竜とか
レッドアイズ・ブラックドラゴン
エレメンタルヒーロー

E・HERO プラズマヴァイスマンとかのレアカードだから
オークションで売ってもうけてます
ドローパン、ほんとにおいしいです
まあ、それはともかく
今から、十代がドローしようとしている

「ドロー！」

十代がドローパンを取った
でも十代が外れるイベントってあれしかないから
いくらドローしても無駄なんだよな

「あん

ええ、甘栗パンだ」

「これで十回連続で外れちゃいましたね
どうしたんです？ アニキ」

言わないが俺は理由を知ってる
まあ確かカードパン？で儲けてる俺には関係ないが

「十代まではずしちゃうとわね」

「明日香さん」「痴女」

「明日香、お前も卵パン好きだったのか？」

「ば、馬鹿言わないでよ

私はドローの練習を、それに私は痴女じゃない」

「ふーん、どうだか」

「ほ、ほんとよ」

赤くなつて言つても信憑性に欠けるぞ痴女

「ごめんなさいねえみんな

じつはね、卵パンこの中にはないのよ」

「「ええ!?!」」

知つてたけど十代たちには言つてません

何か?

今更だけど

「1週間前から、どうも卵パンだけが盗まれているのよ」

「盗まれた」

「とんだ、隠れチートがいたもんだ(棒読み)」

「すごい

卵パンだけを盗んでいくなんて、なんという引きの強さ」

十代、翔をそんなに睨んでやるな

怯えてるし、それは八つ当たりだ

「みんな楽しみにしてくれてるのにねえ、本当に申し訳ない」

「トメさんが誤ることないぜ、悪いのはその泥棒野郎だ」

それはそうだな

「じゃあ、俺らが張り込むっていうのはどうだ」

「いいな、遊輝それでいこう」

翔！今日から張り込みだ」

「うん！つて、え」

そして夜

張り込みのメンバーは

十代・隼人・翔・明日香・トメさん・俺だ
で、今十代と翔がばば抜きをしている

「それ、やったあ」

お、十代が勝った

ま、そりゃ公式チートドローだしな

「やっぱアニキの引きはすげえや」

「あつたりまえよ」

調子乗りすぎだ

で、いろいろしゃべっていると

「みんなご苦労様、夜食だよ」

「うまそう」

「中の具はなんなのかなあ」

「梅、おかか、鮭の3種類だよ
性をつけて頑張って、今夜は私も泊まるから」

「ありがとうトメさん」

「鮭はどれかなあ」

おい隼人

顔が大変なことになってるぞ

「その「待った、引きおにぎりだ
俺も鮭が好きだぜ、順番で引こう」

「乗った、俺も鮭が好きだしな」

「ええ、みんなえ分ければいいんだな」

正論ですね

でも、面白くないじゃないか

「でも、面白そう」

「くだらなそう」

「俺のターン、ドロー」

おいしく食べる十代
はたして、中身は

「鮭召喚！」

なんと好物の鮭だ

「じゃ、俺もドロー！」

俺の中身は

「同じく鮭召喚」

「ほんと兄貴たちのドローはすごいな」

「当然、俺の目的は卵パンじゃなくてカードパンだから外れてないし」

「俺も腕は鈍っちゃいないぜ
卵パンが盗まれていなければ記録更新だったのによ」

しばらくして

それぞれいろんな場所に隠れる俺たち

十代・翔・隼人は机の下

明日香はロッカーの中

トメさんはカウンターの下

俺はみんなにも内緒ですが実はそのまま真ん中です
認識障害です

突然ガチャガチャという音はなり始め
みんな揃ってカウンターの後ろの窓ガラスに顔をつけて外を見た

「何しようってんだ」

十代が不思議がってる
と思ったらシャッターが上がった

「なんて怪力」

翔の言うとおりだ
なんちゅう怪力だよ
謎の男がドローパンをとる

「今だ」

十代の言葉で中に入る俺たち
トメさんが電気をつけた

「ああ、あ、あ」

なんか戸惑ってるし
というかりアルにみるとすげえ体だな
まさしくターザン？

「こらあ、泥棒！」

「もう逃げられないぞ！」

トメさんがなんか驚いてるな
あ、そうか知り合いか

「ア、アアアアアアアアア」

ほんとにターザンかよ

そう思うとドロップンの代車をもってシャッターに突っ込んだ

「逃げやがって、追うぞ！」

「うん」「ああ」

「」「待てええええ」「」

っと思うとジャンプって

おいおい、あいつ一般人だよな一応

なんでこんな高いところから飛び降りてターザンの真似事ができんだよ

「あ、ああああああああ」

「なんだあいつ、ターザンか？」

ほんとだよ

リアルターザンかよ

なんかいろいろ超越してるし

「先回りするぞ」

「うん！」

「俺はこっちの方が速い」

「つてお前は忍者か？」

「木の葉の里で習ったのさあ」

俺はその高台からよく木の葉の忍びがやってるように枝に飛び移って追っていく

「木の葉ってナルトかよ
まあいい、行くぞみんな」

俺は追いかける

「あ、あああああああ」

あと少し

「あ、あああああああああ」

「そこだ、しんめいりゅうおうぎ神鳴流奥義 ざんくうせん斬空閃」

俺はとつさに白刀・破邪銀龍をはじやのぎんりゅう収納ブレスレットから取出し
リアルターザンがつかんだツタの上の部分に向けてざんくうせん斬空閃を放つ

「あああああああああああああ」

なんか悲鳴を上げながら落ちていくリアルターザン
その先に十代たちって

早

「うっ」

しかも着地したが

「そうはいくか、バインド」

俺はリリカルなのは世界で覚えた魔法バインドを一瞬だけ放つ
するとターザンの一瞬だけ白い光が包み
ターザンがこけた

その隙に俺はターザンの後ろに回り

ターザンの両手の親指をつかみ頭の上に持つていく

昔、こうすると腕が動かなくなるって聞いたからやってみた
結果はホントに動かなかったよ
すこ

「っく」

「大山くん」

「トメさん」「トメさん、足はよい」

「いや、あれに追いつくお前らの方が速い
なんだ、ギャグ補正か、ギャグ補正なのか？」

「いや、忍者のお前の方がすごいから
どうして、漫画の技が平気で使えるんだ」

「頑張ったから」

「もういいよ」

「放してあげて、大山君なんですよ」

「わかったトメさん」

そういつて俺は放す

「やっぱり大山君」

「やっぱりターザン？」

「隼人、ターザンじゃなくて大山だ」

俺はすかさず突っ込みを入れる

「トメさん、お久しぶりです」

「ちゃんと喋ってる」

「大山で思い出した

トメさん、確かオベリスク・ブルーのおかつぱにそんな名前の先輩がいた気がする」

俺はわざとらしく言ってみる

「よく知ってるね、その通りだよ

大山平君、オベリスク・ブルーの生徒だった子よ」

「「ええ」」

まあ、そりゃ驚くわな

あのターザンが生徒だったって言われれば

「とつても優秀な子だったんだけど1年前に突然行方不明になってまさかこんなとこいたなんて」

「痴女、お前の兄とは関係ないぞ

俺が調べた結果、いやタイタンからの報告によると

お前の兄たちは例の現在廃寮の特待生の寮にいたとされていて
同時期にその寮の人間と姿を消したらしい
これはタイタンからの謝罪だってさ」

俺は痴女に近寄り痴女にしか聞こえないように言う

「それ本当？明日にも詳しく教えて
あと痴女じゃない」

「分かった、明日の放課後、レッド寮の近くにあるぼったて小屋に
来てくれ」

「分かった」

そんな話をしているうちに話が進んでた
なんでも、昔はすげえここぞの引き運が悪かったそうだし
山にこもって引きの修行をして生まれ変わったとか
アニメ通りだな

「そして修行の完成を確かめるため

俺は試した因縁の卵パン」

因縁って、あのさあ

「そして一週間連続的中
うううう、頑張った俺」

さいですか

「そうだったの」

トメさんもあのなあ

「待てよ、俺もお前が盗んでいくまではずしたことなかったぜ」

「それはお前がチートドローだからだろ」

「遊輝が言うか」

「何？」

「どうだい？俺にも引きにはちょっとばかり自身があるんだ
このおれと戦うことで卒業試験としたらどうだ」

「ふっ、おもしろいな」

この引きの強さデュエルで試してみたかった」

「おし、やろっぜ」

翔と隼人は悩んで

明日香なんかは頭を抱えてるよ

「だったら十代

こいつらを貸すからお前のウルトラチートドロ^マーを見せてくれ」

そういつて渡す2枚のカード

「こいつらは

「（マスター？）」

「いいのいいの（ライネス、お前の真理^マの力みてみたいんだよ）」

「（そういうことですか

確かにあれは普通のハネクリボーとでは召喚できない）」

「分かったぜ」

「話は終わったか」

「ああ」

「行くぞ」

「「デュエル」」

S i d e a u t o

S i d e 十代

「俺の先行で行くぜ、ドロー！」

俺はE・HERO エレメンタルヒーロー フェザーマンを攻撃表示で召喚

カードを2枚伏せターンを終了するぜ、粹のいい引きを見せてくれよ」

「1年間の修行の成果を見せてやるぜ

俺のターン！ドロー！（ふっ、修行の成果があったぜ）

まずは俺はカードを1枚伏せる

そして俺はこのドローカード、ドローラーを召喚

ア、アアアアアアアアアアアア」

でっかい石みたいなモンスターだな

ドローって名前についてるしなんかドローに関係あんのか？

「ドローラー？」

「ドロー？」

「ドローラーねえ」

遊輝は知ってるみたいだな

「ドローラーの攻撃力と守備力は手札からデッキに戻したカードの枚数×500の数値になる

俺は手札を4枚デッキに戻す」

「カードを全部う？」

「ええ、手札なくなっちゃうよ」

「攻撃力2000」

すげえな、こいつの覚悟

「ドローラーでフェザーマンを攻撃 ローラープレス！」

フェザーマンがってなんでデッキの下にいったんだ

$4000 - (2000 - 1000) = 3000$

「何!？」

「ドローラーに破壊された攻撃表示モンスターは

墓地へは行かずデッキの一番下へ行く、墓地から引き上げることはできないぞ

これでターンエンド」

なんてめんどくさい効果なんだ

「やるな

俺のターン、ドロー!

(俺も引いたぜ)手札から融合を発動

手札のE・HERO クレイマンとE・HERO バーストレディ
を融合

来い E・HERO エレメンタルヒーロー ランパートガンナー
守備表示で召喚」

「守備表示か」

「いや、E・HERO エレメンタルヒーロー ランパートガンナーは

守備表示のまま攻撃力を半分にして直接攻撃ができる」

「な！」

「ランパードショットお！」

「おわぁあああぁ」

4000 - 1000 = 3000

「ターンを終了するぜ」

「すごいわねえ十代ちゃん、で、どっちが勝ってるの？」

「「「え？」「」「」

「同点」

「いや、手札がある分十代だろ」

「そうつすかね」

いや、翔たちの言うとおりか怪しいと俺は思っぜ
デュエルは最後までわからないもんだしな

「（さすがに引きの強さを豪語するだけのことはある
だが、俺の引きはその上に行く）」

何を引く？

「（まだひかない）

場から永続トラップ

奇跡（きせき）のドロー！を発動

ドローフェイズの前にドローカードを宣言する

当たった場合、相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを
間違った場合は俺が1000ポイントのダメージを受ける」

「ドローカードを当てる？」

「かなり無茶苦茶だな」

「面白いじゃねえか」

「当たらないと思っっているだろう」

「わからねえ？」

遊輝なら当てそうだけど

「俺でもさすがにそれは無理だ、読心術なめんじゃねえぞ！」

すげえな

「分かるんだよ

引きの真髄を解得かいとくしたこのおれには」

なんか急に黙り込んだ

まさか、本当にあてるのか？

「ドローカードはカードローン！ドロー」

「当たった」

「そんな」

「またドローのつくカード」

「マジか」

まさに真髓って感じだな」

すげえ、マジかよ

「1000ポイントのダメージを受けてもらっぜ」

「うっうっ」

3000 - 1000 = 2000

「そして、このカードローンを発動する

相手は1000ポイントライフが回復

俺は1000ポイントのダメージを受ける

そしてデッキから1枚カードを引く

引いたカードはこのターンのエンドフェイズにデッキに戻る」

2000 + 1000 = 3000 十代

3000 - 1000 = 2000 大山

「そこまでして引きにこだわる」

「きたあ！この引きを見よ

手札からマジックカード、ドローボウを発動
カードを1枚引け

そのカードを俺があてる

もし当たった場合

お前の手札とフィールド上すべてのカードをデッキに戻してシャッフルする」

「当たったら十代の場はがら空き」

「あいつは超能力者か」

遊輝のいうとおりまっただけ
多分当てるんだろうな

「ズバリ、融合解除！」

「あっはっはっは、すげえな」

「ドローとかの問題じゃないだろ」

マジすげえ

「ドローラーでプレイヤーへダイレクトアタック ローラープレス」

ソリッドビジョンだけど怖ええ

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

俺はフレンドッグを守備表示で召喚」

「ターンを終了するぜ」

「十代ちよつとマズいんだな
次の大山のターンにあの奇跡（きせき）のドロー！でカードを当てられたら」

「どっちが勝ったの？」

「まだ」

「（いよいよだ

次のドローカードを当てることができれば俺は勝てる
勝てるんだ、フレンドッグは守備表示

そうだ！シールド・クラッシュを引き当てることができれば
あの魔法効果は守備モンスターを破壊する

そうすればダイレクトアタックで十代を倒せる
シールド・クラッシュ、シールド・クラッシュ
ドローカードはシールド・クラッシュだ！」

「名前にドローがついたカードじゃない」

「早まったな、大山」

「あ」

「「外した??」」

「当たり前だ、あんな邪念でデッキが答えるか」

「ぐわああああ」

2000 - 1000 = 1000

「ドローンを攻撃表示で召喚

俺の方が圧倒的に有利なんだ、どんなことがあっても俺が勝つ
ドローラーでフレンドッグを攻撃 ローラープレス」

「十代の勝ちだな」

「え、明らかに相手の方が有利ですよ」

「見てれば分かる」

確かに俺もそう思うぜ

「フレンドッグの効果発動

フレンドッグが墓地に送られたことにより

墓地から融合とE・HERO バーストレディを手札に加える」

「まだ攻撃は続いている！！

ドローンでプレイヤーにダイレクトアタック オドローン」

「うわ、っく、うわ、っく」

1000 - 900 = 100

「アニキ」

「で、どっちが勝ったの」

「まだですよトメさん
次の十代次第だが」

「ターンエンド

お前のライフもあと100、勝負あったな
これでおれの修行も完成する」

「分かってねえな、お前の修行はとっくに完成してたんだよ」

「何???」

「お前引きのことを

自然の力がどうだの言ってるけど
それよりなにより、お前さっきまでわくわくしてたろ
カードを引くことに」

「あ、ああ」

「ドローすることが楽しいから
そのためのデッキを作ったんだろ
だったら最後までわくわくしなきゃ
価値なんて意識するなよ、だからお前は外したんだ」

「ふざけるな！

引きの極意がそんな下らんことであるはずがない」

「それがそうなんだよ

卵パンを思い出せ、わくわくすることに引きの神様は答えてくれる

んだ

このドローわくわくするぜ」

「あ」

「俺のターン、ドロー

強欲な壺を発動

2枚ドローするぜ

デッキが答えてくれて俺の相棒と遊輝の相棒が来てくれたぜ」

「そんなモンスターたち引いたところでいったいなんになる」

「面白いことになるんだよ

俺は手札から融合を発動

手札の俺の相棒ハネクリボーと遊輝の相棒光と闇の竜（ライト＆amp; mp：ダークネスドラゴン）を融合」

「光と闇の竜（ライト＆amp; mp：ダークネスドラゴン）とハネクリボーを融合？」

「マアト召喚」

そこに現れたのは神々しいモンスターだった

S i r e a u t o

S i d e 遊輝

「マアト召喚」

ついに真理を見れた^{マアト}

輝く千年アイテムが神々しいね

こいつを見たかったんだが

微弱だがマアトのカードから精霊の気配が
もしかして今回の召喚で覚醒しかけたか？

「マアトの効果発動

カード名を宣言しドローする！

正解したとき、そのカードを使用し再び効果を発動できる！」

「十代までそんなカードを」

「で、どっちが勝ったんだい」

「まだです」

「宣言するカードは？」

一瞬止まった

あ、あれか

「ライトニング・ボルテックス

ライトニング・ボルテックスを発動し手札のE・HERO バース
トレディを墓地に送り

ドローラーとドローンを破壊

宣言したカードを引いたことで再びマアトの効果を発動

俺はマアトの効果でドロー

マアトの攻撃力と守備力はマアトの効果でドロー数×10000ポイ
ントになる

マアトの効果で2度ドローした

これによりマートの攻撃力は2000
マートでダイレクトアタック 真理の天罰」
ヴィンティション・オブ・マート

「うわあああ」

1000 - 2000 = 1000

「お前にはもうわかってたんだよ
明日一緒にドロパン引こうぜ」

「う、うう」

そのあと、大山とのちよつとしたイベントがあり
泣き出した

どんなイベントだったて

ほんとドロパン引きたくて山を下りたんだってさ

その翌日の朝

「痴女、これが調査結果だ」

「娘よお

あの時はすまなかったなあ

これは謝罪だと思ってくれえ」

「いいわよ、もう、それに私は痴女じゃない
それよりこれ本当？

こんなに行方不明者がいたなんて」

「ああ、間違いない」

「ほんとだあ

この学園には裏があるということだあ」

「分かったわ、ありがとう」

そのあと聞いた話だが

痴女が卵パンを引いて子供のようににはしゃいでいたそうだ
また更にそのあと

「魔力と気を込めて」

俺はマアトのカードに魔力と気を送っていた

十代は気が付いていなかったが少しだけ精霊の気配がする
そして送り始めて数分後

「マスター？」

「やっと目覚めたか」

「私を呼び覚ましてくれてありがとうございます」

えっと、なんでたかつき嵩月かなで 奏

どう見てもアスララインのたかつき嵩月かなで 奏なんだけど

黒髪、容姿端麗・スタイル抜群しかも片目が緑色

「えっとマアト？」

「そうですが、なんでしょう

言っておきますがこの姿はマスターの記憶の中から私が氣にいった

姿ですのであしからず」

そういうことか

「じゃあこれからよろしくなマアト

いや、その姿だし奏^{かなで}ってこれから呼ぶよ」

「はい、ありがとうございますマスター」

「マスターじゃなくて遊輝でいい

あと、明日からマアトも修行な」

その後、仮契約したんだが

接吻で、契約陣書こうとしたら勝手にキスの方の契約陣引いてキスしてきやがった

なんで、俺、フラグ立てたか

それともめんどくさかったただけか？

いや、予想外のあのマアトの性格からそれはないと思う

ちなみに人間体の姿はあの姿が気に入ったらしい

まあ、俺的^{たかつき}に嵩月^{かなで} 奏は好きなキャラだから嬉しいけど

いやな予感が

ついでに言っと

マアトの仮契約カード

チートだった

第22話 究極のドロー対決 十代VS大山（後書き）

《ドローラー》効果

効果モンスター

レベル3/地属性/機械族/攻撃力？/守備力？

このカードの攻撃力・守備力は召喚時に手札からデッキの一番下に戻したカードの枚数×500ポイントの数値になる。

このカードが戦闘で攻撃表示モンスターを破壊した場合、そのモンスターは墓地には行かずデッキの一番下に戻る。

《奇跡（きせき）のドロー！》効果

永続罫

自分のターンのドローフェイズ時にカード名を1つ宣言する。

ドローしたカードが宣言したカード名と一致した場合、相手に1000ポイントのダメージを与える。

違った場合は自分は1000ポイントのダメージを受ける。

《カードローン》効果

通常魔法

自分のデッキからカードを1枚ドローする。

相手は1000ポイントのライフを回復し、自分は1000ポイントのダメージを受ける。

この効果でドローしたカードはエンドフェイズにデッキに戻しシャッフルする。

《ドローボウ》効果

通常魔法

カード名を1つ宣言して発動する。

相手はデッキからカードを1枚ドローする。

宣言したカード名と同じカードをドローした場合、

相手は手札と自分フィールド上のカードを全てデッキに戻しシャッフルする。

ドローン

攻撃力900

マアト 効果

融合モンスター【ハネクリボー+光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）】

レベル10/光属性/天使族/攻撃力？/守備力？

召喚時、カード名を宣言しドローする

正解した時そのカードを使用でき再び効果を発動することができる
攻撃力・守備力はこの効果でドローした枚数×1000ポイントになる

マアトの仮契約カードは

次のパーティー紹介の時紹介します

第23話 盗まれた決闘王のデッキ VS 神楽坂（前書き）

『は精霊

（）は念話です

今回は賛否両論別れるかもしれませんが

第23話 盗まれた決闘王のデッキ VS 神楽坂

Side 遊輝

大山の事件から数日後

大山はトメさんの頼みもあつて校長がオベリスク・ブルーに復学したといつても条件が2年生からが条件だったが
そんなもつて

武藤遊戯のデッキが展示されるらしい

俺は学校が始まる前に入手したぜ

そんで今日もドローパーンを買おうともつて十代といっしょに購買部に來たんだが

「お、何の騒ぎだ、喧嘩か？」

「十代、それはないだろ」

『そうですよ、マスターの言つとおりですよ』

つてなぜ奏^{かなで}がいる

『えつとマスターと一緒にいたかつたから
気合で影分身覚ええました』

さいですか

「誰だあれ？」

「神楽坂、ラー・イエローの生徒だよ」

「確か記憶力がよすぎてほかの人のデッキに似ちまうってやつだろ」

「詳しいな、そのじょうほ「禁則事項だ」最後まで言わせろ」

「そうじゃなくて、だから何をやってんだよ、翔？」

「アニキ！」

「どうしたんだ、翔？」

「どうもこうもないっす、あれあれ」

そういつて王様のポスターを指さす翔

「デュエルアカデミアにて

初代デュエルキング

武藤遊戯のデッキ

特別展示

ってことは遊戯さんの使ってたデッキがこの学園に来るのか？」

「っておいおい

俺が朝話しただろ」

「そうだっけ」

「これはもう見るしかないでしょ

アニキ？アニキイイイイ？」

「十代、いったいどうした」

『放心してるんですよ、マスター』

さいですか

最近これ多い気がする

「遊戯さんのデッキがこの学園に！」

「武藤遊戯といえば

デュエリストキングダムではデュエルモンスターの生みの親
ペガサスを倒し

バトルシティーでは

海馬瀬戸やマリクを倒し

神のカードを駆使して

デュエリスとの頂点に君臨した伝説のデュエリストっす」

「それに幾多の闇のデュエルも経験しているデュエリストだ」

俺が補足

「神のカードは入ってないだしけど

ブラック・マジシャンやブラック・マジシャン・ガール

他にもお宝カード満載の激レアデッキ

絶対見なきゃ損ですよ」

「それはわかったけど

この事態と何の関係があるんだ？」

「購買部で朝一番にみられる整理券を配ってたんだけど

最後の一枚になってデュエルで決着つけようってことになったんだ

よ」

「無茶すんなって翔」

「何言ってるんすか

あの整理券は兄貴の分っすよ
僕の分は、ほら」

「俺も持ってるぞ」

「頑張れよ翔」

「分かってるっす」

（現金な奴だな）

『そうですね、マスター』

（この前も言っただけど遊輝でいいから）

『遊輝、わかりました』

「デュエル再開」

翔が宣言した

現在、翔の場はジェットロイド
神楽坂の場は伏せカード2枚

「俺のターン」

ドローって言わないんだ
珍しいな

「マジックカード大嵐
場のすべてのマジック・トラップカードを破壊するのーね」

「つげ、なんかデシャブーが」

「確かに白面クロノスを思い出す」

「神楽坂はクロノス先生のコピーデッキだ」

「三沢、いつの間に前へ」

三沢エアライズの空気化はこの時始まったのか

「なんか嫌なことを考えられた気がする」

鋭いな

そんなこと言ってるうちにあれは邪神トークンか？

「2体のトークンを生贄に古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレムを召喚する」

「おお」

だめだ
神楽坂が白面クロノスに見えてきた

「いけ、古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレム！」

「ジェットロイドの特殊効果発動

このカードが攻撃対象になったとき手札からトラップを発動できる
魔法の筒」
マジック・シリンダー

うまいな

「僕が受けたダメージはそのままお返しだ」

「なに？」

「うわああああ」

1000 - 3000 = 2000

「やった、僕の勝ち」

「すごいぜ、翔

俺が苦労したコンボをあつさり破りやがって」

「確かに今のは参考になった

今後のデッキづくりに生かさせてもらうぜ」

「いやあ、アニキとクロノス先生のデュエルを覚えていて

カウンターをデッキに入れといたら

ばっちり決まっちゃった、はっはっはっは

おっとこれは僕がもらうよ、悪く思わないでね」

ほかのみんなは帰って行っただが

あんな陰口は酷いだろ

だれだって負けるときは負けるのにな

『あれはひどいと思います、遊輝もそう思いますよね』

(ああ)

三沢もあんなのーてんきに

あ、神楽坂おこって行っちゃたよ

「三沢、お前は少しは空気読め」

「は、何のことだ？」

駄目だこりゃ

その日の夜

「遊輝、一緒にデッキ見に行かないか？」

あのイベントか

「行くぜ」

その後アカデミア廊下にて

「お、十代に遊輝」

「三沢じゃないか、どうしたんだ？」

「はっはっはっは」

ちょっとフライングしてキングのデッキを拝みにね」

「なんだ、みんな考えること同じか」

「マンマミーヤア」

はあここの警備はいつたい何をしてるんだ
精霊たちも全員呆れてるよ

「なんだ、今の」

「あの、声は」

「盗まれたのか？」

中に向かう俺ら

「ニヤ、ギャビーン」

「クロノス教諭？」

「展示ケースが」

「遊戯のデッキがないんだな」

「まさか、クロノス先生が？」

「それはない
もしそうだったらケースを割る必要がない
クロノス教諭

俺たちが犯人を見つけるので
そうですねレポ免1ヶ月でどうですか」

「分かったのーね

他の人に言わないでほしいのーね
だから、お願いしますのーね」

「探すぞ」

その後

「確か、海岸の近くだったはず」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「あっちか」

俺は体を気で強化して走る

「見つけたぞ、泥棒」

「お前は石崎遊輝」

「俺とデュエルして勝ったらデッキを返してもらおう」

「いいだろう」

「遊輝、勝てるわ」問題ない、あの雑魚は俺が潰す」雑魚って」

「雑魚はお前だ」

「やるぞ」

『あんな輩に負けるんじゃないぞ』

『確かに彼は気に入らないな』

『私も気に入りません』

人のデッキを使っておいて強くなった気でいるなんて叩き潰してやってください』

（もちろんだ）

「行くぞ、貴様の魂狩くさうしやうらせてもらおうか」

「デュエル！」

「翔！どうしたんだ」

「僕がデュエルして負けて

そのあと遊輝君が来て、勝ったらデッキを返すってデュエルを始めたんだ」

「遊輝、相手はむ「だからなんだ

戦っているのは武藤遊戯じゃない
だったらそれは見た目だけの強さだ

本物の強さじゃない」だけど「黙ってみてろ」分かった」

「おしゃべりは終わったか」

「ああ、俺のターンから行くぞ、ドロー！」

俺は融合発動

手札のブラック・マジシャンとバスター・ブレイダーを融合

来い ちょうまどうけんし 超魔導剣士・ブラック・パラディン」

「ブラック・パラディン！」

十代と翔は驚いていないようだが

三沢と神楽坂が驚いてる

「俺が持つてたらおかしいか？」

融合解除

来い ブラック・マジシャン バスター・ブレイダー

さらに師弟（してい）の 絆（きずな）を発動

デッキからブラック・マジシャン・ガールを表側守備表示で特殊召喚する」

「な、ブラック・マジシャン・ガールだと

このデッキにしか「前に十代たちに言ったが存在してるのがその1枚だけだと？」

馬鹿か！それじゃ神とレア度が一緒だぞ

使われてないだけで持つてるのは武藤遊戯だけじゃない」だからなんだ

このデッキは最強だ」

「やっぱりブラマジガール可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い

僕に1枚ちょうだい、遊輝いいでしょ」

「1枚、1000万なり」

「諦める
でもやっぱりほしいなあ」

「命削りの宝札を発動
手札が5枚になるようにドロ
リバースカード5枚セット
ターンエンド」

こいつは消す
その根性叩き直させてもらう

「俺のターン
幻獣王ガゼルとバフォメットを手札融合
出でよ、有翼幻獣キマ「消え失せる
奈落の落とし穴発動
有翼幻獣キマイラを除外
除外なので有翼幻獣キマイラの効果は発動しない」
なんだと

カードを2枚伏せ
速攻魔法サイクロン トラップカード 砂塵の大竜巻を発動
2枚とも消える」
な、そんな馬鹿な
俺は最強のデッキを手「黙れ
さっさとすすめる」つく光の護封剣を発動
ターンエンド」

「なんか遊輝怖くないか」

「ありゃキレてるな」

それと隠れている奴らでこい
盗み見とは行儀がよくないんじゃないか
そこにいるカイザーと痴女
他にもそこらにいる生徒たち
それと神楽坂は責められるべきではない
神楽坂に陰口履いてたやつら
お前らのくずのような行動のせいで神楽坂はこんなことしたんだ
俺が言いたいのはそれだけだ
帰らせてもらっ

俺はそれだけ言って帰って行った
俺の言動は何か考えさせるものがあつたようだ
神楽坂はどうやらアニメとは違い考え直し多重コピーデッキを使う
ようになつたらしい
罰は制裁デュエルだったが戦つたのは俺らと違ってモブで勝っていた
他の生徒たちも負けたからってすぐ文句は言わないようになった
今回はマジでむかついた
前世で小学・中学といじめられてきた俺だが
あれはいくらなんでもひどすぎる
俺と神楽坂はその後親交を深めたんだけどな

第23話 盗まれた決闘王のデッキ VS 神楽坂（後書き）

主人公がマジ切れしました

最初は神楽坂に切れましたが

その原因の生徒たちにも切れました

作者が思うにいくら負けたからってあんな陰口を言われてなかったら
神楽坂、デッキを盗まなかったと思う

それに三沢のあの態度も作者はどうかと思っていました
なので、こんな結末にしました

第24話 失恋する乙女

S i d e 遊輝

ただ今夕方の食事中

「皆さんに紹介したい人がいますのニヤ
にやあ 編入テストを受けてこのたびオシリス・レッドに入ってきた
早乙女レイ君だニヤ」

つてなんだと

早乙女レイ・・・だと

予想外に早い

「女の子みたいにきれいな子なんだな」

正解です

女の子だよ彼女は

顔は帽子でよく見えない気がするんだが

「編入先がオシリス・レッドなんで落ち込んでるのかなあ
その気持ち分かるなあ」

「十代、立とうとするな

編入生はオシリスレッドからだし落ち込んではいない
読心術なめんな」

「そうかあ」

「そうなんすか？」

「遊輝君の言う通りにや

そうにや、遊輝君は二人部屋に一人だったにや

レイ君、しばらく遊輝君の部屋を使わせてもらいなさい」

原作と違って俺がいるからだろうし

「いいですよ先生」

その後食事が終わり

部屋にて

「さあて

そろそろ教えてくれないかな

どうしてこの学校に来たのか（知ってるけど）

その帽子の中の素顔も（ちよつと気になるだけロリコンではない）

小学5年生の早乙女レイちゃん」

さあて質問タイムだ

原作知識で知っているが食い違いがあつたら困るからな

俺はアカシックレコードには接続できないから細かな食い違いは確認しないと

「ぼ、僕は男だ

でたら「はいこれどうぞ

これは校長先生が転校生の話をしているのを盗聴してから集めたデータ

話を聞いて怪しいと思ったから（ほんととは原作知識で早乙女レイが女だって知ってたからだけど）

調べたけど思ってたより早かったからな
だけど、これでもしらを切るきかい？
これはあくまでも他人で自分はこの人に似た合法ロリの女とでも
分かったよ、その通りだよ私は女だよ
あああ、結構ばれないと思ってたのに」

そういつて帽子を取る早乙女レイ
な、これは

「か、可愛い」

「え？」

なんかこつちに顔を向けてくるが危ない
YES ロリータ NO タッチだ
俺はアルビレオ・イマじゃない
おっと、この世界だったら三沢大地だった
誰が何と言おうとロリコンじゃない
ただ、単純にかわいいと思ったただだ

「ありがとう」

「どういたしまして、でだ
もう一度聞く、どうしてこの学校に来た？」

「それは亮様に会いに来るために」

「成程、あわせてやってもいい」

「本当！？お願い！わ「ただし条件がある

今から親に電話して、謝れ

お前がいなくなつて親が心配してるはずだ
友達も心配してるはずだ

それなのに自分の願いだけかなうなんて都合のいいことがあると思
うなよ」分かったよ

今から電話するから電話貸してくれない」

電話を貸します

電話します

怒られてるような声が聞こえます

どうやら来週の便のフェリーで帰るらしい

「じゃあ、協力するか」

「うん！これで私の思いを亮様に伝えるぞお」

「じゃ、俺の正体を教えないとな」

「正体？」

「俺は魔道士だ」

「は、今なんて言ったの？」

「だから俺は魔道士だ」

「嘘だあ

魔道士だなんている訳な「証拠、デス・デストロイ・デス・クライ
シス 火よ灯れ」

わ、手の上に火が本当に魔法使いなの？」

「あと、ついでにお前らも来い

エウオケム・ウオース ミニストラエ・ユウキ
召喚 遊輝の従者

ライネス サイコ カナデ 奏」

俺は仮契約カードを空に投げ従者を呼び出す

「遊輝、なんのようだ」

「マスター私に何のようかな」

「遊輝、私はすでにここにいるよ」

つて奏、お前はまた

「あわわわわ、デュエルモンスターのモンスターがしゃ、しゃ、喋ってるうううう」

「こいつらは俺の従者兼デュエルモンスターの精霊だ」

もう声が出ないだしい

じゃあさっそく

「じゃあレイちゃん

君の望みをかなえに行くか」

「え？」

S i d e a u t o

S i d e l e i

部屋に入ったら唐突に私は言われた

「さあて

そろそろ教えてくれないかな

どうしてこの学校に来たのか

その帽子の中の素顔も

小学5年生の早乙女レイちゃん」

え、なんでそれを

なんで私が女の子だって

とにかくごまかさなきゃ

「ぼ、僕は男だ

でたら「はいこれどうぞ

これは校長先生が転校生の話をしているのを盗聴してから集めたデータ

話を聞いて怪しいと思ったから調べたけど思ったより早かったからな
だけど、これでもしらを切るきかい？

これはあくまでも他人で自分はこの人に似た合法ロリの女とでも
分かったよ、その通りだよ私は女だよ

あああ、結構ばれないと思ってたのに」

この人ストーカーって一瞬思ってしまった私は絶対に悪くない
悪くないはず

でも、ばれちゃったならこれをかぶっててもしょうがないか

「か、可愛い」

「え？」

この人私のことを可愛いつて
なんか嬉しいな

でも、私が好きなのは亮様
この想いを伝えるまでは
とりあえずお礼くらい

「ありがとう」

「どういたしまして、でだ
もう一度聞く、どうしてこの学校に来た？」

「それは亮様に会いに来るために」

「成程、あわせてやってもいい」

本当に

亮様に会えるの？

「本当！？お願い！わ「ただし条件がある
今から親に電話して、謝れ

お前がいなくなつて親が心配してるはずだ
友達も心配してるはずだ

それなのに自分の願いだけかなうなんて都合のいいことがあると思
うなよ」分かったよ

今から電話するから電話貸してくれない」

また言い切る前に

でも、この人の言うとおりだよね
みんな心配してるよね

私はこの人に電話を借りて電話して怒られた

当然と言えば当然だよな
黙ってきちゃったから

「じゃあ、協力するか」

「うん！これで私の思いを亮様に伝えるぞお」

「じゃ、俺の正体を教えないとな」

「正体？」

「俺は魔道士だ」

え、今なんて

私、耳が悪くなったのかな？

「は、今なんて言ったの？」

「だから俺は魔道士だ」

そんなのいるわけないよ

この人私の事おちよくってるのかな？

「嘘だあ

魔道士だなんている訳な「証拠、デス・デストロイ・デス・クライ
シス 火よ灯れ」

わ、手の上に火が本当に魔法使いなの？」

わ、本物の火
本当なんだ？

「あと、ついでにお前らも来い

エウオケム・ウオース ミニストラエ・ユウキ
召喚 遊輝の従者

カナデ
ライネス サイコ 奏」

わ、あれは光と闇の竜（ライト＆amp・ダークネスドラゴン）？

それにこっちはサイコ・ショッカー

このモンスターは知らないけど

え、なんでモンスターが実体化してるの？

え？

「遊輝、なんのようだ」

「マスター私に何のようかな」

「遊輝、私はすでにここにいるよ」

そしてマスターって何？

「あわわわわ、デュエルモン스터ズのモンスターがしゃ、しゃ、喋ってるうううう」

「こいつらは俺の従者兼デュエルモン스터ズの精霊だ」

デュエルモンスターズの精霊？

「じゃあレイちゃん

君の望みをかなえに行くか」

「え？」

そういつて私たちは寮を出たんだ

ブルー寮に行く途中精霊についての話を聞かせてもらったんだ
でも、なんだろう
この気持ち
胸がもやもやする

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

精霊について話しながらブルー寮に向かって言った俺とレイ
ブルー寮があと少しというところで止まった

「ちよつと待て」

「え？」

「認識阻害結界展開

認識妨害結界展開

防音・遮音結界展開

よし、OKだ」

複数の結界を展開

これで細工は流々後はやるだけ

「何したの？」

「結界張っただけ

これでおれらの存在はばれない
さあ、ブルー寮に侵入だ」

「え、ええええええええええ！？
それって犯罪じゃないの？」

「大丈夫だ
犯罪はばれなきゃ成立しない」

「それって外道じゃ「カイザーに会うんだろ
あいつは忙しいからこれくらいしなきゃ」
そうなのかなあ」

「そついうもんだ、行くぞ！」

俺とレイはブルー寮に忍び込む

「こちらスネーク
ブルー寮に侵入した」

「よくやったぞスネーク」

丸藤亮通称カイザーの部屋はこの先だ」

「了解した、この先だな」

「何やってるの？」

ふざけてたら怪訝な顔をして突っ込まれた

「どうせばれないからメタルギアごっこを」

「私の恋がかかってるんだからふざけないでください」

「はい」

そんなことをやりながら寮の部屋についた

「Let's 侵入ダゼ」

「だからふざけないでください」

「何者だ？」

「え？」

「俺がだれでもいいじゃん

恋する乙女の願いをかなえてあげるだけ

ほら、レイちゃん 告白告白」

今更だけど俺は変装してる

格好は死神みたいな黒いマントを羽織ってるだけだけど

「は、はい

亮様のことが昔から好きでした

亮様、乙女の一途な思いを受け止めて」

なんだこのオーラは

後ろに恋する乙女が

これが恋する乙女のオーラなのか、アニメなんかとは比べ物にならないオーラだ

「レイ、お前の気持ちは嬉しいが「亮様！」

とりあえず最後まで聞こうなレイちゃん

「今の俺にはデュエルがすべてなんだ
俺のことはあきらめて新しい恋を探してくれ！」

まあ、まだ小学生とは知らないし

少しくらいセリフが変わってて当たり前か

ってレイ泣いちゃってるよ飛び出しちゃった

やば、結界再構成

「貴様の言い分は分かった

説教をしたいところだが時間がないのでな明日俺が貴様に制裁を下
すだろう

俺の名はオシリス・レッドの石崎遊輝だ

明日の放課後、レッド寮近くの崖下で待つ

さらばだ」

そうして俺はレイを追いかけて行った

第24話 失恋する乙女（後書き）

レイの口調が私なのはアニメみたいにはれた後までそれする必要があるのかと思っただけなので気にしないでください
だって再登場した後一人称私だったはずだよね？
違ったら教えてください

第25話 帝王への制裁 VS 丸藤亮Ⅱカイザー（笑）

Side 遊輝

カイザー（笑）の身勝手な応答に対する制裁は明日にして
今はレイちゃんを追いかけないと

「貴様の言い分は分かった

説教をしたいところだが時間がないのでな明日俺が貴様に制裁を下
すだろう

俺の名はオシリス・レッドの石崎遊輝だ

明日の放課後、レッド寮近くの崖下で待つ
さらばだ」

「待て！」

「待たない」

そうして追いかけていく俺

今は魔力を大幅に抑えてるからあんまり広い結界は張れないちゅう
のに

まったく面倒だ

まあ気で足を強化してるから疲れないけど
で、ブルー寮を出たあたりでようやく止まった

「私振られちゃった

う、う」

「泣きたいときは泣いた方がいいと思うよ

すつきりするし」

なんだこれは

俺じゃない

なんで俺はこんな優しいことを言ってる

「う、うええええええええええええええええええええええん」

えつと防音・遮音結界強化

それからレイちゃんはずばく泣き続けていた

「う、う」

「そろそろ大丈夫か

明日はすることがいっぱいあるからな
帰って寝ようか」

「うん」

ほんとが転移魔法もしくは俺の能力を使えばあつという間だけど
その日は歩いて帰った
そして部屋で

「私、これからどうしようかな
次のフェリーの便は来週だし」

確かにどうするか

「まあ、それはおいおい
とりあえず明日は校長と話した後

ちよつとお願い（脅迫）してサボタージユでもするか」

「なんか気になる単語が聞こえた気がするけど
それより私大丈夫かな
年齢とか偽ってたし」

「問題ない

あの狸を脅す材料の10や20
いくつでもあるさ」

「それってだいじょうぶなのかな」

何を言ってるんだ

人は脅して利用して切り捨てるもんだろ
自分の大事な奴以外は

「勿論だ」

S i d e a u t o

S i d e レイ

大声で泣いちゃった
恥ずかしい
でもこれから・・・

「私、これからどうしようかな
次のフェリーの便は来週だし」

ほんとどうしようかな

私、デュエルモンスターズ関係の勉強しかなかったから普通の勉強は分らないんだよなあ
だから授業受けてもよくわからなかったし

「まあ、それはおいおい

とりあえず明日は校長と話した後

ちよっとお願ひ（脅迫）してサボタージュでもするか」

なんか脅迫って聞こえた気がするんだけど
でもそれより

「なんか気になる単語が聞こえた気がするけど
それより私大丈夫かな
年齢とか偽ってたし」

嘘ついてたしやっぱりまずい気がするんだよな

「問題ない
あの狸を脅す材料の10や20
いくつでもあるさ」

え、狸って誰
もしかして校長先生の事？
それに脅すって

「それってだいじょうぶなのかな」

「勿論だ」

いやな予感しかないけどこれが気にしたら負けってやつなのかな

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

話し合いが終わり次の日帽子をかぶってもらい
校長室に向かっている

「失礼します」

「遊輝君じゃないですか、はいつていいですよ
今日はどうしたんですか」

「この転入生のことなんですけど
実は・・・」

そうつって帽子を取る

「なんと」

「女の子だったんですよ
おまけに小5だし」

「小学5年生だあの試験に浮かったんですか
君は頭がいいんですね
それで遊輝君、君は私に何をしてほしいんですか
君はそれだけで訪れるような人じゃないと思うのですが」

さすが校長

今まで幾度となく会いに来てる俺のことをわかってる

（描写はしてませんが遊輝は万丈目の時以外も結構ここにきています）by作者

「実は彼女のことは内緒にしておいてほしいんですよ

後しばらくサボらせてもらうので公欠にしておいてください

えっとこれ教師の不正の証拠

これでいいですよね」

「分かりました

いつも情報提供には君に感謝してるので彼女が帰るまで公欠扱いにしておきましょう」

「ありがとうございます

それでは校長」

「えっと私

来た意味あるのかな」

レイちゃん何か言ってるが気にしない

ネギまのエヴァみたく屋上でのサボタージュかな

やっぱりやめとこ

それじゃあ

「レッド寮に戻りますか」

S i d e a u t o

S i d e レイ

今、私は遊輝さんと一緒に校長室の前にいる

「失礼します」

「遊輝君じゃないですか、はいつていいですよ今日はどうしたんですか」

あれ、脅すって言うてた割には仲がいいようなあくまで最終手段ってことなのかな

「この転入生のことなんですけど実は・・・」

あ、帽子とられた
校長先生驚いた顔してる

「なんと」

「女の子だったんですよ
おまけに小5だし」

「小学5年生だあの試験に浮かったんですか
君は頭がいいんですね
それで遊輝君、君は私に何をしてほしいんですか
君はそれだけで訪れるような人じゃないと思うのですが」

確かにあの試験は難しかったな
かなり勉強したし
そして遊輝さんはどんなふうにみられてるの？

「実は彼女のことは内緒にしておいてほしいんですよ
後しばらくサボらせてもらうので公欠にしておいてください
えっとこれ教師の不正の証拠
これでいいですよね」

校長先生にサボる発言って
しかも公欠希望するってこの人っていったい
それに教師の不正の証拠って
一体遊輝さんって

「分かりました
いつも情報提供には君に感謝してるので彼女が帰るまで公欠扱いに
しておきましょう」

「ありがとうございます
それでは校長」

そして許可するってどうということなの
いつも情報提供って
あれなのかな

この人ってネギま風に言うとかバグキャラってやつなのかな
よく考えるとつかってた魔法
ネギまのものだった気がするのには気のせいかな
後で聞いてみよ

「えっと私
来た意味あるのかな」

ほんとに来た意味がない気が

「驚くな、ほんとのことだし」

「いや、ふつう驚くよ

あとその魔法私でも使えるの？使えるなら教えてほしいな」

「俺と仮契約すれば使えるようになると思うよ

何気に魔力はある程度あるし

俺と仮契約しないといけないのは本来この世界にはない異端な力だからなんだけど」

そう、本来魔法なんて存在しないこの世界では普通の人はいくら魔力があってもこの世界じゃ魔法は使えない
俺みたいな異物の関与が必要だ

「そうなんだ」

そんな話をしながら時間は立っていった
そして放課後の時間帯
レッド寮近くの崖下

「よく逃げずに来たなカイザー
早速デュエルだ、逃がしはせん」

「ちょっと待ってくれ
俺が何をしたというんだ」

「あんな人の気持ちを考えないような最低なふりかたをして何を言う
今の俺にはデュエルがすべてなんだだって
それはデュエルがすべてだからお前なんか眼中にないと言ってるの

と同じようなもんだぞ「違う！おれはそんなつも」何が違うんだ
ふるにしてももうちよつと言葉を選べ
では制裁の時間だ」

「しょうがない」

「「デュエル」」

「では俺のターンから、ドロ―

デス・メテオ発動1000ダメージ

火炎地獄3枚は発動俺1500ダメージ

貴様3000ダメージ

俺の勝ちだ

だが、まだまだだ

再びデュエル

おつと逃げられると思うなよ

俺が100回潰すまで貴様は逃げられないんだからな

それ」

俺はゼアルでカイトが遊馬に使った赤い鞭のようなもので捕獲
そして潰しまくる

「・・・いけ光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）
えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリユスタレ）」

「うわあああああああああ」

ライフは0に

「次だ・・・」

「いけサイコ

サイバー・エナジー・ショット」

「うわああああああ」

またライフは0に

「いけマアト

ヴァイシアーシヨン・オブ・マアト
真理の天罰」

更にライフは0に

「いけ銀河眼の光子竜
ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン

はめつ
破滅のフォトン・ストリーム」

その後も俺はカイザーを潰し続けた

「今日はここまでにしておいてやる
レイがまつてるし帰るか」

呆然としているカイザーを放って俺は寮に帰った

第25話 帝王への制裁 VS 丸藤亮Ⅱカイザー（笑）（後書き）

デュエルの内容は浅いですが
今回はカイザーを潰すだけが目的なので

第26話 恋する乙女 VS レイ（前書き）

お久しぶりの投稿です

遅れて本当にすいませんでした

アイデアはある程度考えてあるんでそれなりのペースで出していけたらいいと思います

そしてついに主人公の見た目を決めたので後書きに書きます
アンケートの方も期間を延長し1/15までにします

これからもよろしく願います

第26話 恋する乙女 VS レイ

Side 遊輝

カイザー（笑）を叩き潰した後帰路についたんだが

「しまった！記憶操作忘れてた！

俺じゃないで謎のデュエリストAもしくは俺だと話せない呪いをかけるつもりだったのに」

俺は急いでかけていったんだが

呆然としているカイザー（笑）のそばに痴女がいた

「え、それ本当なの！

転入生が女子で、しかもあの石崎遊輝にぼこぼこにされたって」

「ああ」

「めんどくさいし記憶を改竄させてもらおう」

「誰（誰だ）？」

「デス・デストロイ・デス・クライシス 大気よ 水よ 白霧となれ
彼の者らに一時の安息を 眠りの霧」

「急に眠気が・・・」

「お前はゆ・・・」

じゃあさっさと記憶操作開始

まずは人払いの結界展開

カイザー（笑）の方は謎のデュエリストに襲われ潰されまくったと
そうだな、前の夜の時に俺が名乗ったのも名乗らなかつたことにして
よし

黒い死神みたいな服を着たやつに襲われたことにしてっと

OK カイザー（笑）の記憶操作終了

次は痴女だ

呆然としていたカイザー（笑）に話しかけて俺のこと聞いたのか
だったら謎の男に襲われたのを聞いたことにしてっと
よしこっちも終わりだ

「これでいいか

じゃあさっさと帰りますか」

俺は結界の入り口あたりまで来て結界を解く
そして部屋に帰っていく

「おい、レイちゃん開けていいか」

俺はノックして聞いてみる

こんなところでよくあるミスをするものか

「大丈夫だよ

どこかのアニメみたいに着替えてる途中なんてことはないから」

大丈夫か

俺はドアを開ける

まあ当然だけどこその二次小説の痴女みたいなことをしてレイちゃん
が待ってるなんてことはなかったよ
でもなんか奏と話し込んでいるのは気になったけど

「ただいま」

「おかえり」

突然だけど私とデュエルしてくれない」

「いいけど」

じゃあ、レッド寮の裏にある森にでも行きますか」
一体どうしたんだ

まあ、あの面白映像を生で見れるなら見てみたいし

「あ、そうだ」

これ飲むと精霊が見えるようになるよ
俺のささやかな能力の一つで作っただけだね

そう言うって俺は栄養ドリンクのようなものを差し出す

「え、精霊が見えるようになるの？」
私も精霊が見てみたいから飲んでみるよ」

そう言うってレイちゃんは俺が差し出した栄養ドリンクのようなもの

を受け取って飲む

「カルピス味？」

なにこれ、苦いと思っていたけど」

よくある誤解ですね

そもそも俺が能力で作ったのにわざわざ苦くする必要ないじゃん

「いや、俺が作ったのにわざわざ苦くする必要ないじゃん」

「それもそうだね」

「じゃあ行くか」

「うん」

そう言っただけ俺とレイちゃんは森の中に入っていったんだ

S i d e a u t o

S i d e レイ

遊輝さんが出て行ってから少し経ったんだけど

「そう言えば遊輝さんのことあまり知らないなあ」

「知りたいの？」

「うわぁ！

何時からいたの、というか遊輝さんと一緒に行っただけじゃないの？」

かなで
奏さん何時からいたんですか？
いきなり出てきたからびっくりしちゃったよ

「いつも遊輝と一緒にいるわけじゃないよ
それで知りたいの？」

「うん、まあ」

「じゃあ教えてあげる
遊輝は転生者って本人が言ってたよね」

「うん、驚いちゃったけど
一度死んだことがあるなんて」

本当にあれはびっくりした
一度死んだことがあるなんて

「（一度じゃないらしいけど）
もっと詳しいことを言うと

遊輝は前世でこの世界に似た物語を見たことがあるらしいの」

「え、物語？」

物語ってどういうことだろう

「そう、物語

私も初めて聞いたときは信じられなかったけど
遊輝の能力で世界を渡って別の世界に行ったとき
この世界にそっくりで、しかも登場人物に十代君とか翔君とか隼人

君とかがいる

物語を見た時は本当に驚いたよ」

「へ、へええええ」

そ、それは驚くなあ

自分のいる世界に似た物語があつたら

「少し話がそれちゃったけど

それで遊輝は偽善者を名乗ってるんだ」

「偽善者？なんで」

「物語を知ってるからだと思うよ

それに正義や善よりも偽善のほうが好きだしし」

「そうなんだ」

偽善者かあ

「それで実は遊輝はもう歳がね、500を超えてるの
転生したときに不老不死になっただけで」

不老不死かあ

って不老不死？

「不老不死ってどういうことですか？」

「そのまんまの意味だよ

遊輝と仮契約した私たちも不老不死だけどそれは関係ないか

だつて遊輝、死者さえ蘇させれるし」

「もういいです」

すごすぎて何も言えない

「そう？で、物は相談なんだけど

あなた遊輝のことがすきでしょ

私は精霊だから「ストップ！わ、私は遊輝さんのことそんな好きっていい」

ラブ臭もするし好きなのはわかってるから少し聞いて

まあ、そんなに否定したいんだつたらデュエルすればわかると思うよ
本当に遊輝のことが好きだと気付いたらさっきも言っただけど頼みがあるの

私も遊輝のことは好きだけど

私、精霊でしょ

だからフラグメイカーの遊輝のことを見張れないの

好意にはすぐ気付くけどフラグは無意識に立てちゃうから
来年いや今年、飛び級でここに入って

見張ってほしいの

大丈夫、方法はきちんとあるから

もちろん、その方法を成立させるために私も力を貸すわ」

方法のことは気になるけど

やっぱり言われて気になったけど

私ってやっぱり遊輝さんのことが好きなのかな

それにこれって私と奏さんで遊輝さんを見張るってことなのかな

「本妻は私たち二人ってことで

まあ、私たちが見張ってもおそらく10人や20人くつつくことに

なるかもしれないから

まあくつついても私は遊輝に O H A N A S H I なんかするつもりはないし

ライネスから聞いた話なんだけど

異世界を旅してた時に相当数のフラグを立てたらしいし」

そ、それはなんというか

「おい、レイちゃん開けていいか」

「あ、帰ってきた

話はいったん終了ね」

あ、精霊化しちゃった

そうだよつと変な返事してみよ

どんな反応するかな

「大丈夫だよ

どこかのアニメみたいに着替えてる途中なんてことはないから」

あれ開けるの遅いな

ようやく入ってきた

なんか安心したようなこと残念って感じの顔が混ざってるなあ
何を考えてるんだろ

「ただいま」

「おかえり

突然だけど私とデュエルしてくれない」

デュエルすると分かるかあ
まあやってみよう

「いいけど

じゃあ、レッド寮の裏にある森にでも行きますか」

行こうとしたらいきなり振り返った
なんだろう？

「あ、そうだ

これ飲むと精霊が見えるようになるよ
俺のささやかな能力の^{スキル}一つで作ったんだけどね」

そう言って私は栄養ドリンクのようなものを差し出された
精霊が見えるようになるのかあ
見てみたいし

「え、精霊が見えるようになるの？
私も精霊が見てみたいから飲んでみるよ」

そう言って私は栄養ドリンクのようなものを飲んでみたんだけど

「カルピス味？

なにこれ、苦いと思っていたけど」

本当になんでカルピス味？

「いや、俺が作ったのにわざわざ苦くする必要ないじゃん」

「それもそうだね」

でもお、やっぱりなんでカルピス味？
好きなのかなあ？

「じゃあ行くか」

「うん」

そう言って私たちはレッド寮の裏の森に入っっていったんだ

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

レッド寮も裏の森に歩いて行っただけどこの辺でいいかな

「じゃあそろそろやろうか」

「うん」

「「デュエル!!」」

「私のターン!ドロー!
恋する乙女を召喚!」

出た!

このデュエルの主役?女狐モンスター

「ターンエンド!」

「俺のターン、ドロー

俺はE・HEROフェザーマンを攻撃表示で召喚
バトルだ

フェザーマンで恋する乙女に攻撃

フェザーブレイク！」

「きゃあああああああ

悲鳴を上げるレイちゃん

ではなく恋する乙女

4000 - (1000 - 400) = 3400

「恋する乙女のモンスター効果発動！

攻撃表示である限り戦闘によって破壊されない
って、え？なにこれ？」

お、始まったよ

あの大爆笑ものの謎のピンク空間

「お、お嬢さん大丈夫ですか？」

「あはああ、あ

「ああ

つぶ

笑いをこらえるのがきつすぎる
レイちゃんは「え？」って顔だし

「まあいいや、うん、今のは何かの気のせいだよね
恋する乙女のもう一つのモンスター効果
恋する乙女を攻撃したモンスターは乙女カウンターを一つ乗せる」

「カードを一枚伏せターンエンド」

「私のターン、ドロー！」

手札から装備魔法キューピッド・キスを発動する」

天使が恋する乙女にキスをする映像が流れる
間違いなくあの天使は
天使は天使でも墮天使に決まってる
きつとそうだ

「バトルよ、一途な思い」

また広がるピンク空間
レイちゃんが「また？」って顔をしている

「フェザーマンさああああん
私の一途な思いを受け止めてえーーーーー」

「あ」

避けるフェザーマン
ここまでは普通だ、ここまでは

「あああああん」

避けられてこける恋する乙女…なんだけど作為的なものを感じる

3400 - (1000 - 400) = 2800

「ひ、ひどい！ひどいわあ！」

「すまない！そんなつもりじゃ」

目が怖い

あれは男を使うだけ使って捨てる女の目だ
今度は投げキッスしたよ

そして何がやあんだ

実際に見ると笑えるけど突っ込みどころが多すぎる

「私の言うこと聞いてくれるわよね？」

「もちろん！」

「じゃあ、遊輝を攻撃して」

「もちろん！君のためならできる！」

そう言ってフェザーブレイクを放ってくるフェザーマン
だけどダメージを受ける気はさらさらねえ

「トラップ発動、攻撃の無力化
これで攻撃は無効だ」

止められる攻撃って
こわ、あの乙女いま「っち」って舌打ちしたよ
こえええええええ

「あれ、また何か幻覚が

私疲れてるのかな？まあいいや、それよりも

乙女カウンターの乗っているモンスターを攻撃し逆にダメージを負
ったら

装備魔法キューピッド・キスの効果が発動

そのモンスターをコントロールできる

カードを一枚伏せてターンエンドだ」

レイちゃん幻覚じゃないぜ

それは目の前で起こってることだ

それにしてもカードは精霊は宿っていないんだが

一体どうしてこうなってるんだ

あのカード特別なカードなのか？

「俺のターン、ドロー

E・HEROザ・ヒートを攻撃表示で召喚

こいつは攻撃力が自分フィールド上に表側表示で存在する

E・HEROと名のついたモンスターの数×200ポイントアップ
する

ザ・ヒートでフェザーマンに攻撃

ヒートナックル」

「トラップカード

ディフェンス・メイデン発動！」

フェザーマンをかばうように出てくる恋する乙女

そして燃えるこぶしに吹き飛ばされる

一体お前は何がしたいよ乙女

「あああーーーーー」

悲鳴を上げるレイちゃん

ではなくやっぱり恋する乙女

2800 - (1800 - 400) = 1400

「ディフェンス・メイデンの効果により

ザ・ヒートの攻撃は恋する乙女に移った！」

またしても広がるピンク空間

「また？」

声に出てるよレイちゃん

「ザ・ヒート！」

お前はヒーローのくせにか弱い女性を攻撃するなんてなんてやつだ
！」

「俺は、なんてことをしてしまったんだあ！」

お嬢さん、大丈夫ですか？！」

「自分を責めないで

戦うこと、それは宿命なのだから、ね？」

「は、惚れたあああ！」

おい！ザ・ヒート

お前は何頭を抱え、敵の攻撃を避けたことを後悔している

そしてお前には恋人いるだろ
だめだ、面白いが突っ込みどころが多すぎる

「またあ？ダメだ

私、病院にでも行ったほうがいいのかな

それはともかくザ・ヒートにも乙女カウンターに乗ったよ」

「カードを一枚伏せターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！

装備魔法ハッピー・マリッジを発動！」

結婚式に鳴らす鐘が鳴る映像が流れた…って何時の間に

何時の間に変わった？

何時、恋する乙女の恰好がウエディングドレスに変わった

「その効果によりフェザーマンの分だけ攻撃力がアップする！」

また始まったぜ

「ザ・ヒート様あああああ」

「あ

「ああああん」

こけたよ、またこのパターンか

1400 - (1800 - 1400) = 1000

「ザ・ヒート様、ひどい！」

「そ、そんなつもりじゃ」

「じゃ、私のために戦ってくださいますか？」

「もちろん！」

「名にこの娘

こんな女狐だったの？私の好きな恋する乙女って」

レイちゃん、なんかいろいろご愁傷様です

「お願い、ザ・ヒート様！」

「させるか！」

2枚目の攻撃の無力化発動
戦闘は終わりだ」

また「っち」ってやったよあの乙女

「ええと、まあとりあえず私はターンを終了するよ」

「俺のターン、ドロー！」

俺は天よりの宝札「アニメ版」を発動

効果によりお互いの手札が6枚になるようにドロー！
女の子には女の子ってな

E・HEROバーストレディを召喚

さらに二重召喚を発動

E・HEROレディ・オブ・ファイアを召喚」

広がるピンク空間だが

そこには燃えるオーラをまとった二人の修羅がいる

「嘆かわしいこと、そのような小娘如きに惑わされるとは」

「ザ・ヒート！私とのことは遊びだったの！」

「「あ、ああ」」

「え？え？」

「すごい迫力

これが大人の女性ってやつなのかなあ」

おい！

レディ・オブ・ファイア、お前精霊じゃないだろ

なんだよ、私とのことは遊びだったのって

そしてレイちゃん

それは絶対違う！

「バースト・リターンを発動

このカードは自分のフィールドにバーストレディがいるとき発動可能
効果でフェザーマン、ザ・ヒートを手札に」

そして始まるカオス劇場

「ああ、俺たちは何をしていたんだ！」

「レディがいるのにほかの女に現を抜かすなんて！」

「ヒーローにあるまじき行為だ!!」

「あんたたちさっさと戻ってきなさい」

「はぁーい」

「ええー!」

「さすがバースト先輩

私にはできないことをやってのける

そこに痺れる、憧れるうう」

自分でやったことだが

カオス度が原作より高過ぎる

なんだこれは

「更に融合を2枚発動

バーストレディと手札のフェザーマン

レディ・オブ・ファイアと手札のザ・ヒートを融合

来い E・HEROフレイム・ウィングマン E・HEROフレイ

ム・ブラスト

そして2体で攻撃

ダブル・フレイムシュート」

そして諸悪の根源

恋する乙女は消える

1000・(2100・400)・(2300・400)＝・26
00

「きゃあ」

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫

ありがとう遊輝さん

あなたとデュエルして自分の気持ちに確信が持てた

私あなたのことが好きです、私の気持ちを受け取ってください！」

え、俺？

「俺なんかでいいのか？俺って不老不死だし」知ってます！
かなで奏さんから聞いてます

私のために動いてくれる遊輝さんを見て気づいたんです

私遊輝さんのことが好き

付き合ってください、そして仮契約してください」

わかった！

俺もレイちゃんのこと好きだ

ただ、仮契約は待ってくれ

せめて結婚してからだ

まだ若いのに成長しなくなったら不気味だろ」

「うん」

落ち込み気味でいうレイちゃん

「そうだ『リアライズ現実化』これをあげるよ
おそろいの腕時計だ

これはISって物語に出てくる代物を改造したものでね

中に結構なものを収納できるんだ
使い方は二つ

その腕時計の画面を押して電子映像を空中に浮かべて選ぶか
入れたいもの出したいものを念じると
中に物を入れたり外に出したりできるよ」

「うわああ、ありがとう」

「それともう一つ『リアライズ現実化』
この指輪をプレゼント」

そう言って俺はダイヤのついた指輪をある能力で作りレイちゃんに
渡す

「これ高いんじゃない？」

「大丈夫

俺の能力で作ったもんだ
腕時計の中にでも入れておいてくれ
あと俺のことは遊輝でいいよ」

「わかったよ遊輝

これで正妻は私たち二人かな」

「二人ってやっぱり

あいつか、いつ俺はフラグを立てた
もう一人って奏のかなでことだろ

精霊として覚醒させた直後からあんな感じだからやっぱりと思って
ただ

一体いつフラグ立てた」

「まあいいじゃん

それよりも、^{かなで}奏さんが私が来年、正式な方法でこの学園に入学する手段があるって言ってたけどそれって？」

「GX大会だ

この世界が本当にそうならGX大会で優勝すればいい
どうせ奏の^{かなで}ことだ

手伝うって言ったんだろ

まあいいや

とりあえず帰って寝よ」

「そうだね」

それから帰って寝て

GX大会のことや俺のことを話して時間はすぎていった

そしてレイちゃんは帰っていったんだ

この時、十代たちはこのことを知ったときはめちゃくちゃ驚いてた

俺はレイちゃんと付き合うことになったんだが

俺はロリコンじゃない

幼女だったら何でもいい変態じゃない

レイちゃんだからいいんだ

まあ、どっちにしても変態か

レイちゃんだけに対するロリコンってことで

第26話 恋する乙女 VS レイ（後書き）

主人公の見た目

黒髪黒眼のよくいる日本人

髪型はめだかボックスの球磨川 楔

顔はめだかボックスの人吉 善吉

体格はよくいるモブAに見えるけど脱ぐとある程度は引き締まっているくらい

《ハッピー・マリッジ》効果

装備魔法

自分フィールド上に相手からコントロールを得たモンスターが表側表示で

存在する場合に発動することができる。

装備モンスターの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の数値分アップする。

《恋（こい）する 乙女（おとめ）》効果

効果モンスター

レベル2 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻撃力400 / 守備力300

このカードは表側攻撃表示でフィールド上に存在する限り、戦闘で破壊されない。

このカードを攻撃した相手モンスターに乙女カウンターを1つ乗せる。

《キューピット・キス》効果
装備魔法

装備モンスターのコントローラーが戦闘ダメージを受けた時、ダメージステップ終了時に攻撃を行った乙女カウンターを置いているモンスターのコントロールを得る。

《ディフェンス・メイデン》効果

永続罫

自分フィールド上に「恋する乙女」が表側表示で存在する限り、相手モンスター1体が自分フィールド上のモンスターに攻撃宣言をした場合、

その攻撃対象を自分フィールド上の「恋する乙女」1体に移し替える事ができる。

第27話 融合封印 十代VS三沢「空気」

Side 三人称

ここはデュエルアカデミアの港
今物資の搬入が行われている

「ああ、それはあっちに持って行つて」

そう購買部のおばさんであるトメさんが作業員を動かしている
その付近の海面には泡が出ている

「あ？う？」

トメさんは何かが気になり後ろを振り向いたが
その時その場所からはすでに泡は消えていた

そのすぐあと
レッド寮近くの断崖に明らかに怪しい恰好をした一人の男の姿があった

「俺にかかればこんなもんさ、デュエルアカデミア
その秘密、この国崎耕介が暴いてやるぜ」

どうやらこのスパイの真似をしている勘違い男の名前は国崎耕介と
いう名前らしい
明らかに自意識過剰だろう

Side auto

S i d e 丸藤 亮「カイザー」

ああ憂鬱だ

あの謎のデュエリストに襲われデュエルで負け続けてからどうも調子が出ない

ま、今はそれはいいだろう

今、俺は学園対抗デュエルに出る生徒を決める話し合いに参加をしている

「何故です」の？

デュエルアカデミアノース校との友好デュエルウゝには昨年と同じようにシニョール亮丸藤が代表に決まっていたはずなのゝね」

「それが、向こうの代表が一年生だと言ったなあ」

一年生で強いデュエリストならあの二人だろう

「一年生！」

「そういうわけなので

こちらの代表も一年生がいいだろうということになってねえどうだろう丸藤君？」

「俺も構いません」

最近、デュエルに集中できないからな
だったらそっちのほうがいいだろうしな

「では問題は

誰を新しい代表にするかだ」

やはりあの二人のどちらかだろう

「遊城十代もしくは石崎遊輝」

「うん？」

「これは大変なことになりそうだなやあ
ねえフアラオ」

「ニヤア」

「遊城十代？それに石崎遊輝？」

「本気か？」

「彼らのどちらかなら
面白いデュエルを見せてくれると思います」

「彼らなら実力も申し分ない」

「（嫌なの～ね

ドロップアウトボーイ～が代表になるなんて
誰か対抗できるような

ウニヤウニヤウニヤウニヤ、ああ）

では私は三沢大地と天上院明日香を推薦するの～ね」

「ラー・イエローの三沢大地君とオベリスク・ブルーの天上院明日
香君を？」

「4人をトーナメント形式で戦わせて優勝したものを代表にするのはどうでしょうね？」

「どう思うね？丸藤君」

成程

それはいい考えかもしれない

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

「「え、俺ら？」」

思わず十代とかぶってしまったな
まさか、俺が代表候補になるとは

「そうなのニヤア」

三沢君と天上院君とトーナメント形式でデュエルして
優勝した生徒がノース校とのデュエルに出場できるのニヤア」

俺がこの物語

いや、この世界に加わったために起きたイレギュラーか
こいつは代表になってやろうじゃないか
俺と十代、そして三沢は向き合って笑った

「いいデュエルを期待してるニヤ」

授業が終わった後

「すごいよアニキ、遊輝
学園の代表なんて」

「今までオシリスレッドから代表が選ばれたことはないんだなあ」

「えっへっへっへ」

「へええええ」

隼人って物知りだな
そこまでふつうは調べないだろ

「案外早く戦う機会が来たな？」

「ああ、あれから俺は日夜研究を続けている
お前のE・HERO^{エレメンタルヒーロー}デッキに対抗できる
7番目のデッキを」

「できたのか？」

「いや、だがデュエルまあでは間に合わせるさ」

「楽しみにしてるぜ」

「ああ、そして石崎遊輝
君に言っただけだったが君と戦うための8番目のデッキも完成させて
みせる
君が使ったあらゆるデッキに対抗できるデッキをね」

俺のデッキに對抗できるデッキか

「俺も楽しみしてるぜ」

「7番目、8番目のデッキ一体どんなのだろう？」

「これはすごいデュエルになる気がするぞお」

確かにな

「よしさっそく帰ってデッキの調整だ！」

「俺らはライバルだけど

お互い頑張ろうぜ！」

「ああ、勿論だぜ！」

そう言って俺と十代たちは別れたんだ

S i d e a u t o

S i d e 十代

対抗デュエルか

絶対出て見せるぜ

そのためにはデッキ調整だ

そう思って遊輝と別れて帰ってる途中

「なあちよっと」

「うるさいな、忙しいんだ」

「お、おい」

同じオシリス・レッドの制服を着た人がラー・イエローの生徒に邪魔者扱いされてる
あんな人いたっけな

「なんだかすぐく年を取った生徒だなあ」

確かにそうだな

あ、そうか分かったぞ

「なあ、あんた」

「うう？分かった

おっさん、万年落第生だろ？」

「お、おっさん？」

「いいて、いいて分かってるよ

頑張ればそのうち進級できるさ
諦めるなよ

さあ、寮に帰ろうぜ」

一緒に帰ってこの人と話そう

「いや、俺は」

「アニキ待ってよう」

「（あんな人いたかなあ？）」

それから寮に帰ったんだけど

「あむあむあむ、うめええ」

「十代、そのおっさんどうしたんだ？」

「遊輝か、この人万年落第生だしくてさ

一緒に飯でも食おうかと思ってさ

それよりもおっさん

早く食べないとご飯のおかわりなくなるぜ」

「あ、ああ」

「ここのご飯をそんなにおいしそうに食べるのはアニキだけだよ」

「全くだよ」

「い、いただきます」

食べた後、俺らはおっさんを連れて部屋に行ったんだ

こいつかなあ

やっぱりこいつを入れようかな

「三沢君はどんなデッキで来るんだろっ」

「彼のことだ

きつと十代のデッキを研究し尽くしてるんだろっな」

「アニキ」

よし

「うーん、やっぱこれがいいや
よし」

「ア、 アニキ？」

「三沢がどんなデッキで来ようと俺はこのデッキを信じる」

「アニキらしいっすね」

「うん」

俺らしいのが一番だろ

あ、おっさんがなんかカード見てる
何してんだろ

「おっさん、どうした？」

「おっさん言うな！

俺は国崎耕介（本名言っちゃった）」

「そっか国崎さんね

スカイスクレーパーか？

国崎さんも好きなのか？」

「俺はデュエルなんか好きじゃない」

デュエルが好きじゃない？

じゃあなんでデュエルアカデミアに来てるんだ？
それにデュエルは楽しいと思うけどな

「え？じゃあどうしてデュエルアカデミアに？」

「あ、いやその
落第ばかりで楽しくないなあとか」

そういうことか

「あ、その気持ち俺には分かるんだなあ
俺も自分はダメなんだって諦めてたから」

「隼人」

「でも！十代のデュエルを見ているうちに俺もまちゃり対って思っ
ようになっただなあ」

なんか照れるなあ

「えっへへへへ」

「隼人君

そつだよ、国崎さんもアニキのデュエルを見たらきつとわくわくす
るよ

ちようと学園代表決定トーナメントもあるし」

「あ、ああ（ふん、俺はお遊びに付き合ってる暇はないんだよ
そうだ！！こいつなら何か知ってるかもしれないなあ）

なあところであつてうわさで聞いたんだけど、学園の生徒が行方不明にな
ってるってホントかなあ？」

こいつは本当のことは言えないぜ

あそこは本当にやばかったしな

翔と隼人に目配せして

「聞いたことないぜ」

「僕も聞いたことないっす」

「俺もなんだなあ」

「そうか、ただのうわさかあ（っち、使えねえな）」

S i d e a u t o

S i d e 三沢「エアーマン」ロリコン

いよいよあいつと戦うことができる

「こんなに熱くなっているのは久しぶりだ
フレイム・ウイングマン

倒した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える
十代のキーカード」

手ごわいモンスターだ
だが

「こいつをつぶすには
バーストレディかフェザーマンを封じておけばOKと」

次はサンダー・ジャイアントだ

「こいつは厄介だ
攻撃力2400以下のモンスターを召喚時に破壊してしまうからな
スパークマンとクレイマンの融合には要注意だ」

次はテンペスター

いや、これじゃだめだ

個々のモンスターに対処していたんでは俺のデッキが回らなくなる

「何かもつと決定的な方法があるはずだ
やつのデッキのキーカードをつぶす方法が、あ！」

あつたはずだ

確かあのカードなら

「遊城十代、お前の融合ヒーローは俺の前に現れることはない
ふ、ふふふ、ふっはっはっはっは」

これで勝ったも当然だ

俺はこの時忘れていたんだ
これだけでは十代の融合
いや、十代のデッキは止まらないということを

S i d e a u t o

S i d e 十代

「いったただつきまーす！

朝飯、朝飯米がうめええええ

おかずはめだかの黒焼きか

これもなかなか、むにゃむにゃむにゃ」

「アニキ、それはめざし！」

「そうだぞ十代

ふつつめだかは食べねえぞ」

「遊輝じゃねえか

今日はお互い頑張ろうぜ」

「アニキに遊輝も

二人とも緊張感ないっすねえ」

「「なんだよ翔」」

「なんか気が立ってるんだなあ」

ほんとにどうしたんだ翔

「何言ってるんすか

今日は代表決定トーナメントっすよ
本当なら緊張して食欲ないようとか
はあ、昨夜は全然眠れなかったよう
つてのが相場でしょ」

「翔、十代に相場を求めるな
ま、俺もこの程度邪緊張しないけれどな」

相場を求めるなって
ひでえなあ
でも

「ま、遊輝の言うとおりだぜ翔
とにかく、デュエルの前はいっぱい食べて力をつけなきゃな」

「アニキらしいや
そつえば、国崎さん
どこにいつちゃったんだろ」

「国崎さんって
あのおっさんのことか」

「そうなんだなあ
国崎耕介さんっていうらしいんだなあ」

それから代表決定トーナメントまで特に何も無く進み

「シニョールシニョーラお待たせしたのゝね
ただいまから、学園代表決定トーナメントを始めるのゝね」

「「「「「「「「「「わああああああああ「「「「「「「「

すげえ盛り上がったんなあ
絶対優勝して俺が代表になってやるぜ

「第一戦

ラー・イエローからは三沢大地！

そして、オシリス・レッドからは遊城十代いーと」

「その顔だとできたのか？」

俺を倒すための第7のデッキってやつが

「ああ、楽しみにしている

お前を倒す7番目のデッキを」

「俺だって負けないぜ」

「アニキ負けないでー！」

翔の応援が聞こえるぜ

「十代、俺と戦うまで負けんじゃねえぞー！」

遊輝からの応援も聞こえたぜ

「では、始めるの〜ね」

「行くぞ、三沢！」

「「デュエル！！」」

「俺のターン、ドロー！」

カーボネドンを守備表示で召喚」

あらわれたのは機械っぽいドラゴン
なんかっこいいぜ

「お前の7番目のデッキ見せてもらっぜ
俺のターン、ドロー！」

俺はE・HEROバーストレディを攻撃表示で召喚
エレメンタルヒーロー

「（バーストレディ
フェザーマンと融合する事で
十代の切り札、フレイム・ウイングマンへと姿を変える）
いきなり引き当てたか？」

「行くぜ、三沢！
バーストレディでカーボネドンを攻撃
リバースカードを一枚伏せターンエンドだ」

「まだこれからだ、俺のターン
（来た、十代お前を倒すキーカー드가な）
俺はオキシゲドンを攻撃表示で召喚
オキシゲドンでバーストレディを攻撃」

「トラップカードオープン
ヒーローバリア
このカードはフィールドにE・HEROエレメンタルヒーローがいるとき
一度だけ相手モンスターの攻撃を無効にする！」

青いバリアがバーストレディを守る
甘いぜ、三沢

「そう簡単に、おれのE・HEROは倒せないぜ」
エレメンタルヒーロー

「そうだろうな、それでこそ一番君だ」

「いや、俺は一番じゃないぜ」

俺と遊輝じゃ遊輝のほうが勝ってるからな」

「そうか（だが、このカードで二番も返上だぞ十代）
俺はリバースカードを1枚伏せターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

俺はE・HEROスパークマンを攻撃表示で召喚！
エレメンタルヒーロー
更に手札から装備魔法スパーク・ガンを発動！
スパークマンに装備する

このカードの効果により相手モンスター一体の表示形式を変えることができる」

スパークマンがスパーク・ガンを打つ姿はやっぱりカッコいいぜ

「オキシゲドンを守備表示に変更
バーストレディ、オキシゲドンに攻撃だ
バーストファイヤー！」

「十代！

酸素に炎がぶつかるとうなるか知ってるか？」

「え？」

「今、身をもって知るといい
特殊効果発動、オキシゲドンが炎族モンスターに戦闘で破壊された時

お互いのプレイヤーは800ポイントのダメージを受ける！」

4000 - 800 = 3200

4000 - 800 = 3200

「やるな

だけとお前のフィールドはがら空きだぜ
いけえスパークマン、三沢にダイレクトアタックだ」

3200 - 1600 = 1600

「へへえ、どうだ

エレメンタルヒーロー

俺のE・HEROは強いだろう？

俺はカードを一枚伏せターンエンドだぜ」

エレメンタルヒーロー

「確かにお前のE・HEROは強い！

だが、お前が勝つ確率は1%もない」

「何？」

どういうことだ？

「（十代にキーカードを使わせる為には
俺も全力を出さなければ）

見せてやるよ、俺の7番目のデッキの力を！

俺のターン、ドロー

俺はハイドロゲドンを攻撃表示で召喚！

ハイドロゲドンでバーストレディを攻撃！」

つくバーストレディが
ただダメージだけは防がせてもらうぜ

「トラップカードオープン
ガード・ブロック

こいつの効果によって俺への戦闘ダメージは0になり
俺はデッキからカードを1枚ドローするぜ」

「だが、バーストレディは破壊した
よってハイドロゲドンの特殊効果発動
相手モンスターを戦闘で破壊した時
デッキからもう一体ハイドロゲドンを特殊召喚する事ができる」

「うう」

これはちよつとまずいか？

「さらに手札から装備魔法発動
リビング・フォッシル！

このカードは自分の墓地からモンスターを一体特殊召喚し
そのモンスターに装備される
生きた化石となり、甦れオキシゲドン」

この三体はまさか

「ただし攻撃力は1000ポイント下がり効果も封じられる
これでそろった」

やっぱりか

「マジックカード

ボンディング - H₂Oを^{エイチツーオー}発動

このカードは自分フィールド上のハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体

つまり、水素二と酸素一を化合する事で水を生成する」

化学は分らないんだけどなあ

「ウォーター・ドラゴンを特殊召喚」

「ウォーター・ドラゴン」

やっぱりウォーター・ドラゴンだったか

「俺のターン終了だ

(どうだ十代、これでお前はキーカードを出さざるおえないはず
そうなれば!)」

「さすがだなあ、すごいコンボだ

(遊輝とは違ったタイプですごいコンボだな)

だが、まだこれからだ

俺のターン、ドロー

強欲な壺を発動

2枚ドローするぜ

(よし)

お前が三体のモンスターを生け贄にエースモンスター

ウォーター・ドラゴンを呼んだのなら

俺もお前の全力にこたえてやるぜ!

場のスパークマン

そして手札からフェザーマン、バブルマンを融合させ

俺の最強のヒーローの一体、テンペスターを召喚するぜ！
マジックカード 融合発動！」

「この時を待っていたぞ！」

「はあ」

「トラップカードオープン！！封魔ふうまの呪印じゅいん！

このカードは手札からマジックカードを一枚捨てることで発動
相手のマジックカードの発動を無効にし破壊する！

また、この効果で破壊されたカードはこのデュエルではもう使う
とはできない！」

「何！？融合が使えないだって！」

三沢はこれを狙っていたのか
だが、ちよつと驚いたがこれだけじゃ俺の融合は止まらないぜ

「お前の切り札はE・HERO同士を融合して召喚するモンスターだ
ならばそれをできなくすればいい」
エレメンタルヒーロー

確かにな

遊輝と会う前の俺だったら負けてたかもしれない
だけど、今の俺の融合の手段は融合というカードだけじゃないぜ

「これがお前のために考え抜いたタクティクスだ
俺の計算に間違いはない」

「確かにな

前までの俺だったらびびってたかもしれないが

今の俺はそう簡単に止められないぜ」

「なんだと!」

「俺は天使の施しを発動するぜ
3枚ドロ―し手札を2枚捨てる
もう一枚だ

俺は再び天使の施しを発動
3枚ドロ―し手札を2枚捨てる

(遊輝の前世じゃ世界じゃ禁止カードだったらしいけどこの世界じゃそんなことはないからな)

俺はさらにホ―プ・オブ・フィフスを発動
墓地のE・HEROバーストレディ、スパークマン、フェザーマン、
バブルマン、クレイマンをデッキに戻しシャッフルする」

デッキよ答えてくれ

「そして2枚ドロ―!
(来てくれた)

俺は超融合を発動
手札を一枚捨て俺のスパークマンと三沢
お前のウォーター・ドラゴンを超融合!」

「なんだと!」

「来いE・HERO エレメンタルヒーロー アブソルトZero ゼロ
アブソルトZero ゼロ とどめだ
瞬間氷結 (Freezing at moment)!!」

「うわああああああああああああ」

1600 - 2500" - 900

危なかったぜ

今回は引きが良かったから勝てたが

一歩間違えたら負けてたぜ

だけどもちやくちゃ楽しかったな

「勝者オシリス・レッド遊城十代！！

おめでとう、次は決勝だ」

「やったアニキ！」

「おめでとう」

「やったな十代、次は俺の番だな
決勝に俺も行つて見せるぜ」

「ああ、勿論だ

お前も絶対決勝に来いよ」

「ああ」

遊輝

お前もデュエルがんばれよ

「負けたぜ

また位置から計算しなおしだ

いつかお前を超える9番目のデッキを作れるようにな」

「おう、楽しみにしてるぜ
ガッチャ」

「楽しいデュエルだったぜ」

それで俺と三沢は握手をしたんだ

「遊輝

お前とのデュエルはまたの機会にな」

「ああ

お前の8番目のデッキ楽しみにしてるぜ」

「わかってるさ

お前も次のデュエルがんばれよ」

そしてしばらく時間は流れて

「それでは学園代表決定トーナメント第2試合を始めるの〜ね
オベリスク・ブルーからは天上院明日香
オシリス・レッドからは石崎遊輝いっつと」

「久しぶりのデュエルだな痴女」

「私は痴女じゃないって何度言ったらわかるの
いいわ、その減らず口を叩けないようにしてあげるわ」

「行くぞー!!」

「「デュエル!!」」

こうして遊輝と明日香のデュエルが始まったんだ

S i d e a u t o

第27話 融合封印 十代VS三沢「空気」(後書き)

今回は遊輝VS明日香です
楽しみにしてくれると嬉しいです

《カーボネドン》効果

効果モンスター

レベル1/光属性/ドラゴン族/攻撃力1000/守備力600

自分の墓地にカードが10枚以上存在する場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

デッキまたは手札から「ダイヤモンド・ドラゴン」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

《リビング・フォッシル》効果

装備魔法

自分の墓地に存在するモンスターを1体選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントダウンし、効果モンスターの効果は無効化される。

このカードが破壊された場合、装備モンスターを破壊する。

第28話 痴女との再戦 VS 明日香

時はさかのぼり

代表決定トーナメントについて聞いた日

Side十代

「「え、俺ら？」」

リアクションが遊輝とかぶっちゃまったぜ

「そうなのニヤア」

三沢君と天上院君とトーナメント形式でデュエルして優勝した生徒がノース校とのデュエルに出場できるのニヤア」

こいつはわくわくするぜ

代表になってノース校とのデュエルに出たいぜ

「いいデュエルを期待してるニヤ」

授業が終わった後

「すごいよアニキ、遊輝
学園の代表なんて」

「今までオシリスレッドから代表が選ばれたことはないんだなあ」

「えっへっへっへ」

「へええええ」

なんか照れるな

遊輝はなんかに感心してるな

「案外早く戦う機会が来たな？」

「ああ、あれから俺は日夜研究を続けている
お前のE・HEROデッエレメンタルヒーローキに対抗できる
7番目のデッキを」

もしかして

「できたのか？」

「いや、だがデュエルまあでは間に合わせるさ」

「楽しみにしてるぜ」

マジで楽しみにしてるぜ

どんなデッキなのか考えるだけでもわくわくするぜ

「ああ、そして石崎遊輝

君に言っ
てなかったが君と戦うための8番目のデッキも完成させて
みせる

君が使うあらゆるデッキに対抗できるデッキをね」

遊輝にも下剋上？

いや、挑戦状？

あ、そうなんて言うんだっけな

忘れちゃったけどとにかく勝負だっというふうなことを言ってる

「俺も楽しみしてるぜ」

遊輝も楽しみみたいだな

「7番目、8番目のデッキ一体どんなのだろう?」

「これはすごいデュエルになる気がするぞお」

そうだな

すごく楽しいデュエルになる気がするぜ

「よしさっそく帰ってデッキの調整だ!」

「俺らはライバルだけど

お互い頑張ろうぜ!」

「ああ、勿論だぜ!」

お互いに全力を出して頑張ろうぜ、遊輝

俺は遊輝とそう言い合って別れたんだ

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

十代たちと別れてからしばらくしたけど何しようかな
デッキの調整って言っても使うデッキももう決めてるし
あ、そうだ

とりあえずドローパンでも買いに行くかな
そう思ってたってきました購買部

「トメさん、これください」

「はいはい、これね
200DPだよ」

「これで支払ったと」

「いつも買ってくれてありがとね」

「それほどでもないですよ
さようなら」

「さようなら」

さてどこでこれ食べよっかな
そうだ屋上に行こう
で、屋上に来たけどやっぱり

「いい景色だなあ
かなで
奏、実体化して一緒に食わないか？」

『うん、そうする』

そう言っ実体化したデュエルアカデミアの制服をなぜか着た奏
かなで

「お前はどこでその制服を用意したんだ？」

「うーん、禁則事項です」

「そうかよ」

あ、そういえばレイちゃんと話しているときさ
お前にフラグを立てたって改めて認識したけど
お前は俺のどこが好きなんだ
俺、とくにフラグ立てるようなこと言っていなかったと思うけど」

ほんとに俺は何時
かなで
奏にフラグを立てたんだ

「あちゃー」

レイちゃん言っちゃったんだ

まあいいや、実はね

遊輝に力を注いでもらって完全に精霊として完全に覚醒する前から
多少は自我があったんだ

それでいつも遊輝の姿見てたらかつこいなあとか思ってたね

見ているうちにそういった憧れとかが

なんていうんだる愛とかそういう感情に変わってきたって感じかな」

それは

どうやってそのフラグは回避しろというんだ

絶対に回避不能なフラグだったとは

「そうだったのか」

「遊輝は私のこと好き？」

「え、いきなり何言ってるんだ？
好きに決まってるんだろ」

外見もかわいいし

勿論、likeじゃなくてloveのほうで」

「ありがとう、私うれしい

だけど遊輝ってやっぱり女たらしだと思うんだ

こんなかわいい女の子二人も捕まえてるんだもん」

おいおい

「自分で自分のこと可愛いつていうのはどうなんだ
ま、事実だけだよ」

「ありがとう

じゃ、さっき買ったパンでも食べる？」

「そうだな

ほい、クリームパン」

「ありがとう

あむあむあむ、おいしいな、これ」

「そうか、よかった

じゃ、俺はこのホットドッグをパクツと食いますか」

そう言つて俺も買ってきたパンを食う
食後

「じゃ、かなで奏

帰るから精霊化してくれないか？」

「うん分かった」

そう言つて精霊化する奏^{かなで}

じゃ、帰りますか

で、寮に帰つて夕飯の時間になつたから来たんだけど

「あのおっさん誰だ？」

そうなのだ、十代たちと一緒に变なおじさんがいるんだ
あれ、あんな生徒は確かにいなかったはず
えっと誰だつたかな？

あ、そうだ

こんな時こそ地球^{ほし}の本棚（弱）の出番じゃないか
だけど、やっぱいいや
あいつらに直に聞こう

「十代、そのおっさんどうしたんだ？」

「遊輝か、この人万年落第生だしくてさ

一緒に飯でも食おうかと思つてさ

それよりもおっさん

早く食べないとご飯のおかわりなくなるぜ」

万年落第生つて

なんでこのおっさんが万年落第生に見えるんだ
どう考えても、そこまで落第続けてたら退学になるだろ

「あ、ああ」

このおっさんもちよつと戸惑つたように返事してるし

「このご飯をそんなにおいしそうに食べるのはアニキだけだよ」

確かにここのご飯をそんなにおいしそうに食べるのは十代くらいだな
俺なんか食べた後に

ダイオラマ魔法球生成で作った

トリコの食材が出る別荘とか

モンハンのモンスターが出てくる別荘とかに行って

ジュエルミートやらチョコレートマトとか

アプノトスの肉とかカジキマグロと黄金魚の刺身とか
よく食ってるちゅうのに

「全くだよ」

「い、いただきます」

おっさんも戸惑ってるぜ

俺もさっさと食うか

「よしご飯もってつと

さすがにライバルだし少し離れた席で

いただきます」

まあ確かにうまいんだけど

食べた後、十代たちはおっさんを連れて部屋に帰ったんだけど

「さて十代が相手ってことは

クロノスがさせないと思うから

最初の試合はこいつかな」

そう言って俺は一つのデッキを取る

「ま、弱点があるとすれば事故ったら負けるデッキということだけどこのデッキでやりたいし」

これで行くか

じゃあ、十代用のデッキも考えないと

「十代を魔改造したら俺も勝てないことが結構あるようになってきたからな

確実に勝てるシンクロ、エクシーズを使わないデッキにしないと」

そうだなこいつがいいか

こいつなら十代にも勝てるだろ

「じゃあ、ちょっと出かけてくるかな」

そう言って俺は部屋を出る

校則でこの時間は外出禁止だがまあばれなきゃいい俺は廃寮に向かった

「にいさん」

「よ、痴女

お前のアニキについて情報が入ったんだ」

「痴女じゃないわ

それより兄さんの情報が手に入ったって本当なの」

嘘つく必要ないだろ

「ああ

どうやら学園の上層部は海外への留学扱いにしてるらしい

ほかにも留学扱いの生徒が何人もいたが

そいつらも行方不明者だった

もしかしたら学園の上層部

しかも、鮫島校長よりも上の人間だったら知ってるかもしれないくらいしかわからなかったけど」

これは本当の話だ

あの後思い出したんだが

名前は忘れたがあのおっさん

確かジャーナリストでこのコンピューターにハッキングしてた時そんな感じのデータを手に入れてたはずと思って探したら出るわ出るわ

明らかにおかしい留学生の数だったよ

まったく

「それは

とりあえずありがとう」

「どういたしまして

それよりも明日は学園代表決定トーナメントだな

お前にもまた勝たせてもらうぜ痴女」

「だから痴女じゃないわ

っていいない、あいつ絶対にとっちめてやるんだから」

痴女がなんか言ってたが俺は無視して帰っていったんだ

翌日の朝、食堂で

「いったただつきまーす！

朝飯、朝飯米がうめええええ

おかずはめだかの黒焼きか

これもなかなか、むにゃむにゃむにゃ」

おいおいめだかって

「アニキ、それはめざし！」

「そうだぞ十代

ふつつめだかは食べねえぞ」

何を言ってるんだ十代

ふつつめだかは食わん

「遊輝じゃねえか

今日はお互い頑張ろうぜ」

「アニキに遊輝も

二人とも緊張感ないっすねえ」

どういう意味だよ

「「なんだよ翔」」

「なんか気が立ってるんだなあ」

全くだ

「何言ってるんすか

今日は代表決定トーナメントっすよ
本当なら緊張して食欲ないようとか
はあ、昨夜は全然眠れなかったよう
つてのが相場でしょ」

おいおい

俺はこの程度じゃ緊張しないし
十代に相場は求めちゃだめだと思っぞ

「翔、十代に相場を求めんな
ま、俺もこの程度邪緊張しないけれどな」

「ま、遊輝の言うとおりだぜ翔
とにかく、デュエルの前はいっぱい食べて力をつけなきゃな」

「アニキらしいや
そういえば、国崎さん
どこにいつちゃったんだろ」

あのおっさんのことか？

「国崎さんって
あのおっさんのことか」

「そうなんだなあ
国崎耕介さんっていうらしいんだなあ」

あのおっさん、国崎耕介っていうんだ

それから代表決定トーナメントまで特に何も無く進み

「シニョールシニョーラお待たせしたの〜ね

ただいまから、学園代表決定トーナメントを始めるの〜ね」

「「「「「「「「わああああああああ」「」「」「」「」

なんでクロノスの掛け声でこんなににぎやかになるんだ？

「第一戦

ラー・イエローからは三沢大地！

そして、オシリス・レッドからは遊城十代いーと」

なんか話し合ったな

「アニキーがんばってー！」

翔も応援してる

俺も決勝ではあいつと戦いたいし

「十代、俺と戦うまで負けんじゃねえぞー！」

「では、始めるの〜ね」

始まるようだ

「「デュエル！」「」

そしてデュエルは進んでいき

「俺は超融合を発動

手札を一枚捨て俺のスパークマンと三沢
お前のウォーター・ドラゴンを超融合！」

物語後半で本来手に入れるカードだな
ま、そんなのどうでもいいけど

「なんだと!!」

「来いE・HERO ^{エレメンタルヒーロー} アブソルトZero ^{ゼロ}
アブソルトZero ^{ゼロ} とどめだ
瞬間氷結 (Freezing at moment)!!」

「うわあああああああああああああ

1600 - 2500〃 - 900

十代が勝ったか

次は俺の番だな

俺たちは十代のもとに向かった

「勝者オシリス・レッド遊城十代!!
おめでとう、次は決勝だ」

「やったアニキ！」

「おめでとう」

「やったな十代、次は俺の番だな

決勝に俺も行つて見せるぜ」

「ああ、勿論だ

お前も絶対決勝に来いよ」

「ああ」

勿論決勝に行つて見せるぜ

「負けたぜ

また位置から計算しなおしだ

いつかお前を超える9番目のデッキを作れるようにな」

「おう、楽しみにしてるぜ
ガッチャ」

「楽しいデュエルだったぜ」

それで十代と三沢は握手をしたんだ

「遊輝

お前とのデュエルはまたの機会にな」

「ああ

お前の8番目のデッキ楽しみにしてるぜ」

「わかってるさ

お前も次のデュエルがんばれよ」

そしてしばらく時間は流れて

「それでは学園代表決定トーナメント第2試合を始めるの〜ね
オベリスク・ブルーからは天上院明日香
オシリス・レッドからは石崎遊輝いつと」

やっぱりおれもやる気のない紹介されたな

「久しぶりのデュエルだな痴女」

「私は痴女じゃないって何度言ったらわかるの
いいわ、その減らず口を叩けないようにしてあげるわ」

出来るならしてみな

「行くぞ!」

「デュエル!!」

「私のターン、ドロ〜!
エトワール・サイバー召喚
さらにリバースカードを3枚セットしターンエンドよ」

「次は俺のターンだドロ〜
俺は占い魔女ヒカリちゃんを攻撃表示で召喚」

「~~~~~かわいい~~~~~!」
「~~~~~」

うるさいわ

「さらに速攻魔法、受け入れがたい結果を発動！」

このカードは占い魔女と名の付くモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時

手札から一体の占い魔女と名の付くモンスターを特殊召喚する！

俺は手札から、占い魔女アンちゃんを攻撃表示で特殊召喚！」

「攻撃力0を攻撃表示？」

私をなめてるの？」

何を言ってるんだ

こいつらは意外に恐ろしいやつらなんだぜ

「そして俺は永続魔法、開運ミラクルストーンを2枚発動

このカードが存在している限り、占い魔女と名の付くモンスターはフィールドに存在する占い魔女と名の付くモンスターの数×100ポイント攻撃力がアップする

ワールドには2体の占い魔女、2枚の開運ミラクルストーン

よって2体の占い魔女の攻撃力は4000」

「なんですつて！」

「攻撃力4000が2体！」

「かわいーいー！！」

⌋

「それによーい！」

「！！！！！！」

「俺は占い魔女ヒカリちゃんで攻撃ギガデイン」

「ドラクエ!？」

そうはさせないわ

トラップカードを2枚発動するわ

ドゥーブルパッセ スピリットバリア

ドゥーブルパッセは相手の攻撃をプレイヤーへのダイレクトアタックに切り替える

そして攻撃対象になったモンスターは相手にダイレクトアタックができる

ただスピリットバリアの効果により

私は私のフィールド上にモンスターが存在する限り戦闘ダメージをうけないわ」

「なに!」

「エトワール・サイバーの特殊効果
ダイレクトアタックの時、攻撃力が600ポイントアップ」

赤い痴女が迫ってきて蹴りやがった
つく

4000 - 1800 = 2200

「けどまだ攻撃は残っている
エトワール・サイバーを占い魔女アンちゃんに攻撃
ドルマドン!」

破壊される赤い痴女

攻撃反応型でなくてよかった

「俺はリバーズカードを一枚伏せターンエンドだ」

「私のターンドロ」

私はトラップカード リビングデッドの呼び声を発動するわ
戻ってきなさいエトワール・サイバー！

更に融合を発動

エトワール・サイバーと手札のブレード・スケーターを融合
サイバー・ブレイダーを召喚するわ」

でたか痴女の親玉

「さらに私は強欲な壺を発動
2枚ドロするわ

そして死者への手向けを発動

手札を一枚捨て占い魔女ヒカリちゃんを破壊する
これであなたの占い魔女アンちゃんの攻撃力は2000
サイバー・ブレイダーで占い魔女アンちゃんを攻撃」

2200 - (2100 - 2000) = 2100

「私はターンエンドよ」

ここが正念場かな

俺のデッキよ答えてくれ

「俺のターン、ドロ」

俺は命削りの宝札を発動

手札が5枚になるようにドロする！」

「ここで強力なドロカードですって！

なんて引きの良さ」

「さらに俺は占い魔女エンちゃんを召喚
次に二重召喚を発動し占い魔女スイーちゃんを召喚
そして魔法カード、幸運の前借りを発動！

自分の場の占い魔女と名の付くモンスター1体のLVより一つレベ
ルの低い占い魔女を

デッキもしくは手札から特殊召喚できる

俺はレベル4の占い魔女スイーちゃんより一つレベルが低い
レベル3の占い魔女フウちゃんをデッキから特殊召喚

そして強欲な壺を発動

最後だリビングデッドの呼び声を発動し墓地の占い魔女ヒカリちゃ
んを復活させる

その特殊召喚に対し2枚目の受け入れがたい結果を発動
手札の占い魔女チーちゃんを特殊召喚」

場の確認だ

占い魔女エンちゃん	5	0	0	0	+	5	0	0	0	=	1	0	0	0	0		
占い魔女スイーちゃん	5	0	0	0	0	+	5	0	0	0	0	=	1	0	0	0	0
占い魔女フウちゃん	5	0	0	0	0	+	5	0	0	0	0	=	1	0	0	0	0
占い魔女ヒカリちゃん	5	0	0	0	0	+	5	0	0	0	0	=	1	0	0	0	0
占い魔女チーちゃん	5	0	0	0	0	+	5	0	0	0	0	=	1	0	0	0	0

なんちゅう場だ

ほかの生徒も啞然としてる

「行くぞ痴女

占い魔女ヒカリちゃん、サイバー・ブレイダーに攻撃
ギガデイン

更に占い魔女エンちゃん、スイーちゃん、フウちゃん、チーちゃん

そして俺たちのデュエルが始まる

第28話 痴女との再戦 VS 明日香（後書き）

占（うらな）い 魔女（まじょ） ヒカリちゃん》

通常モンスター

レベル1 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻撃力0 / 守備力0

このカードをドローした今日のあなたの運勢はスーパーハッピー！

ラッキーナンバーは1。

ラッキーカラーは黄色。

ラッキーアイテムは光るチャーム。

願いは何でも叶っちゃう！！

《 占（うらな）い 魔女（まじょ） エンちゃん》

通常モンスター

レベル2 / 炎属性 / 魔法使い族 / 攻撃力0 / 守備力0

このカードをドローした今日のあなたの運勢はベリーハッピー！

ラッキーナンバーは2。

ラッキーカラーは赤。

ラッキーアイテムは金魚。

楽しいことがおきるかも

《 占（うらな）い 魔女（まじょ） フウちゃん》

通常モンスター

レベル3 / 風属性 / 魔法使い族 / 攻撃力0 / 守備力0

このカードをドローした今日の運勢は、まあまあね。

ラッキーナンバーは、3。

ラッキーカラーは、緑。

ラッキーアイテムは、植物。

無くした物が見つかるかもよ。

《 占 （うらな） い 魔女 （まじよ） スイーちゃん》
通常モンスター

レベル4 / 水属性 / 魔法使い族 / 攻撃力0 / 守備力0
このカードをドロ―した今日の運勢は、ちよつと悪いかも。

ラッキーナンバーは、4。

ラッキーカラーは、青。

ラッキーアイテムは、傘。

東に向かうと運が向いてくるかもね。

《 占 （うらな） い 魔女 （まじよ） アンちゃん》
通常モンスター

レベル5 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻撃力0 / 守備力0
このカードをドロ―した今日のあなたの運勢は、アンハッピー。

ラッキーナンバーは、5。

ラッキーカラーは、紫。

ラッキーアイテムは、サングラス。

落し物に注意して！

《 占 （うらな） い 魔女 （まじよ） チーちゃん》
通常モンスター

レベル6 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻撃力0 / 守備力0
このカードをドロ―した今日の運勢は、スーパ―ピンチ！

ラッキーナンバーは、6。

ラッキーカラーは、黒。

ラッキーアイテムは、革靴。

ライバルに差をつけられちゃうかも！がんばれ！！

《ドゥーブルパッセ》効果
通常罾

相手モンスターが自分フィールド上の表側攻撃表示モンスターの

攻撃対象になった場合に発動する事ができる。

そのモンスターの攻撃は自分への直接攻撃になる。

その後、相手プレイヤーは攻撃対象となったモンスターの攻撃力の数値分のダメージを与える。

第29話 激突する龍と英雄 VS 十代（前書き）

やっぱりオリジナル成分が濃いと内容が短くなってしまふ
そこが課題だけどオリジナルでは長い方かな

第29話 激突する龍と英雄 VS 十代

Side 遊輝

「それでは学園代表決定トーナメント決勝戦を始めるの〜ね
左からはオシリス・レッドの遊城十代いっと
右からはオシリス・レッドの石崎遊輝いっと」

「行くぜ十代！」

「ああ、勿論だ！」

「デュエル！！」

俺たちのデュエルが始まった

「俺のターンから行くぜ、ドロー」

俺はE・HEROクレイマンを^{エレメンタルヒーロー}守備表示で召喚
リバースカードを2枚伏せターンエンドだ」

懐かしいな

初期の感じがするデュエルだな

俺も行かせてもらうぜ

「俺のターン、ドロー」

俺は手札からフィールド魔法 ^{カオス・ゾーン}混沌空間を発動

さらに^{ファイナル・フュージョン}永续魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動
F・G・Dを指定し

デッキから融合素材のドラゴン族モンスターを5枚墓地に送る」

いきなりフューチャー・フュージョンが
ラッキーだな

まあ、いつもこれくらいいくけど

「さらに今デッキから墓地に送られたエクリプス・ワイバーンの効果発動

このカードが墓地に送られた時

デッキから光もしくは闇属性のレベル7以上のドラゴン族モンスターを除外する

俺はデッキからレベル7の光属性ドラゴン族モンスター

フォトン・ワイバーンを除外する

この時、カオス・ゾーン混沌空間の効果が発動する！」

「なに！」

こいつは最近、神からもらったカードだからな

別の世界で新しく最近生み出されたカード

そいつらをデッキに入れて戦っている

「カオス・ゾーン混沌空間の効果

モンスターがゲームから除外されるたびにこのカードにカオスカウンターを一つ乗せる

さらに手札のライトパルサー・ドラゴンの効果話発動

墓地の光属性モンスターと闇属性モンスターを除外することで

このカードは手札から特殊召喚する事ができる

俺は墓地の光属性 レッドアイズ・ブラックドラゴンエクリプス・ワイバーンと

闇属性 真紅眼の黒龍を除外しこのモンスターを特殊召喚する

来い、ライトパルサー・ドラゴン！！」

「いきなりライトパルサーかなかなか本気だな、遊輝！」

「ああ、勿論だ

俺が手を抜いたことなんかあったか？」

「無かったな

お前はいつも全力全壊だったな」

おいそれじゃあ

「おい十代

俺はこの管理局の魔王だ

まあいい、混沌空間^{カオス・ゾーン}の効果でカオスカウンターが二つのる

そして、除外されたエクリプス・ワイバーンの効果を発動

このカードが除外された時このカードの効果で除外されたモンスターを手札に加えることができる

俺は除外されていたフォトン・ワイバーンを手札に加える行くぞ、十代

俺はライトパルサー・ドラゴンでクレイマンに攻撃パルスストリーム！」

通らないだろうが

除去カードが少ないこのデッキだ

トラップは早めに発動させとかさせてもらっぞ

「そうはさせないぜ

リバーカードオープン ヒーローバリア

ライトパルサー・ドラゴンの攻撃を無効にする」

たぶんもう一枚はもつと強力な除去トラップだろ
ミラフォとかかな

「俺はリバーズカードを一枚伏せターンエンドだ!!」

「なかなかやるな遊輝

俺のターン、ドロー!

俺は融合を発動

手札のE・HERO スパークマンとE・HERO エッジマンを
融合

来い E・HERO エレメンタルヒーロー プラズマヴァイスマン!!」

プラズマヴァイスマンか

あいつの効果でライトパルサー・ドラゴンを消してダイレクトアタ
ックか?

「俺はプラズマヴァイスマンの効果を発動するぜ

俺は手札を一枚捨てライトパルサー・ドラゴンを破壊する」

予想通りだな

「そうはさせない

俺はトラップカード 竜の転生を発動

このカードの効果によりフィールドのライトパルサー・ドラゴンを
除外し

手札からドラゴン族のフォトン・ワイバーンを特殊召喚する

これによってプラズマヴァイスマンの効果の対象はいなくなり
その効果は不発だ!」

「なんだって!」

「さらにフォトン・ワイバーンの効果発動
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時相手フィールド上のセッ
トされたカードを全て破壊する
フォトンサイクロン！」

十代の伏せカードが破壊されるって
やっぱりミラフォか
ミラフォは失敗フラグなんだが

「そして混沌空間にカオスカウンターが一つのる

カオス・ゾーン

「だけど、フォトン・ワイバーンよりプラズマヴァイスマンのほう
が攻撃力は上だぜ
プラズマヴァイスマンでフォトン・ワイバーンに攻撃
ヴァイススパーク！」

4000 - (2600 - 2500) = 3900

「っち」

「俺はターンエンドだぜ」

「俺のターンドロー」

俺は手札から天使の施しを発動
3枚ドローし2枚捨てる

ドラゴンズ・ミラー

俺は手札から竜の鏡を発動

墓地の5枚のドラゴン族を除外し

フュージョン・マジック

現れよ F・G・D

さらに5体のモンスターが除外されたことにより

カオス・ゾーン
混沌空間にカオスカウンターが五つの

カオス・ゾーン
そして混沌空間、第二の効果を発動

自分フィールド上のカオスカウンターを四つ以上取り除くことで
取り除いた数と同じレベルを持つゲームから除外されているモンス
ター一体を特殊召喚する

俺は八つのカオスカウンターを取り除き
除外されている銀河眼の光子龍を特殊召喚！
ギヤラクシアイズ・フォトン・ドラゴン

このターンで終わらせてもらうぜ十代

「さらに融合を発動フィールドの銀河眼の光子龍と手札の銀河眼の
ギヤラクシアイズ・フォトン・ドラゴン
光子龍を融合

来い ツイン・フォトン・リザードを特殊召喚

ツイン・フォトン・リザードの効果発動

このカードを生け贄に捧げ

このカードの融合素材にしたモンスター一組を自分の墓地から特殊
召喚する

ギヤラクシアイズ・フォトン・ドラゴン
現れよ2体の銀河眼の光子龍！！」

ファイブゴッド ドラゴン
F・G・Dを挟むように現れる2体の銀河眼の光子龍
ギヤラクシアイズ・フォトン・ドラゴン
これで決まりだ

ファイブゴッド ドラゴン
「F・G・Dでプラズマヴァイスマンに攻撃
殲滅のゴッド・ストリーム！！」

4000 - (5000 - 2600) = 1600

ギヤラクシアイズ・フォトン・ドラゴン
「さらに一体めの銀河眼の光子龍で
クレイマンに攻撃

破滅のフォトン・ストリーム」

砕けるクレイマン

「そしてとどめだ

2体目の銀河眼の光子龍ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴンで攻撃

破滅のフォトン・ストリーム!!」

1600 - 3000〃 - 1400

「うわあああああああああああああ
つく負けたぜ

だけど…」

「ガツチャ

楽しいデュエルだったぜ」

「俺のセリフとるなあああ」

「勝者 石崎遊輝

おめでとう、君が我がデュエルアカデミアの代表だ」

「遊輝

俺の分まで代表戦頑張ってくれよ」

「勿論だ!」

その後俺は寮に帰って行った

今日は十代たちとパーティーだ!

「くうう、俺がなれなかったのは悔しいけど

遊輝、絶対代表戦勝てよ」

「そうつすよ遊輝

アニキに勝ったんだからきつと代表戦も勝てるっすよ」

「ああ、当然だろ

お前に勝ったんだ、絶対にお前の分も戦って勝ってくるよ」

「約束だぜ

じゃあ今日はパーティーだ
遊輝も食べよ」

「ああ、ってこれ俺が用意したんだろうが
勿論食うにきまつてるだろ」

「そつだったけ、まあいいや
とにかく食おうぜ」

みんなで騒いだり食ったり飲んだりして楽しいな
ちなみに並んでるのは

ココットライスと竜の卵

それにモスボークとオニオニオンで作ったチャーハンと
サシミウオやカジキマグロ

フグクジラやマーメイマグロの刺身とかだ

特にフグクジラの調理には本当に気を使ったぜ

ほかにスープやらサラダとかも作った

まあ一人だけで

さすがにあの食材は見せられん

「ところでどこでこんな食材を手に入れてきたッすか？」

「禁則事項だ」

「いいじゃないっすか
それくらい教えてくれても」

「禁則事項だ」

「言えるか
言っても信じねえだろ」

「ケチ」

「ケチで結構
覚める前に食おうぜ」

「そうなんだなあ翔
覚める前のほうがうまいに決まってるんだなあ」

「そんな感じで時間は過ぎていき
パーティーもお開きになった後」

「国崎さんでしたよね」

「あ、お前はあの時の
ちょうどいい、実は俺…」

「いいですよ、知ってますから
ジャーナリストの国崎さん」

そう、俺はあのおっさんこと国崎耕介に会いに来ていた

「俺のこと知ってたのか
だったらなんで俺のことを黙ってたんだ？」

「あなたが悪い人に見えなかったからじゃダメですか」

「お前も変わったやつだな
けどだましていたことに変わりはない
えすまなかつた

お前たちのデュエルを見て俺も思い出した
昔はこれでもデュエリストを目指して世界を渡り歩いたこともあつ
たんだ

けど、世界の強豪たちの前に敗れ
夢を捨てて

今じゃジャーナリストとは名ばかり
金になれば汚いことも平気でやって
けど、もう一度言うがお前らのデュエルを見て
お前らがあれだけ熱くなれるデュエルを
夢を諦めて逃げ出した俺に取り上げる権利はないって気付いた
そして、俺ももう一度やってみたくなった
今度こそ本当の正義の追求ってやつをさ」

「国崎さん

あなたはやっぱりいい人だ」

「こいつを記事にするのはやめだ
お前らと初めて会った夜
お前のことをつけて廃寮に行ったんだよ
そのあと調べたんだ

だが、俺なりに真実を調べてみる
何かあつたら知らせるよ」

「ちょっと待ってくれ
俺も個人的に同じことを調べるのを頼んでるやつがいるんだ
俺とそいつの連絡番号を渡しておくから
たまに連絡をくれないか」

「わかったよ
俺の連絡番号も渡しておくよ
いつでも連絡してくれ」

「じゃあこれが俺とそいつの連絡番号だ
お前のことはそいつには俺から言うておく」

「分かった、あばよ」

「じゃあな、国崎さん」

そう言つて俺と国崎さんは別れ俺は寮に帰り眠つたんだ
ま、翌日の夜もライネスたち精霊組とパーティーをしたのは割愛する

第30話 もけもけの力 VS 茂木もけ夫（前書き）

少し第22話に書いたモンスターテキストを修正しました

第30話 もけもけの力 VS 茂木もけ夫

代表決定トーナメントの翌日の翌日

Sideクロノス

「ププンチョ、チョコプリン、チョコアラモード
つたく、あの石崎遊輝が我が校の代表だなんて
ほんとに決まったの？
決まってしまったの
ノン、ノン、ノン、ノン
まだ奥の手があるのね」

そうなのね

私には最終手段があるのね

「デュフフ」

イールサン
一、二、三、四（スゥ）

つてそれ中国語

よいしょ失礼しますグラッチェ」

あれはこの養鶏場の下にあるのね

「コケー！」

「「「コケー！」「」」

「「「「コケー！」「」」「」」

「な、なななななな！！」

「コケー！」「」

「あー！あー！

頭はやめてゝの！！頭やめてゝの！！」

確かこの砂場だったはずなのね
早く入らないと危ないゝの

「ささつとあけよ、閉められてゝの
よいしょ」

「コケー！」

また来たゝの

「傷たたたたた
だから頭やめてーの！！！」

「バサバサバサ
コケー！！！！」「」

「やめてゝの！！ほんと、頭だけは！！
勘弁してくださいよゝ！！」

ドン！！！！

落ちたゝの！お尻痛いゝの！！

「『コーコケケケ！！コーコケケケ！！』」

「私が卵泥棒なわけないじゃ無いのよ！！
この！ほれ！！」

扉閉めてつと

これでやっと落ち着けるの

「ひどい目にあつたのね

私は鶏なんかに構つて暇ないのに
グラッチェ、グラッチェ、これこれ」

これを着ての
準備完了なのね

「石崎遊輝イ……い

私はあなたのおかげで、またこのパンドラの箱おを
開けねばならないのね

遊城十代、あなたも一緒に潰してあげるの
よっころしょか」

カードを通しての

電子ロックを開けての

「しかし、どんなに恐ろしい結果になろうと
最後に残ってるのは希望

パンドラの箱には必ず最後には希望が入ってるのね
ぬっはっはっはっはっは
さあ、出ておいでーの！！！」

これである二人も終わりなの〜ね

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

「よし、これでこのデッキの完成だ」

「いやいや、ここはウォーター・ドラゴンを入れよう
炎属性には圧倒的に有利だ」

「いや、もうデッキ出来たって」

「エトワール・サイバーも入れるべきよ
直接攻撃の破壊力が違うわ」

「だからもうデッキ出来たって」

「デス・コアラもいいんだなあー」

「いや、だから」

「あのお、僕のパワー・ボンドも」

だからあ

「ああもう

だからデッキは出来たって」

「そうだぜみんな

遊輝はもうデッキ出来たって」

「十代の言うとおりだ

俺はもうデッキ出来たんだから邪魔すんなよ」

「何も邪魔をしているわけじゃない

今度のデュエルは学園の名誉をかけた戦いだ
だから俺たちも一緒に戦うつもりで」

それってただ自分のカードを使ってほしいだけじゃ

「そうよ、学園のためなんだから」

「冗談じゃない

俺は学園のためにデュエルしてんじゃないねえ」

「そうだ、これは遊輝のデュエルなんだ
遊輝は楽しむためにやってんだよ」

十代

「十代の言うとおりだ

俺は俺のためにやってるんだ」

「分かるぜ、その気持ち

デュエルは人のためじゃない
自分のためにやってるんだもんね」

「うん！」

やっと分かってくれたか

「だが遊輝、俺のウォーター・ドラゴンを入れてくれないか？」

「パワー・ボンドも！！！」

「ブレード・スケーターも」

「デス・コアラもいいんだなあー」

「だから俺はもうデッキ出来たって
十代、俺の味方はお前だけだ
一緒に逃げるぞ！」

俺は十代の手を掴みひっぱって逃げる
ただ、何か忘れてる気がする

「ああ、逃げた！」

「ああ、待て
俺のウォーター・ドラゴンを！！」

「エトワール・サイバーは？」

「あっちだ！！」

「僕のパワー・ボンドォー！」

お前ら

「十代どっちいけばいいと思う?。」

「屋上に行けばいいと思うぜ
俺のとおっておきの場所なんだ」

「屋上か」

俺もそこは好きだな、まあいい早く行こう」

「おーい遊輝!!」

「エトワール・サイバーよ!!」

ほんとにあいつらは

「ほんとになんだっちゅうんだ」

「まったくだぜ」

お前はもうデッキ出来たって言ってるのになあ」

とか言いながら屋上まで駆け上がる俺と十代
まったく、それにしてもやっぱりこの展開
アニメで見たことあるような

「やっと着いた」

こんなに時間が長く感じたのは初めてかもしれない

「やあ」

青いぼろぼろのノースリーブのシャツを着たオベリスク・ブルーの

生徒が目の前に

あ、思い出した

ってことは問題ないか実体化、いや問題あるな

「なんで俺らしか知らないっておきの場所にお前が?？」

いや、ほかにも知ってるやつくらいいると思うが

「お天気がいいからねえ」

「「お天気?。」」

いや、どうしたらその理由が応えられるんだ
なぜこの場所にお前がいるという趣旨の質問でお天気がいいからね
って

「ここだとお日様がぽかぽか、雲がぶかぶか
何にもしたくなくなるよね」

「ああ、そうかあ?。」

「俺としてはそうは思わないけど

まあ、昼寝するのには確かにいい場所だけど」

『クリクリ』

「あ?ハネクリボー?。」

『こんにちは』

「^{かなで}奏も出てきたのか」

「あ、それ？それってもしかして君たちの精霊かい？」

「あ？お前ハネクリボーが見えるのか？」

ま、記憶どうりだな

「かわいいねえ、そっちの女の子の精霊もね
あ、そうか

君が遊城十代君、で君は石崎遊輝君だね」

「なんで俺たちの名前を？」

十代、その質問は愚問だと思うぞ

「僕は茂木もけ夫
突然だけど遊輝君、デュエルしようよ」

ああ、俺が代表になったから俺が先なのか

「いいぜ、そのデュエル受けて立つ
だけど、どうして急に
さっきは何もしたくないって言ってたのに？」

「それとは話が別
だってデュエルの精霊を知る人と一度はデュエルしてみたいじゃないか、ね」

そうゆうもんなのか

「じゃ、やるっぜ」

じゃあやる…

「あ、アニキと遊輝！！
やっぱりここにいた」

「え、なんでここが分かったんだ？」

いや、いつも行ってるならわかると思うぞ

「だってアニキ、授業サボると必ずここに
遊輝だっていつもここに飯食いに来てるじゃないっすか」

「どうしたんだ？」

「あいつとデュエルすることになったんだけど」

「何？」 「デュエルを？」

「まあいいや、とにかくやるぞ」

「うん」

「「デュエル！！」」

「僕の先行でドロー」

僕はもけもけを守備表示で召喚するよ」

『もけもけ』

「「あーーーーー可愛いーーーー!!」」

翔と痴女一体何言っただか

「なあんか、のんびりしたモンスターだな」

のんびりしたモンスターってなんだ

「そうね

なんかこつちまでのほほんとしちゃうわね」

「胸がぽかぽかする」

「あ、ああ

あれ?なんか眠くなってきたんだなあ」

「おい、みんなどうしたんだ?」

十代は何ともないな

それにしても隼人だけこの反応って

もしかして精霊が見える人には効かないけど

中途半端に精霊がわかる人には威力が高いのか

「僕はカードを2枚伏せてターンエンドだよ」

まあいいや、今は目の前のことだけを考えよう

「俺のターン、ドロー」

俺はほんろう翻弄するエルフの剣士を攻撃表示で召喚
そして手札からマジックカード 融合を發動
手札のバスター・ブレイダーと沼地の魔神王をブラック・マジシャ
ンの代わりに融合
来い 超魔道剣士・ブラック・パラディン」

「あはははは
すごい遊輝君、さすがだな」

なんじゃそりや
なんか、調子狂うな

「なんか見ているこっちまで調子が狂うな」

『クリクリ』

「確かにな

だがデュエルはデュエルだ
ほんろう翻弄するエルフの剣士でもけもけに攻撃
しんめいりゅうおうぎ神明流奥義 ざんてつせん斬鉄閃」

「僕はトラップカードをオープンするよ！！人海戦術！！
このカードは各ターンのエンドフェイズにそのターン破壊されたレ
ベル2以下の通常モンスターの数だけ
デッキから同じレベルのモンスターを特殊召喚するんだよ」

「だけどバトルは続行だ！！
行け ほんろう翻弄するエルフの剣士」

ほんろう翻弄するエルフの剣士がもけもけの上半身と下半身にサヨナラをさ

せると

もけもけは消えていく

「次だ

超魔道剣士・ブラック・パラディンでプレイヤーにダイレクトアタ
ック

ちょうまどうむえいざん
超魔導無影斬」

4000 - 2900 = 1100

ブラック・パラディンがもけ夫の前に急に現れ攻撃をする
ありや瞬動か？

「うわあ」

「カードを2枚伏せターンエンドだ」

「う、だけど

人海戦術の効果でハッピー・ラヴァーを攻撃表示で特殊召喚したよ
そして、僕のターンだからドロ―

僕はもけもけを攻撃表示で召喚するよ」

『もけ』

「「「かわいい」」」」

もう隼人は寝そうだから言っていないな

「もけもけいいな」

「私もデッキに入れてみようかしら」

無理だ、やめとけ

お前のデッキとは天と地がひっくり返ってもあわない

「いると嬉しいかも」

「はあああ」

「お前らほんとにどうしたんだよ」

全く十代の言うとおりだ
どうして、もけもけでこうなる
ってかどんな能力だ

「さらに、僕は手札から
怒れるもけもけを発動する

そしてハッピー・ラヴァーでほんろう翻弄するエルフの剣士を攻撃だよ」

「馬鹿な、ほんろう翻弄するエルフの剣士のほうが攻撃力は上なんだぜ」
うち

「かまわない
ハッピー・バーニング!!」

おい!

テキストに書かれたハートビームはどうした
そして、ほんろう翻弄するエルフの剣士

ビームを切ったら相手にビームが向かっていくってなんだよ

$$\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \\ - \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 4 \\ 0 \\ 0 \\ - \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 8 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 5 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

「あーあーあー！ぶぶぶぶぶぶぶぶ」

「「「きゃあ————！！」

おこった顔もまた可愛い――！」「！」「！」

「欲しいなあ、もけもけ」

「いいよねえ」

「おまえらなあ」

十代、やつぱり俺の味方はお前だけだ

「しかし、このとき

悪いけど、マジックカード 怒れるもけもけの効果が発動するよ
もけもけがフィールド上に存在しているときに、僕の天使族モンス
ターが破壊された場合

「このターン、もけもけの攻撃力は3000に上がるんだよ」

「3000かあ〜〜」

「もけもけちゃんってすごくおい」

「かつこいい」

そうか？

『もけえーーーーー！！！』

「「「すごーい！かっこいいーーーーー！！」」

「攻撃力3000のもけもけかあ」

「「「っはっはっは」」」

うざい、拍手しながらその反応はうざい

「おまえらなあ、どっちの応援してるんだよ」

十代、よく言ってくれた

「そりゃあ・・・

どっちでもないよお」

ズコオオオン

俺と十代はひっくり返る

なんでやねん、どう考えてもお前らもけもけの応援してんじゃん

「あのいいかな？

あの僕はもけもけでブラック・パラディンを攻撃したいんだけど」

「よくないかな

俺はトラップカード発動 ガード・ブロック

今回の攻撃でのダメージはなくなり、俺はカードを一枚ドロースる」

「だけど、ブラック・パラディンは破壊させてもらっよ

いけえもけもけ
もけもけウエ~~~~~ブ!!!!」

『もけもけーもけもけー』

「もけもけー
もけもけー」

あ、隼人寝てる

おいおい

「おまえらなあ!!」

「ほんとにお前ら」

「まあだだよ

僕は手札から速攻魔法 神秘の中華鍋を発動するよ

これはフィールド上のモンスターを一体生け贄に捧げることで

そのモンスターの攻撃力が守備力を選択し

その数値分のライフを回復させるカードだよ

僕はもけもけを生け贄に捧げ

攻撃力3000分のライフを回復するよ

さらにハッピー・ラヴァーが破壊されたことにより

人海戦術の効果を発動

僕ははにわを守備表示で特殊召喚するよ」

500+3000=3500

「はにわ?」

はにわって

おいおい

「うん

はにわだよ」

「「はにわだ」」

「おおーい遊輝」

「なんだ」

「頑張ることないぞお」

「お前、それ本気で言ってるのか」

「そうよ、戦いは良くないわよ
ピースで行こうねえ」

「もけもけのように」

「おまえらなあ」

「「「もけもけー」」」

「十代、もう何を言っても無駄だ
無視するから気にするな」

「だけど

こ、これは」

「あ、あはははは」

「だから無駄だよ」

「こいつらに今何を言っても無駄だ」

「ほんと、なんなんだよお」

「もけもけー」

「もけもけー」

「もけもけー」

「もけもけ」

「もけけのけけけなのおね

ひ
よ
い、
い
ひ
ひ
の
ひ
ゝ
ゝ

驚きました？

ドロップアウトボーイズ、石崎遊輝、遊城十代
これが茂木もけ夫の脱力デュエルなの〜ね」

変な服を着たクロノスが現れた

「脱力デュエル？」

命名単純すぎんだろ

「そう、シニョール茂木は三年前
学園の誇るナンバーワンデュエリストだったの〜ね！！」

相手の戦術、伏せカードの読み

全てにおいて彼は天才的デュエリストだったのゝね」

「ナンバーワンデュエリスト？こいつが」

十代、戦ってみたいって顔になってるぞ

「しかあーしー！！」

ある日を境にシニョール茂木のデュエルが変わってしまったのゝね」

「デュエルが変わった？」

「そう、彼と対戦したデュエリスト全てがやる気をなくし学園を辞め、島を去ってしまったのゝね」

「やる気をなくした？」

東方風に言つと

相手のやる気をなくす程度有能力か

「『もけもけ』」

「よく分からないんだけど、もけもけと出会ってからみんなこうなっちゃうんだよね」

「とにかく」

シニョール茂木の力に気付いた我々は学園のため、そしてデュエリストのため！！彼を離れたところ

つまり、シニョール茂木専用の寮に入れたのゝね」

「ひでえことしゃがる」

「全くだ

人間のことをなんだと思ってるんだ!!」

ほんとに

この学園の人間は

「ノン、ノン、ノンカンビッナ

何を言うの〜ね

そこは天国!! 茂木もけ夫だけの超豪華施設なの〜ね」

「だったらなんで出てきやがった？」

「十代の言うとおりだ

デュエルなんてしたくないだろ」

「うん、でもクロノス教諭から君たちのことを聞いてある予感がしたんだ

ひよっとして君たちは僕と同じように

デュエルの精霊を扱えるんじゃないかってね」

精霊を扱う？

「精霊？」

「僕はねえ

君たちの可愛い精霊たちをデュエルから解放したいんだよ」

『クリクリ ！』

あいつは

「こつやつのほぐんとしているほうが
精霊にとっては幸せだからねえ」

何を

『クリクリ 』

言ってるんだーーーー！！

「ふざけたこと言ってるじゃねえ」

『そうよ、私は遊輝と一緒にいて楽しいんだから』

『クリクリ 』

「残念だけど

俺の相棒も楽しいと言っている

俺と一緒にデュエルできることを」

「そうかなあ？」

「俺のターン！！ドロー ！！

俺はエルフの剣士を攻撃表示で召喚
はにわを攻撃

秘剣 ツバメ返し」

振られた剣から三つの斬撃がはにわに向かって飛び
はにわを切り裂く

「そして、ほんろう翻弄するエルフの剣士でプレイヤーにダイレクトアタック
しんめいりゅうおうのぎ神明流奥義 ざんてつせん斬鉄閃！！」

3500 - 1400 = 2100

「そしてターンエンドだ」

「じゃあ僕も

人海戦術の効果でハッピー・ラヴァーを攻撃表示で特殊召喚するよ」

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよとまっちょーれ！！！」

ドロップアウトボーイズったらまだ

やる気満々じゃないのゝよ

なぜ？どうして？おせーてー

なんであいつらみたいにもけもけになっちゃわないのゝね

何故なゝぜ？どうしてなのゝね？」

当り前だろうが

そんなもんで俺の、いや俺たちのやる気が削げるわけねえだろうが

「僕のターン、ドロー

僕は強欲な壺を発動

それによりカードを2枚ドローするよ

さらに僕は手札から闇の量産工場を発動し

墓地から通常モンスターを二体選んで手札に加えるよ」

『もけ』

『もけ』

『もけ』

「そして手札のもけもけを合わせて三体融合して」

「ええ」

「うわあー」

『キングもけもけ』

「でかあ!!」

なんじゃこりやあ
でか過ぎるだろ

「キングもけもけ!!」

キング・もけもけ・ウェーブでエルフの剣士を攻撃して!!」

『キングもけもけ』

「怯むな!!」

ツバメ返しだ!エルフの剣士!!」

2100・(1400・300)≡1000

キングもけもけから3体のもけもけが落ちてくる

「キングもけもけの効果を発動するよ

キングもけもけが破壊された時

自分の墓地に存在するもけもけを可能な限り特殊召喚する事ができる」

「「また？」」

またかよ

『『『もけもけ』』』

うわ、クロノスの来てた変な服の顔の部分だ碎けた
なんちゅう威力や

「僕はハッピー・ラヴァーでエルフの剣士を攻撃するよ
ハッピー・ラヴァー！！ハッピー・バーニング！！

だからハートビームはどうした

「無駄だ」

1000 - (1400 - 800) = 400

三体のキレるもけもけ
だが

「この瞬間

怒れるもけもけの効果が発動

天使族モンスターが破壊されたことにより

もけもけの攻撃力は…」

「また3000か、遊輝」

「大丈夫だもけもけ一号でエルフの剣士を攻撃」

「つく」

$$4000 - (3000 - 1400) = 2400$$

「もけもけ二号ともけもけ三号で翻弄するエルフの剣士に攻撃」

「そうはさせない

ガード・ブロックを発動

もけもけ二号のダメージを0にし一枚ドローする」

「だけでもけもけ三号の攻撃は当たるよ」

$$2400 - (3000 - 1400) = 800$$

「人海戦術の効果により

僕は再びハッピー・ラヴァーを守備表示で特殊召喚

さらに、トラップカード ホーリーエルフの祝福を発動

フィールド上のモンスター一体につき300ポイントライフを回復する」

$$400 + 300 \times 4 = 1600$$

「まだまだあー！

俺のターン、ドロー」

「あれおかしいな？どうしてだろう？
なんでまだやる気があるんだ？」

「当ったり前だろ
こんな楽しいことやってるのにあくびしてる暇なんか遊輝にも俺にも無いっちゅうの」

「その通りだ
俺はビッグ・シールド・ガードナーを攻撃表示で召喚
さらにシールド・クラッシュを発動
ハッピー・ラヴァーを破壊」

「怒れるもけもけを発動
もけもけの攻撃力は3000になる」

「そんなのかんげえねえ
俺は強制転移を発動

このカードの効果により俺はビッグ・シールド・ガードナーを選択
する

お前のフィールドにはどっちにしろもけもけただけだけど
もけもけでビッグ・シールド・ガードナーにもけもけウェーブで攻
撃」

「えー」

（もけもけがあんなにやる気を出している）」

1600 - (3000 - 100) = 1300

「うわあああ」

「いいデュエルだったな

お前も結構熱くなってたじゃん」

「それでも楽しじゃないんだ

力を抜くのもね」

「分かるぜ

デュエルってすごく楽しいからな」

「確かに十代の言うとおりずっと楽しくもんな」

「たまには君のように勝負に拘るのもいいもんだな」

「「だろ」」

「でも今は、頑張りすぎたんで眠くなってきたやつた
おやすみ」

「「えーーーーー！！！」」

お前はのび太か

「もう、なんでこうなる

十代、お前は今もえとジュンコ呼んでくれ
痴女を運ばせる

こっちは大原と神楽坂と大徳寺先生を呼んで
クロノス先生と三沢ともけ夫を運ぶのを手伝ってもらっ
呼んだメンバーが来たら俺が隼人、お前が翔を運んでくれ」

「ああ、分かった」

これからしばらくして来てくれた仲間にお礼を言いながら

俺らも隼人と翔を運んだあと寮に帰ったんだ

俺は昨日の夜と同じようにそのあと俺の精霊たちとパーティーを開いた

それから眠ったんだ

第31話 頂を目指す雷 万丈目VSノース校オールスターズ? (前書き)

メリー 苦シミマース

わっはっはっは

なんだかんだと聞かれたら

答えてあげよう! 明日のため

フューチャー 黒い未来は独身の色

ユニバース 白い世界に正義の爆破

我ら未来にその名を記せない

恋仲の破壊者、ダイナマイト

独身の純情、ホース

無限の欲望、GMS

さあ集えR (リア充抹殺) 団の名のもとに

(すいません)

リア充に対する恨みとか

風邪気味の体調のせいで変なテンションになってます)

第31話 頂を目指す雷 万丈目VSノース校オールスターズ？

Side 万丈目

今俺はどこかの海にいる

霧に包まれ、此処が何処かなんて分からん

「クロノスめ

三沢大地め

遊城十代め

石崎遊輝め」

今でも思い出す

あの忌々しいやつらのことは

「ガツチャ楽しいデュエルだったぜ」

遊城十代の幻覚が俺に声をかけてくる

本当に五月蠅い

負けたらこっちは終わりなんだよ

「五月蠅い！！」

勝ちや楽しいだろうよ、何がゲロッパだ」

「言っていない、言っていない」

ふざけやがって

幻覚の分際で俺を侮辱しやがって

「もう一度

もう一度戦えば必ず、俺が勝つ！！」

「無理だな、今のお前じゃ

俺にも十代にも勝てねえよ」

今度は石崎遊輝の幻覚が侮辱してきやがった

「この！！」

俺はデュエルディスクで幻覚に攻撃をする

そうすると二人の幻覚は消えていく

だが、デュエルディスクの電源も切れ

赤く点滅し機能が停止してしまう

笑うしかないな

「ふっはっはっはっは」

俺はペットボトルを取って水を飲むが

「この水で最後か」

「なあ、万丈目

早く帰ってこいよ」

ふざけるな

「この俺とデュエルしようぜ」

お前とのデュエルに負けたから

石崎遊輝とのデュエルに負けたから
三沢大地とのデュエルに負けたから
俺はあの学園を出ていくことになったんだろぅがあー！

「五月蠅い！！！！」

俺は幻覚に向けてペットボトルを投げ

「ああ！！！！」

しまった、最後の水があ
俺は急いで水の入ったペットボトルを取ろぅとするが
海の中に落ちてしまう

「にゅーだい（十代）、にゅーき（遊輝）
ぜっちゃんちゃおしてにやる」（絶対倒してやるっ）

不味い

息が出来ない

俺はこのまま死ぬのか
そう思った時俺は意識を失った

『アニキ、アニキ』

う

『アニキ、アニキ
気が付いてくださいよう』

「う、ううん」

『アニキ〜』

アニキってばあ〜』

「あ、あ」

此処は

「気が付いたか？」

「此処はどこだ？クジラの腹の中か？」

なんだ？こいつは

昆布お化けとでも言うべきようなものが俺の目の前にいる

「誰だ貴様、いったい何者だ？」

「はっはっは

わしの名前などどうでもいい

お前、デュエリストなのか？」

あの昆布お化けが持つてるカードは、まさか
デュエルディスクを見てもデッキがない
やはり

「そのカードは俺のデッキか？
返せ、昆布お化け！！」

「残念だが、びしょ濡れですべてダメになってしまった」

そう言って俺のデッキを水たまりに捨てただと

「この爺！」

殴りかかろうとしたら昆布お化けが俺にカードを一枚投げてきやがった

何のつもりだ

「そのカードはわしからのプレゼントじゃ」

「プレゼントだと？」

おジャマ・イエローだと

俺が邪魔者だとも言いたいのか

「なんだ？このカードは！！」

「こら！！何をする！！」

そのカードを捨てると後悔するぞ！！」

俺がおジャマ・イエローのカードを捨てようとしたとき昆布お化けが急に大声を上げて俺に後悔するぞと言ってきた
一体何のつもりだ
そして、どういう意味なんだ

「どういう意味だ？」

「お前は強くなりたい、強くなりたい

とうなされておったが？」

「うなされていた？俺が？」

「クロノとか、三沢とか、十代とか、遊輝とか言っておったが」

クロノ？

クロノス教諭のことか

うなされていたとはいえそんなことを言うとは

「俺様としたことが」

「お前は本当に強くなりたいのか？」

「えへへへへ」

言つたら、この学園で一番は俺だつて」

今でもそんなことを言う十代の声や

「今のお前じゃ俺らには勝てねえよ」

こんなことを言う遊輝の姿が頭をよぎる

俺はあいつらを叩きのめすための力が欲しい

「当り前だ！

力を望まん男がどこにいる」

「その努力をする覚悟があるのか？」

「努力だと！貴様誰に向かって！

俺は万丈目 準！万丈目さんだ！」

努力など下らんものは当の昔に溝に捨てたわ

「ふっふっふっふ」

努力は嫌い、だが強くなりたい
呆れ果てたやつ

が、まあいい

お前には人と違った能力があるようじゃ
いい場所に連れて行ってやる」

なんだ

急に上から水が

「うわ、あ、ああ、うわ」

「しっかりやるんじゃぞ」

つく

水面から出されたと思ったたらどこかにたたきつけられた

「昆布お化けめ、無茶苦茶やりやがって！」

次あつたら覚え…

此処はいつたい

「此処はいつたいどこなんだ？」

あの建物は？

ふ、爺め！俺様を試す気か？

よかろう、この万丈目 準を舐めるなよ」

俺は建物のほうに向かって歩いていく

俺は気付かなかったがこの時何者かが俺を見ていたんだ

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

「此処はいつたいどこなんだ？

あの建物は？

ふ、爺め！俺様を試す気か？

よかろう、この万丈目 準を舐めるなよ」

お前なんて汚く舐めれるかよ

俺は今、万丈目をつけている

理由は何となくというのと渡しておきたいカードが二枚あるからだ

まあ、あいつがカードを集めてからだけどな

ノース校のほうに向かう万丈目を俺は追いかけた

万丈目のあとを追ってノース校までたどり着いたのだが

なんだ、あの馬鹿でかい木製の扉は

「開ける！おい誰かいないのか？開ける！」

「無駄だ

此処はデュエルアカデミアノース校

その門は40枚のカードがなければ開かない」

どんな門だよ

最新式のセンサーでもついているのか？

「此処はノース校

俺はここに来るまでにデッキを失くしたんだ」

失くしたというより失ったじゃないか
同じか

「扉は40枚のカードがなければ開かない
それが此処の入学条件だ」

「ふ」

お前もそうのんきではられないぞ
万丈目

「だが、入る方法はある
この学園の周りのクレバスや洞窟にはカードが隠されている
それを見つければいい、でなければ私と同じ運命だ」

演技がうまいなあのおっさん
少し見習うか？

それにしても万丈目はどうしてこんな寒い場所で濡れた服を着て大
丈夫なんだ？
俺でも結構きついぞ

「お前、それは？」

万丈目がおっさんのデュエルディスクを見てカードに気付いた

「このデッキには39枚しかない
これだけ集めるのにわしは体力気力を全て使い切ってしまった」
そうは見えないが

「ふん、要はただの脱落者か
ならば、爺

これでそのカードを売れ」

そう言つて緑色のカードを出す万丈目
あいつは馬鹿か

この環境で金なんかあつたつて無駄なことも分らないのか？

「嫌だ！これは私が生きた証なんだ！
お前はそれを奪うというのか？」

「まあいい
自分の事は自分でやる」

昔の万丈目だと言わないことだな
この時点で多少変わり始めていたのか

「気をつける
強いカードはより険しい場所にある」

そうして万丈目はカードを探しに行った
じゃ、此処からは俺の番か

「これで一息か
わしも少し休憩できるな」

「その前に一ついいか」

「誰だ！お前は？」

いきなりだな

「俺はデュエルアカデミア本校の生徒
訳があつて顔は出せないが一ついいか？」

「本校？」

偵察にでも来たのか？」

「ちげえよ

万丈目のことを頼む、それだけだ
あいつに渡したいカードも三枚あるからな」

「ふん、よかるう」

「では、俺は万丈目の様子でも見させてもらつよ」

そう言つて俺は去つて行つた

ちなみに俺の姿は黒いフードをかぶつて顔を見えなくしており
声は変声魔法をかけて変えている

さあ、万丈目

お前が変わるところ見せてもらつよ

S i d e a u t o

S i d e 万丈目

爺と別れてから俺はあっちこっちのカードを探した
時には氷壁を上り
時には泳ぎ

さまざまな動物と戦いカードを手に入れた
見てろよ十代、遊輝
必ずカードを集めてデッキを作ってやる
俺は絶対にドロップアウトなんてしない
というこの信念を貫くために
そしてカードを集めきりノース校の入り口まで戻ってきた

「まだ居たのか、爺？」

あの爺、まだ居たのか
さっさと帰ればいいものを

「おお！帰ってきおった
カードを40枚集めたのか」

「ああ、北海のシャチと戦い（逃げただけだが）
果てしない断崖を上り（果ては見えてたか）
白熊と戦い（子供だったか）
吸血蝙蝠と戦い（これも逃げただけだが）
ついにそろえたぜ！」

「そうか、でははれて門の中に入れるのだな
よかった、よかった
わしは君が去った後にずっと後悔しておった」

「後悔？」

何をだ？

「わしはあの時君にカードを渡すべきだったのだ

若い君はわしのようになつてはならん
だが、君は無事に戻ってきてくれた
さあ、行きたまえ

扉は君を向かい出でるだろう」

爺

ほんとは40枚しかないが
俺も変わったな

「爺、お前も一緒に行くんだ」

「え？」

「俺のカードを一枚恵んでやる
それで、お前も40枚カードが揃うだろう」

「な、なんと
わしにカードを？だが」

「41枚カードを揃えたんだろう
勘違いするな、俺のデッキには不要なカードだ」

そうしておジャマ・イエローのカードを渡そうとするんだが
どうした、俺の手が勝手に

「なんだ、くれるんじゃないのか？」

「な、なんだ
この手が、勝手に」

『ねえねえアニキ

なんでおいらを他人にあげようとするんだよ』

「なんだ、お前!!」

おジャマ・イエロー？

「どうかしたのか？」

「見えないのか？」

「何がです？」

『アニキにしかおいらの姿は見えないよお』

「なに!!!!」

それじゃ俺が痛いやつみたいじゃないか
しまった、この爺に痛いやつに見られてるんじゃないか

『ねえねえおいらを他人にあげたりしないでよ』

「じゃかしい」

『お願いだよお

おいらには本当の兄弟がいるんだ
一緒に探してくれよお』

「えっと、カードをやるんだっとな
ほら」

「ああ、ありがたや
あなたのお名前は？」

「俺の名前は万丈目

万丈目 準だ

爺、先に行け

俺は疲れた」

本当はカードが足りなくなってしまったただけだが
俺も本当に変わったな
昔だったらこんな爺無視していたものを

「おお！万丈目さん

あなたは優しい人だ」

「五月蠅い、早く行かないと
カードを返してもらおうぞ」

「では、お先に
先の中で待っておりますぞ！」

俺は爺が座っていたたき火のところに行く
爺は先に入ったようだな

「畜生

一枚足りなくなっちまったぜ」

「えへへへへ

お前いいやつじゃん」

「十代の言うとおりだ
変わったじゃないか」

「五月蠅い、ふ、こいつは」

幻覚に殴り掛つたら見たのはカオス・エンドのカード
あの爺、気付いてなかったのか？

「よくみ「待て」誰だ！！」

「俺が誰かはどうでもいい
貴様にこの三枚のカードをやる
お前についている黄色いやつの子孫とそのホームグラウンドだ
お前にいつか力を貸してくれるだろう」

「なに、この雑魚が見えるのか
それにこんなカードは見たことが…
消えた？ いったい何者だったんだ？
まあいい
では改めて入るとしよう
よく見る！！カードは40枚あるぞお！！」

扉が赤く光り開き始める
俺のデュエルディスクも起動を始めた
俺は中に入っていく

「此処がデュエルアカデミアノース校？」

まるで西部劇の舞台じゃないか

ガシャン

「うん？」

「うわ」

あれは！

「あ、おい爺！何があった？」

「万丈目さん！」

「ふっふっふ、ちょっと新生を歓迎したまですよ」

「「「ふふふっふっふ「「「

「「「わっはっはっは「「「

こいつらはもしかしてノース校の生徒か？
だが、歓迎とはどういうことだ

「ようこそ、デュエルアカデミアノース校へ」

「お前は？」

「俺がここの生徒会長
人はキングと呼ぶ

新生はここのしきたりで歓迎を受けなければいけない」

「しきたりだと？」

歓迎を受けなければならない？
どんなしきたりだ

「名付けて、死の50人抜きデュエル！！
この学園は力こそが全て」

「厳格なランク付けが存在する」

「新入生は格付けが隠したのものから戦い」

「負けたところからランクが決まる」

「50人抜けたら」

「俺様が相手してやる」

でっかいのが話したら

モブA・B・C・Dが話したでっかいのが話してきやがった

「こいつは最初のデュエルに負けた

つまりこいつにな

だから一番ランクが下だ」

「存分に扱き使ってやるぜ」

「ふ、俺もしばらくぶりのデュエルだ
受けてたとう」

「てめえの最初の相手はこの俺だ！」

「てめえじゃない！！俺の名は

1！

10！

100！

1000！

万丈目さんだ！！

」

なんか語呂が悪いな

さんだ、さんだ、サンダー

サンダー、いいじゃないか次からこれにしよう

それからデュエルが開始され

「俺のターン、リミッター解除

デス・シザースの攻撃！！ラブポイズン！！」

2000 - 2000

「うわあああああああああああああああ」

「次は俺だ！」

それからまたデュエルをしていく

「うわあああああああああああああああ」

「うわあああああああああああああああ」

「うあああああああああああああああああああああ
ああああ!!!」

ふ、口ほどにも無いじゃないか
そしてデュエルをしていき46人を片付けたところ

「野郎！」

「俺たちがこの学園の四天王だ！」

「キングには指一本触れさせないぜ！」

「目に物見せてくれる！」

「ふふふ、一人二人は面倒だ
全員まとめてかかってくるといい」

雑魚どもが

俺のことを舐めすぎだぞ

それにしてもあのモブ A・B・C・D が四天王とは笑えるな

まあ、本当はこれ以上俺が考えたタクティクスをばらしたくないのもあるんだが

「行くぜ!!!」

「俺のターン、俺は切り込み隊長を召喚
特殊効果発動

このカードが場に召喚できたとき
レベル4以下の戦士族を特殊召喚する事ができる
出でよ、切り込み隊長」

『ひ』

「俺のターン」

そして奴らは全員同じことをしてくる
ワンパターンな奴らめ

「切り込み隊長が場に二体以上出ているとき
相手は切り込み隊長を攻撃する事が出来ない」

「見たか？」

これが俺たち四天王の切り込み隊長ロックだ」

「文字通り八つ裂きにしてやるよ」

「ふ、そんなに同じやつがいたんじゃ、誰が隊長かわからんな」

こいつらは隊長の意味を知っているのか？

「俺のターン！！ドロー！！」

俺はカードを二枚伏せ、巨大ネズミを守備表示で召喚」

「そんな雑魚カードで守りきれれると思うのか？」

「見えるぜ、俺にはお前たちのデュエルが
俺はカードを探し出すサバイバルの間に懸命に考え抜いた
間切られた手札で起きるであろうあらゆる状況を
そしてそれを打開するあらゆる方法を」

『かつこいいーーーー』

アニキ、それったおいらのことだよね』

『さすがご先祖様の相棒

かつちよいいーーーーー』

『すげええええ』

「なぜ、増えてる！黙れ！！

所詮、デュエルは力だ

弱いカードが強いカードに勝てるわけがないだろ

知ったのは雑魚には雑魚の使い道があるということだ」

「何を一人でわめいてやがる？俺のターン！！

マジックカード発動 連合軍

こいつは場にいる戦士族モンスター一体につき200

戦士族モンスターの攻撃力をあげる！！

よって切り込み隊長の攻撃力は2800！！

決める、バトルだ！！」

「みんな一斉にやっちゃえ」

「巨大ネズミの効果発動！！

デッキより地属性、攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚する

俺が呼ぶのは逆切れパンダ！！」

「攻撃力800なんざ問題じゃねえ！！」

「逆切れパンダの効果発動！！

こいつは相手フィールドのモンスター一体につき攻撃力を500ポ

イントアップさせる」

「攻撃力4800!?!」

「さらにトラップ発動 破壊輪

このトラップはモンスターを破壊し、互いのプレイヤーにその攻撃力分のダメージを与える」

「こいつ、俺たちと一緒に自滅する気か」

「いいや、速攻魔法!! 防御輪!!」

こいつが如何なるダメージからも俺を守ってくれる

3!

2!

1!

0!

」

ドカーン

この戦略はかの海馬瀬戸も使用したことがあるとされる戦略だ
これほど有名な戦略を警戒してなかったとは
ノース校の生徒もそれ程までに低レベルなのか

「ふ」

4000 - 4800 = 800

4000 - 4800 = 800

4 0 0 0 - 4 8 0 0 〓 - 8 0 0

4 0 0 0 - 4 8 0 0 〓 - 8 0 0

「さあ、残るのはお前だけだ！」

「つつつ、よくぞ生き残った

ここまで登りつめた気力、体力誉めてやろう

しかし、これまでの戦いで手の内をさらし過ぎたな
身の程を教えてくれる」

『ひいゝゝゝ』

「おお、強そうじゃん

大丈夫かあ万丈目」

「五月蠅い、万丈目さんだ」

また幻覚か

「あんな木偶の棒、今のお前の敵じゃないだろう」

「珍しくいいこと言うじゃないか」

遊輝の幻覚の言うとおりだ

あの程度、今の俺の相手じゃない

それからあいつが歩いてきた

そして俺の前に立つ

ふ、いいだろう

格の違いというものを見せてやる

「デュエル！！」

「俺のターン

俺はマジックカード デビルズ・サンクチュアリを二枚発動
二体のメタルデビルトークンを特殊召喚
この二体を生け贄に

出でよ、デビルゾア！！

さらにカードを二枚伏せターンを終了する
さあ、俺の前に屈するがいい万丈目！！」

「万丈目さんだ！！

俺のターン！！

お前はあの男が俺に渡した！！」

『万丈目のアニキ

おじやま三兄弟の子孫である

おれ、おじやま・ブルーの力も使ってくれ』

「五月蠅い！！と言いたところだが

確かにこの手札ならお前のような雑魚でも使えるな
俺はこの雑魚を召喚

おじやま・ブルー

さらにカードを一枚伏せてターンエンドだ！！」

「はっはっはっは

貴様のデッキには雑魚しかいないのは分かっている
俺のターンだ、さらなる地獄を見るがいい

トラップ発動 メタル化・魔法反射装甲！！

そして、魔法反射装甲を装備したデビルゾアを生け贄に
メタル・デビルゾア、召喚」

『おお〜〜』

「まだだ!!」

さらにトラップカード、リビングデッドの呼び声を発動
このカードは墓地より一体のモンスターを呼び覚ます
当然蘇るのはデビルゾアだ」

「うわあー」

攻撃力2600と3000のモンスターか？
さあどうする、万丈目」

「たかが2600と3000だろ
決めて見せろよ万丈目」

二人の幻覚は正反対のことを言ってるが

「ふん、おもしれえ」

「見たか？」

貴様のデッキにはこの攻撃力をしのぐモンスターはいない
このデュエル、貴様のデッキを把握した俺が圧倒的に有利というわけだ」

『ひい〜〜』

こいつ

だが、俺にはやつには見せていないコンボが二つ
その一つはすでに手札に揃っている
それに賭けるしかない

「喰らえ!!」

デビルゾアの攻撃!!デビル・エックス・シザース!!」

『アニキ、後は頼んだよぉ〜』

「この時、おジャマ・ブル雑魚の効果を発動

デッキのおジャマと名のついたモンスターを二枚手札に加える」

「だが、これで壁モンスターは消えた

喰らえ!!メタル・デビルゾアの攻撃!!

メタル・エックス・シザース!!」

「うわあああああああ」

4000-3000=1000

「貴様のライフはすでに風前の灯
勝負はついたな」

「それはどうか?」

「うん?」

「俺はこの攻撃を待ってたぜ

マジックカード発動 ヘル・テンペスト!!!

このカードは3000以上のダメージを受けた時

お互いの墓地とデッキのモンスターを全てゲームから除外する」

「デッキと墓地のモンスターを全てだ!!」

「俺の手の内が読まれてるってんなら

このデッキのモンスターカードを全部デッキから取り除いてやるぜ」

「馬鹿め

勝負を捨てたか、俺の場には攻撃力3000と2600のモンスターがいる

これを倒さん限り貴様の負けだ、万丈目」

「万丈目さんだ！！俺のターン、ドロー！！
貴様、この俺

万丈目 準に戦いを挑んだことを後悔するがいい
マジックカード カオス・エンド発動」

石化するデビルゾアたち

このターンが貴様らのファイナルターンだ

「どうした、デビルゾア！」

「このカードは俺のカードが七枚以上ゲームから除外されているとき
相手フィールドのモンスターを全て破壊する」

「何！」

「さらにフィールド魔法 おジャマ・カントリーを発動
そして融合発動

おジャマ・イェロウジャマ・レッド
おジャマ・ナイト
手札の雑魚と雑魚を融合し
雑魚を融合召喚

おジャマ・カントリーの効果によりおジャマと名のついたモンスター
が表側表示でいる限り

フィールド上のモンスターの攻撃力と守備力に入れ替わる
おジャマ・ナイト
よって雑魚の攻撃力は2500
おジャマ・ナイト
雑魚で攻撃」

4000 - 2500 = 1500

「ぐわあああああああ！」

だが、俺のライフはまだ残る」

「まだだ！」

さらに手札から速攻魔法 融合解除を発動
来い！雑魚共！！」

『『おじやまファミリー推参』』

おジャマ・イおロヤマ・レッド
「雑魚と雑魚で攻撃
喰らえ！！」

一斉攻撃！万丈目サンダースペシャル！！」

『いやあん、行くわよお』

『ご先祖様、俺も行きまあす』

「ぐわあああああああああああ」

1500 - 2000 = -500

「どうやら新しいキングの誕生じゃな」

「ああ？お前！！」

お前は鯨の腹の中で会った昆布お化け!!」

「校長の一之瀬じゃ」

帽子とゴーグルを取る昆布お化けって
この人はそんな馬鹿な

「爺!!これはどうゆうことだ!!」

門の前にいた爺が校長だと

「せくな

順に説明しよう

まず、お前を飲み込んだのは鯨ではなくこの学園の移動手段じゃ」

ということとは

「潜水艦？」

「お前にやったカードが、お前が漂流していることを察知して助けたのじゃ」

「寝ぼけたことを言うな！」

「まあ、よからう

だが、お前が新しいキングになったからには
お前がこの学園の代表ということになるな
デュエルアカデミア本校との対抗試合の」

「デュエルアカデミアとの対抗試合？」

デュエルアカデミア本校との対抗試合だと

「そうじゃ、こっちの代表が一年生になるだろうと言ったら
向こうも一年生を用意したそうじゃ」

「おまえ

俺が此処のキングになると最初から」

成程、仕組まれていたようなものか
こいつは本気で戦っていたが

「言つたろ？」

お前には人とは違った力があると」

「俺と戦う相手の名は？」

「確か、石崎あそびかる
いや、石崎ゆうかがやく」

「石崎？石崎遊輝か？」

「おう、そうそう
そいつじゃ」

「遊輝、ふふふふ
この俺にもう一度やつと戦うチャンスがきただと
ふっふっふふふふ、ふはっはっはっはっは
ふはっはっはっはっは」

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

万丈目のことも原作通り安心できそうだな

これで戻ってきたら、おジャマ系のカードを大量に渡して魔改造するかな

こりゃ楽しみだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604w/>

転生物語

2011年12月25日13時50分発行